
ボクがささえてあげるから

日下部良介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクがさえてあげるから

【Zコード】

Z0409E

【作者名】

日下部良介

【あらすじ】

伝説のガキ大将、西崎拓はある日夢か本当か分からぬけれど、不思議な老人に、15年後に運命の出会いをする女の子を支えてあげなければならないと告げられる。しかし、彼女三浦恭子を待ち受けていたのは・・・拓の覚悟は・・・そして、彼女の未来は・・・

健やかに育つてくれますよつこ

1・健やかに育つてくれますよつこ

時計の針は間もなく午後六時を指そうとしていた。

三浦孝幸は、さつきから何度も腕時計に手をやつしている。

もはや、仕事は手につかなくなっていた。

「おい、三浦、今日はもういいから早く帰れ。」

そんな孝幸の様子を見かねた所長の高橋が声をかけた。

「その調子で机の前にいたって、どうせ、仕事にならんだろう。」

孝幸は慌てて、取り繕うように電子計算機を叩き始めた。

「いえ、大丈夫です。今日中にあげる約束ですから。」

孝幸は、中堅の建設会社で技術者として働いている。

現在は都内の建設現場で主任として、所長の高橋の下で工事の統括を担当している。

一週間ほど前から、設計変更に伴つ、工事費の増減見積もりをまとめていた。

翌日から3連休となる、この日のうちに何とかまとめてしまったかったのだが、思った以上に手間を食つてしまつた。

工事現場での実務に時間をとられて、こつづけた事務的な作業はだいたい夕方の五時以降から実施することが多い、毎日残業してもなかなかはかどらなかつた。

しかし、孝幸はあともう一息といつとこじりまでじきつけていた。

この日は現場の作業が雨のため、午前中で切り上げになつた。おかげで午後からはみつちりと見積書の方に時間を割くことができたからだ。

ところが、夕方の四時頃、孝幸宛に電話が入った。

じつは、孝幸の妻、早紀は妊娠していて、そろそろいつ生まれてもおかしくない時期に入っていた。

電話の相手は早紀の母親の愛子からだった。

「孝幸さん？ お仕事中にじめんなさいね。恭子が産気づいて今病院に入ったから。」

「えっ？」

孝幸は、少しうるたえた。

そろそろだといふことは分かつていたし、また、楽しみにもしていた。

しかし、この2～3日は正直、すっかり忘れてしまっていた。
受話器の向こう側から、義母の声が冷静に現状の様子を伝えてくる。

「まあ、初めてだし、生まれてくるまではまだ時間がかかるだろうから、孝幸さんは仕事が終わってからゆっくりくればいいよ。」
そう言って病院の名前を告げた。

早紀がいつも定期健診を受けていた病院だった。

「よしつー！ とつと片付けちまうか。」

とは言つものの、気ばかり焦つて、よつやく集計が終わって、検算してみると、するたびに答えが違うのだ。

「あれつ？ おかしいなあ。」

腕時計を見ると、既に終業時間の五時はとうに回っていた。

「ちくしょうー！ どうなってるんだ？ これが合えば終わりなの！」

そこに所長の高橋から声がかかったのだ。

「おい、三浦、今日はもついいから早く帰れ。」

孝幸は慎重にゅつくりと一列ずつ確認しながら、電子計算機のキーを押していく。

3589825・・・更にもつ一度確認してみた。3589825。

「よし！ ピッタリだ。」

結局、最初に計算した数値が正しかった。

それから、端数を調整して経費を加え、設計変更に伴う工事費の見積もりが終了した。

「所長、終わりました。確認してください。」

「わかった。後は任せろ。だから、とつとつ行って来い。」

「ありがとうございます。」

高橋が手をあげて、追い返すしぐさをしながら、孝幸の方を見ると、孝幸は既に、ジャンパーを片手に出入り口のドアに手をかけていた。外に出て、ドアを閉めるとガラス越しに高橋に頭を下げて、スチール製の踏み板で出来ている仮設事務所の階段を駆け降りて行つた。高橋は、その“カンカンカン”という、リズミカルな音を聞きながらつぶやいた。

「まあ、初めての子じゃあ、無理もないな。」

聖都大学病院の産婦人科は15階立タワーの5階～8階を占める。受付と外来及び分娩室は5階で、6階～8階が病室になつていて。孝幸が受付に到着すると、義母の愛子が電話をかけているのが見えた。

孝幸は、一度、愛子の視界に入るよう回り込んでから軽く手を上げて合図した。

愛子は孝幸に気がつくと、頷いて、電話を終わらせてひと話をまとめ始めた。

「じゃあ、そう言つことだから、また電話するよ。」

愛子は受話器を電話機に戻すと、孝幸に微笑みかけた。

「ずいぶん早かつたわね。まだまだ生まれそうにないよ。」

「そうなんですか？」

「ああ。まあ。最初はだいたいこんなもんさ。あなたが来たなら、私は一旦家に戻つて入院の支度を整えて出直してくるわ。」

そう言つと、義母の愛子は孝幸をおいてエレベーターの中に消えて行つた。

孝幸はどうすればいいのかわからないまま、とりあえず、受付に行

つて、早紀が今どうでどうしているのかを聞いてみることにした。

「あのひ、三浦と申しますが…」

事務服を着た中年の女性が、孝幸を見て微笑みながら応えてくれた。

「三浦早紀さんの」主人ですね？」

「はい。どうして分かつたんですね？」

「あら？ 今、三浦っておっしゃったじゃありませんか。」

「ああ、そつか！」

孝幸は自分がかなり浮足立つていて、つむいたえんと同時にやんな自分を初対面の女性に見透かされたこと懲りと、なんだか急に恥ずかしくなってきた。

「初めてのお子さんだそうですね。おめでとうございます。」

「ありがとうございます。」

孝幸は、女性の顔を見ることができずに、横を向いて返事をした。受付の女性は、患者のリストをチエックしながら、孝幸に話しかけた。

「私も同じ名字ですから奥さんのことはよく覚えてしています。今は準備室にいると思こますから、もつ少し待つていて下さーね。」

「はい。」

孝幸は、そう返事をして、女性の胸に付けられたネームプレートを見た。

『三浦由紀子』と書いてあった。

良く見ると、それほど中年という感じではなかつた。

“早紀と回じくらこかもしれないなあ…”そんなことを思つていてるど、三浦さんは早紀がいる準備室の場所を教えてくれた。

孝幸は三浦さんに礼を言つて、早紀がいる準備室へ早足で向かつて行つた。

産気づいたと言つても、陣痛の間隔が短くなつて、その度に痛みが伴うので、担当の先生に相談してみたら「もう、一つ生まれてもおかしくない時期なので、思いきつていらっしゃい。病院に入れば、

赤ちゃんもその気になつて出てくることもありますから。」などと

言われたのでとりあえず、病院に来たのだった。

なので、母親の愛子と一人で、タクシーで来た。

病院に来てからは、しばらく落ち着いていたのだけれど、病院の空氣を感じているうちに、先生が言つたとおり、子供が出てきたがつているような気がしてきた。

「ねえ、お母さん、なんだか生まれそうな気がしてきたわ。

「いや、まだまだだよ。」

「そうかなあ…」

「一応、孝幸さんには連絡入れておいたからね。時期に来るんじやないかな。」

「どうかしら…このところ、毎日残業で、帰りも遅いから。」

「ばかだねえ。男なんでものは子供が生まれるなんて言つたら、仕事さぼつても飛んで来るもんだよ。」

「お父さんもそうだつたの？」

「うへん…あれは例外だね。出産に付き合ひどころか、あんた達のオムツも替えたことがなければ、ミルクをやつたこともないよ。1日中家にいたのに、本当に役立たずだったよ。その、お父さんに、一応電話してくるわね。さつきは家にいなかつたから、誰もいなくて心配してるとこないかい。」

「そうね。」

早紀は、愛子に手を振つてベッドに横になつた。

陣痛の間隔がだんだん短くなつてきた。

本当に、もうすぐ生まれそうな気がして、一人になるとなんだかとても心細くなつた。

しばらくすると、部屋のドアが開き、孝幸が入つてきた。

「早紀、大丈夫か？」

孝幸の顔を見たとたんに、安心した。

安心したら、急に激痛とともに、破水したような感覚に襲われたので、孝幸に確認した。

「破水したかもしれないんだけど、どうなってる?」

「えつ?」

孝幸は寝間着をめくつて見てみたが、もはや、冷静に対応できる状態ではなかつた。

「今、医者を呼んでくる。」

そう言つて、部屋を飛び出した。

早紀は、孝幸のつむたえようを見て、なんだか可笑しくなつた。手に持つていたナースコールのボタンを押して、状況を看護師に伝えた。

「今行きますから、ちょっとだけ我慢していて下せーね。」

すぐによみがえり、看護士が来て様子を見てくれた。

「意外と早く来ましたね。今から分娩室に入りましょー。」

孝幸は部屋を出たものの、どこへ行つて誰に言えばいいのかわからず、廊下をウロウロしていた。

こんな時に限つて、誰とも会わない。

ふと思いついて、せつきの受付に行つてみるとこした。

すると、『本田の診療は終了しました。』の札が掛けられていた。こうなると、もう、何をどうすればいいのか分からなくなつた。ちょうどその時、奥の通路を三浦さんが通るのが目に入った。

「三浦さん。」

孝幸はそう叫んで、奥の通路の方へ駆けだした。

「まあ、ご主人。病院の中は走つてはいけませんよ。」

「あつ!すみません。あの…ちょっとといいですか?」

「あら、わたし、既婚者からのお誘いはお受けできないんですよ。」

「…」

こんな時にこの人は何を勘違いしているんだ?

「それでは。」

そう言って立ち去り立つとする三浦由紀子の腕を捕まえて、孝幸は説明した。

「なんだ！ そうだったんですね。 だったらナースセンターへ行つた方が早いですよ。」

「その、 ナースセンターってどこにあるんですか？」

「準備室のお隣ですよ。 気がつきませんでしたか？」

「すみません。 ありがとうございます。」

孝幸は、一応、 礼を言つてナースセンターへ走りだしました。

背後から、「走らないで下さい。」 という声が聞こえたような気がしたが、 構つている余裕などなかつた。

ナースセンターにたどり着くと、 孝幸は開口一番こう叫んだ。

「破水したみたいなんですけど見てもらえませんか？」

近くにいた看護士に、「落ち着いてください。」 となだめられて、 孝幸は少し落ち着きを取り戻したが、 まだ、 興奮気味だった。

「まず、 お名前をし得ていただけますか？」

「はい、 三浦孝幸です。」

「それはあなたのお名前ですね。 破水したのはあなたですか？」

「何バカなこと言つてるんですね？ ボクが破水するわけないでしょう！」

「そうですね。 私もあなたの名前を聞いたつもりはないんですけど。」

そう言われて、 孝幸はようやく冷静さを取り戻した。

孝幸が落ち着いたとみると、 その看護士はにっこり笑つて、「三浦早紀さんの」 と主人ですね？」 と確認した。

「はい。」

孝幸が答えると、 手招きをして、 ナースステーションの中に招き入れた。

そして、 孝幸は看護師から帽子と防護服みたいなものを手渡された。

「奥様は今、 分娩室にお入りになられました。」 と案内しますので、 それを見ていただけますか？」

「えつ？分娩室ですか？」

「そうですよ。たぶん、『主人が部屋を出られた後に、奥様はナースコードを押して担当の看護士を呼んだようですね。』

「ナースコード？」

孝幸は、今までの自分の行動が何の役にも立たなかつたことにがっかりした。

「こんな、一生懸命なご主人がいてくれるなんて奥様はとても幸せですね。」

そう言われて、孝幸は少しだけ、自尊心を回復することができた。
「ありがとうございます。」

そう、礼を言つて、その看護士の顔をはじめてまともに眺めてみた。まだ、二十代の前半ではないかと思った。

こんな、娘に軽くあしらわれてしまつた自分はまだまだガキなんだと思いつつ、こんなに若いのに、これだけすうじい対応ができるこの娘はすごいなあと感心した。

“スースースー”そばで立ち会つてくれている看護士がそんな風に早紀を促している。

「はい、いきんで。」

けんめいにいきんで見せる早紀。

孝幸は、出産に立ち会つてはいるものの、何をしていいのか分からず、ただ、早紀の手を握りしめることしかできなかつた。

そんな孝幸を、看護士さんはにこやかに見守つている。

「ご主人、しつかりその手を握つてあげていて下さいね。」

それから何時間経つただろう？

良く覚えてはいないが、もしかしたら、30分くらいだつたかもしれない。

しかし、この子の産声だけはよく覚えている。

「ほら、もう少しですよ。がんばって！」

そう言われて早紀は最後の力を振り絞り、いきみ続けた。

すると、「オギャー」元気な産声とともに、一つの新しい命がこの世に誕生した。

孝幸はその瞬間腰を抜かして、その場にへたり込んだ。医師に手を差し出され、やつとの思いで立ち上がると、その場にいたすべての人たちから祝福された。

「おめでとうございます。女の子ですよ。」

「ご主人よく頑張りましたねえ。でも、いちばんのお手柄は奥さんですからね。」

孝幸は、早紀に歩み寄りねぎらうの言葉をかけた。

「よく頑張ったね。君は本当に偉いよ。それに比べたら、ボクなんか…」

孝幸の目からは、見る見る涙がこぼれ落ちてきた。その涙が、早紀のほっぺたに落ちた。

早紀はそれを舌でなめて「しょっぱいよ。」と孝幸を見つめた。

「ねえ、疲れたから、少し休むね。」

そいつて早紀は眼を閉じた。

「うそ。うそ。むつくり休めばいいよ。」

孝幸は保育器に入れられた自分と作の子供をずっと、飽きた」となく眺めていた。

「お母さんがあんなに苦労して産んでくれたんだ。健やかに育つてくれよ。」「そう思いながら、いつまでもその子の顔を眺めていた。

愛子はそんな孝幸を見て、早紀にこう言った。

「先が思いやられるね。一いやあ、この子が嫁に行く時は大変だよ！」

早紀も頷いて、応じた。

「やうね。」

運命の“あの人”、運命の“あの子”

2・運命の“あの人”、運命の“あの子”

首に風呂敷のマントをくくりつけて、ジヤングルジムの天辺で腕を組み、遠くを見つめているのは西崎拓^{にしざきたく}5歳。

幼稚園の年長で、春から小学校に上がる。

体も大きく力も強い。この幼稚園の、いわゆる番長格だ。

それでいて、思いやりがあり、年中、年少のチビ助たちからは絶大なる人気を誇る。

風呂敷のマントは今時珍しいスタイルだが、本人はそれが気に入っていて、お昼寝開けのお迎えまでの間はいつも、こうやってジヤングルジムの上で迎えが来るまでの間の時間を過ごしているのだ。

「タクちゃん、危ないから降りてらっしゃい。」

担任の真弓先生が声を掛けても知らぬ顔をして遠くを見つめている。それは、お迎えが来る道の方とはまるで違う方向なのだ。拓がいつも見ているのは日が沈む西の方角だ。

「タイショウ、何を見るの？」

一の子分の小山悠斗^{じやまねうと}がジヤングルジムに登ってきた。

「ゆうと、神様って本当にいると思うか?」「

「神様?」

「そうさ。ボクは絶対いると思う。」

「ボクも思うよ。クリスマスにプレゼントくれるもの。」

「バカ! それはサンタクロースだ。それに、そのサンタはたぶんゆうとのパパかママだ。」

「え~? 違うよ。だって、パパとママはボクの欲しいもの知らな

いのに、クリスマスの朝はちゃんとボクの欲しい物が枕元に置いてあるもん。」

「ゆうと、お前クリスマスの前にサンタに手紙を書くだろ？？」

「うん！」

「その手紙は誰がサンタに届けるんだ？」

「郵便屋さんでしょう？」

「じゃあ、お前サンタの家の住所知ってるのか？」

「ううん。だから、ママが住所書いてポストに入れるんだよ。」

「やっぱりそうか！それはたぶん、お前のママが、パパの会社に送つていいんだ。そしてその手紙を見たお前のパパがクリスマスイブの夜にプレゼント分かつて帰るのね。」

「タイショウ、それって本当なの？」

「ああ、多分な。」

悠斗は頭を抱えて悔しがった。

今までサンタクロースは本当にいると思っていたからだ。

今時、この歳までサンタクロースを信じているなんて、なんと純情な子供なのか…

「悠斗ーっ、帰るわよ。」

悠斗の母親が、迎えに来て、ジャングルジムのしたから呼んでいる。悠斗はタクの方を見て、もう一度確認するように首を傾げて見せた。拓は間違いないというように頷いて見せた。

母親に連れられて帰る悠斗が「ねえ、サンタって本当はパパなの？」と母親に尋ねる声と、「あら、知らなかつたの？」と素っ気なく答える母親の声が拓の耳に入ってきた。

間もなく、「タクーっ、おまたせー。」と叫ぶ声が聞こえてきた。タクの祖母、峰子だった。

タクの両親は共働きで、幼稚園のお迎えは、一緒に暮らしている祖母の役目だった。

母親が帰つてくるのは6時頃だ。

夕食の買い物をしてから帰つてくる。

帰つてくると、そそくかと食事の支度をして、出来上がる頃には父親も帰つてくる。

こうして、家族4人揃つて、食事をするのが西崎家の日課となつている。

食事が終わると、拓は決まつて父親と風呂にはいる。

その日幼稚園であったことを必ず話して聞かせるのだ。

風呂から上がると、みんなでテレビを見る。

そして、9時頃になると拓は布団にはいる。

ある日、拓が近所の公園で遊んでいたと、母ヒゲを生やしたおじいさんが現れて拓にこう言つた。

「西崎拓、良く聞け。今日、お口様が沈む方角にある町で一人の女の子が産まる。15年後にお前はそのこと仲良くなるじゃらう。そしてその女の子はそれから1年後に歩けなくなつてしまつじゃろう。お前は決してその子を見捨ててはいかんぞ。そして、お前が支えてやればきっと奇跡が起るじやろう。」

拓は、逃げたくても動くことが出来ず、そのおじいさんの話をずっと聞いていた。

体が動くようになつて、ハツと思つた瞬間には、既に、おじいさんは消えていた。

拓は辺りを見回したが、おじいさんの姿はどこにも見えなかつた。

それは2月の3連休前の金曜日の朝に見た夢だつた。

拓は、目がさめてからも、なんだか不思議な感覚が体の中でぐすぶつていてるような気がした。

そして、その日の夜、布団に入つてすぐに、『オギヤー』といふ、赤ちゃんの泣き声とセーラー服を着た女の子の顔が拓の頭の中をよぎつたのだ。

朝の夢に出てきたおじいさんが言つたのはこのことだつたんだ。

拓は、この日から、15年後に知り合つことになるであろうセーラー服の女の子の顔を忘れることはなかつた。

そして、幼いながらに「今よりもっと強くならなきゃ。」と思つ
ようになつていた。

小学校にはいると、近くにある警察の道場で剣道を習い始めた。
拓の父親の勝も大学まで剣道をやつていて、一段の腕前まわいだった。
学校では友達がいじめられると、相手が上級生でも食つてかか
つた。

体格にも恵まれていたので三年生くらいまでなら互角に渡り合つた。
家に帰つて、風呂で父に話しかけると、ことのほか誉められた。
それが嬉しくて、喧嘩と剣道に励んだ。
しかし、勉強も頑張つた。

成績は常に上位10番くらいには入つていた。
通知票でも2と1はもらつたことがなかつた。

小学校の上級生になると、廻りの他の小学校でも“第五小に西崎あり”といつ評判がたち、六年生になると、地区の陸上・水泳の競技会で1位を5種目で取つた。

特に、100m走では区大会でも優勝して都大会に出場したが、風邪をこじらせ、惜しくも予選で敗退した。

噂を聞きつけた私立中学から「是非うちの陸上部へ。」といつたスカウトの話が何件があつた。

両親、特に父親は私立にやりたかつたようだが、拓がどうしても地元の中学校に行きたいと言い張つたので、両親は拓の意見を尊重して地元の公立中学に進学させた。

中学にはいると、拓は陸上部に入部した。

部活が休みの土・日には、剣道の道場に通うことも続けた。
サッカー部に入った小山悠斗とは今でも、親友と呼べる仲だつた。
拓がトラックを走つていると、悠斗が横に並んで併走を始めた。
拓は悠斗に合わせてペースを落とした。

「なあ、拓。あの話し、まだ信じてるのか？」

拓は悠斗にだけは、あの白いヒゲのおじいさんの話をしていた。

「ああ、あれはただの夢なんかじゃない。ただの夢にしちゃあ、リアルすぎる。」

「お前が私立のスカウトを蹴つて、ここに来たのもそのせいなんだろ？」「

「まあな！彼女が来ていたセーラー服はここ制服だつた。」

「気のせいじゃないのか？だって、彼女はずつと西の町に住んでいるんだろう？中学になつたらこの町に引っ越して来るとでも言うのかねえ？例えそうでも、彼女がここに入つてくるときには、俺たちもう卒業しているだろ？」「

「確かにそうだが、あの時の彼女がここ制服を着ていたのは、俺にここへ来いというメッセージなんだと思う。」

「オーケー！何かあつたらいつでも力になるぜ、大将。」

そう言うと悠斗はファイールドのセンターサークルの方に向かって口一スをそれでいった。

拓は悠斗に手を振り、再びペースを上げた。

ここ数年で、この町でも、高層のマンションがいくつも建ち並んで、人工が急激に増加した。

昔からこの町に住んでいる人たちに交じつて、よその土地から移ってきた新住民の割合がかなり多くなった。

三浦家も、恭子が生まれた後に一人の子供が産まれて、今住んでいるマンションが手狭になつてきたため、この町の高層マンションの4LDKのファミリータイプの広めの部屋を購入することにした。恭子が小学校4年の時に引っ越しきていた。

恭子たちが引っ越ししてきたのは第三小の学区域だつたため、恭子たち兄弟は三人揃つて第三小学校に転校した。

恭子が転校してきたときにも、まだ、“伝説のガキ大将、西崎拓”的名前は語り継がれていた。

その名前を耳にしたとき、恭子の脳裏にある記憶がよみがえった。

“にしざきたく”…なぜだかわからないけれど、懐かしい響きが

する。

そして、その名前には心地よい安らぎを覚えたのである。

恭子は、いつかその人がわたしの前に現れるに違いない…ふとそんな気がした。

転校して最初に友達になつた野々村ののむら仁美ひとみに、放課後誰もいなくなつた教室で、西崎拓にしざきつてどんな人だつたのかを聞いてみた。

「お兄ちゃんの同級生どうきゅうせいがその人の親友しゆゆうだつて聞いたんだけど、お兄ちゃんはあまり知らないみたいだから。役に立てなくてごめんね。でも、どうして？その人のことが気になるの？」

仁美は教室の後ろの方の窓際の壁にもたれかかつて恭子の方を見た。

「うん、ちょっとね…」

恭子も窓に近づいて、仁美と並んで壁にもたれかかつた。

「なんか訳あり？」

恭子は体を反転させて窓から外の景色を眺めながらつぶやいた。

「わたしね、“那人”的こと、生まれる前から知っていたの。」

仁美は驚いて恭子の横顔を見つめた。

そして、気を取り直して聞き返した。

「なにそれ？前世ぜいせいがどうとか、そういう系��？」

「ちょっと違うんだけど…わたしにも良く分からないわ。ただ、“那人”がわたしの運命を左右する人かもしれないの。」

「ふうん？なんか変なの。」

「そうね。」

校庭からは、どこか遠くを見つめる恭子と、後姿の仁美が並んで立っているのが見えた。

拓は、恭子と恭子の家族がこの町に引っ越してきていることなど知る由もなかつた。

まして、恭子の名前さえ知らなかつた。

拓が知つているのは、15歳になつた恭子の顔だけだ。

今的小学校4年生の恭子と道で偶然すれ違つたとしても、それが恭

子だとは気がつかないだろう。

この年、拓は中学校を卒業する。

あれから10年が過ぎようとしている。

計算上、“あの子”は今、小学校の4年か5年…いや、4年だ。

ここ（拓が通うこの中学校）には、どんなたちで来るんだろうか？
もしかしたら、もうこの町にいるかもしない。

例えば、あの新しいマンションのどれかに引っ越してきているかも
しない。

だとしたら、第三小か第四小、第五小に通っているはずだ。

拓は、自分の母校でもある第五小の校門の前に来てみた。

ちょうど、下校中の児童達が出てくるところだった。

“あの子”の面影のある子はいないか出てくる子を一人一人確認し
てみた。

似た感じがする子は何人かいたが、どれも違う子だった。

拓には、そう確信できた。

しばらく眺めていると、懐かしくなり、正門から校庭の方へと歩い
ていった。

すると、校舎の方から拓を呼ぶ声が聞こえてきた。

「お~い！西崎君じゃないか？」

拓が振り向くと、体育教師の野村が手を振っていた。

「今、そっち行くからちょっと待つてる。」

野村はそう言いつと、ニッコリ笑って窓を閉めた。

拓が在学中、野村は5・6年の担任だった。

そして、陸上の基礎を拓に教えたのも野村だった。

拓は校庭を端から端まで見渡してみる。

なんだか少し狭く感じる。

野村はすぐにやってきた。

「お久しぶりです。」

「おう！元気そうじやないか？ずいぶん頑張ってるみたいだなあ。」

「ええ、おかげさまで。それより、この校庭ってこんなに狭かつた

かなあ？」

「ああ。卒業した連中はみんなそう言つけど、校庭はひつとも変つてない。お前たちがでかくなつたからそう感じるだけだ。ところどころはどつしたんだ？」

「なんだか懐かしくなつて……」

拓の表情が心なしか暗いような気がしたので、野村は心配になつた。

「なんかあつたのか？」

「えつ？ いや、別に……」

「そうか？ それならいいが……そつにえれば今年は受験だらう・どつだつた？」

「推薦で城東第一に決まりましたよ。」

「そうか、一校に決まつたか！ お前なら当然だな。」

「はい。」

拓は、当然の結果だとつよいに胸を張つて答えた。

「こいつ！」

野村は呆れて、拓の背中をポンと叩いた。

「まあ、先生のおあげですよ。先生が陸上を教えてくれなかつたら、推薦はなかつたですよ。」

拓と野村はしばらく立ち話をした後、別れた。

拓は、学校の近くの公園でブランコに腰を降ろし、軽く漕いでみた。思えば、あの白いヒゲのおじいさんに会つたのが、まさにこの場所だつた。

「せめて名前だけでもわかれればなあ……」

拓は、高校に進学しても陸上部に入った。

城東第一高校は、陸上の名門校で都内はおろか、関東各地の中学校から優秀な選手が集まつてくる。

そして都内有数の進学校もある。

中学では、関東大会まで行つた拓でも、代表になるのは至難のわざだったが、1年の秋には100×4のリレーメンバーに選ばれた。

勉強の成績も400人いる学年の中で、常に50番以内を確保していた。

もちろん才能もあったに違いないが、拓は努力することを惜しまなかつた。

“あの子”が現れた時に、ちゃんとさせられてやれる男になつていなくてはいけない。

その思いだけで、人一倍頑張ることができたのだ。

もしかしたら、“あの子”は現れないかも知れない……そう思つたことも何度かある。

しかし、拓は信じ続けた。

だからこそ、今の拓がある。

そして、その事実こそが本当に起つた運命の証であると拓は信じた。

“あの子”と出会つのは拓が大学1年の学年末、そして“あの子”は中学3年の卒業前ということになる。
あと3年…

2年の春期大会で拓は100mの代表になり、日本記録に近いタイムで都大会を優勝した。

全国の切符を手に入れたと同時に、一躍陸上界のスターになつた。

そんな時、小学校の恩師、野村から声がかかった。

「区の連合陸上大会に参加する子供たちのコーチをやつてもらえないか?」というものだった。

高校の顧問からは了解を得ているということだったので、快く引き受けた。

野村の話だと、6年生を中心に第五小のグランドで、第三小、大四小の子供たちと合同練習を実施することになつていて、うらしい。もしかしたら、“あの子”に会えるかもしれない。
そんな期待をしたのも、引き受けた理由の一つだった。

“伝説のガキ大将、西崎拓”はもはやこの町のヒーローだった。

恭子の家族もみんな拓のことを知っていた。

特に父親の孝幸は、拓が日本記録を更新してオリンピックの代表になるだろうとスポーツニュースで取り上げられて以来、大のファンになってしまった。

「お前たち、この町の引っ越してきてよかつたなあ。オリンピックランナーの後輩になれるんだからなあ。」

「まだオリンピックに行つてもいいし、日本記録も更新してませんから。」

恭子が冷静に言うと、孝幸はむきになった。

「いや、絶対間違いない。あいつなら必ずやつてくれるよ。もしかしたら、恭子だって、西崎君のお嫁さんになれるかもしれないんだぞ。」

「いやだあ！お父さんつたら。」

この頃は、そんな会話がどここの家でも交わされていたに違いない。しかし、恭子はひそかに思っていた。
もしかしたら、案外そんなことになるかもしれない……と。

6年になつた恭子は、春の運動会でリレーの選手に選ばれ、3位でバトンを受け取ると、前の一人をあつという間に抜き去り、トップでアンカーの男子にバトンを渡した。

アンカーの男子がゴール直前で抜き返されて、恭子のチームは2着に終わったが、恭子のタイムは男子より早かった。

当然、連合陸上大会では100mとリレーの選手に選ばれた。

そして、ニュースは突然やってきた。
第五小での合同練習に西崎拓が臨時コーチとしてやって来る…といふものだった。

恭子は胸がドキドキして、押しつぶされそうになつた。

“あの人”に会える…

合同練習の前日、下足箱で靴を履き替えていた、仁美が声をかけ

てきた。

「一緒に帰る?」

恭子は笑顔で仁美を見てうなずた。

「心ここにあらずつて感じね。」

仁美にそう言わると恭子は自然に顔がほころんでいくを感じて下を向いた。

「やつと会えるね!」

「うん。」

「私も練習見に行つてもいい?」

恭子も仁美はバレーボールのクラブに入つていたが、仁美の方は走るのが苦手だった。

運動会の100m競争もビリだつた。

「練習じゃなくて、『あの人』を見に来るんでしょう?」

「へへつ!ばれたか。」

恭子は靴を履き替えると、とつとと玄関に向かつて歩き出した。

「モタモタしてると置いて行くわよ。」

「あつ、まつてよ。」

仁美もあわてて靴を履き換え、ケンケンして、つま先を蹴りながら恭子の後を追つてくる。

「知ってる? 西崎拓つて、第五小で野村先生に陸上を教わったんだつて。」

「知ってるよ。」

「なうんだ。」

仁美は、恭子が住むマンションの近くにある居酒屋の一人娘だった。その居酒屋のマスター…つまり、仁美の父親が第三小のバレーボールチームの監督なのだ。

恭子も転校してきたときに、仁美からバレーボールに誘われてチームに入ることにした。

背の高い仁美と違つて、恭子はどちらかというと小柄なほうだったので、6年生になった時、限界を感じてバレーボールはやめてしま

つた。

しかし、バレー ボールのトレーニングで走り込みをやつていたおかげで、走るのだけは早くなつた。

恭子は歩きながら、仁美にずっと顔を見られているよつたがした。だけど、振り向いて目が合つてしまつたら、ぱつが悪いと思つたら前を見ているしかなかつた。

自然と歩く速度が早くなつていつた。

「ねえ、恭子ちゃん、なんか怒つてるの？」

仁美にそう言われて恭子は立ち止つた。

「ごめんなさい。なんか、恥ずかしくて…」

「わかる、わかる。私もそんな人がいたら、きっと胸がドキドキして倒れちゃうわ。」

それからは、あれこれ、仁美の恋愛観などを聞かされながら歩いた。仁美の家の前で別れて、恭子はマンションのエントランスへ向かつた。

オートロックの操作パネルにルームキーを差し込むと、エントランスの扉が開いた。

エレベーターホールに来ると、2台のエレベーターの間にある掲示板に合同練習の案内が貼つてあつた。

“臨時コーチ、西崎拓”の文字が大きく書かれていた。

「うわー！」

恭子は、あすの合同練習には見物人が山ほど来るかもしれないと思つた。

午前中の校庭では少年サッカーの練習が行われていた。

連合陸上大会の合同練習は午後3時からだつたが、拓は久しぶりに悠斗に会つたためにお昼前のこの時間に学校へ來た。

悠斗は、サッカーの名門校へ進学し、1年でレギュラーの座をつかみとつた。

しかし、冬の全国選手権で対戦した相手チームの選手に足を踏まれ、

骨折。

日常生活には影響がないほど回復はしたが、サッカー選手としての再帰は望めないと知り、サッカー部を退部して、今は土日限定で母校の少年チームの臨時コーチをやっている。

終了の合図のホイッスルが鳴ると、将来の「リーガー」や日本代表になるかもしない子供たちが監督の野村先生の前に集まってきた。野村先生の横に立っているのが悠斗だった。

何やら、子供たちに一言、二言、説教しているようだが、拓のところまではその声は聞こえなかつた。

子供たちが、そのたびに声を揃えて「はいっ！」と言つのだけがはつきりと聞こえてくる。

そして最後に「ありがとうございました。」と子供たちが頭を下げる、各々迎えに来ている保護者の方へ散らばつて行つた。それを見届けるようにして、悠斗と野村先生が近付いて来る。

子供を連れて拓の横を通り過ぎる母親たちは、例外なく拓に「がんばってね。」とか「応援してるわよ。」などと声を掛けて行く。さすがに、地元のヒーローだけあって、拓を知らないものなどこの町には存在しないようだつた。

「こりやあ、悪いことなんかできないな。」

拓はそう思つて苦笑いした。

そして、悠斗が手を挙げてハイタッチを求めながら拓のそばにやつてきた。

拓も手を挙げ、応えた。

「よし！大将。」

そう言つて、悠斗は思いつきり拓の手のひらを引っ叩いた。

「あいたつ！」

拓は思わず手を引っ込め、もう片方の手で引っ叩かれた手をさすつた。

「相変わらずだなあ。元気そうで安心したよ。」

その後ろから笑いながら野村先生が声をかけた。

「久しぶりに飯でも食いに行こつか？」

「まさか、それって今日の日当のつもりですか？」

拓が「冗談で言うと、野村はマジマジと頭を下げて手を合わせた。

「日本一のランナーに飯一杯でコーチを頼むなんて本当に悪いと思つていいんだ。」

そんな野村を見た拓と悠斗は、「先生、冗談だよ。」と、腹を抱えて笑つた。

「それにまだ、日本一にはなつてませんから。」

拓の言葉に安心した野村は行きつけの中華料理屋に一人を案内した。

店に入ると、野村はまず餃子を一人前と野菜いためライスに生ビールを注文した。

「これは内緒だぞ。」

野村はそう言つて、生ビールのジョッキを指した。

「じゃあ、俺も他のもかな？」

悠斗が言つと、「ばか！未成年のくせにふざけるな！」と、野村に頭を小突かれた。

「まったく冗談の分らん人だなあ。なあ、大将！」

拓は笑いをこらえて頷いた。

「まあいい、お前たちも早く好きなものを頼め。大きな声では言えないが、こここの店は頼んでから出てくるまでに、相当時間がかかるんだ。」

そう、小声で言つ野村のうしろから店主の声が聞こえてきた。

「先生、聞こえますよ。遅いのが嫌なら他の店に行つてもいいんですねよ。」

野村は咳払いして、二人にウインクした。

「耳だけはやたら地よく聞こえるみたいだな」

再び、厨房の奥から「なんか言つたか～？」と、声が聞こえてきた。三人は顔を見合させて、思わず噴出した。

恭子の家でも昼食を取つて いた。

恭子は父親が大騒ぎすると思つたから、合同練習の臨時コーチに西崎拓が来ることは言わないでおいた。

ところが、エレベーターホールの掲示板に貼られてある案内を孝幸が見逃すはずはない。

案の定、今日の練習を見に来るつもりでいるらしい。

「お父さん、やつぱり見に来るよねえ？」

「当たり前じやないか！大事な娘がオリンピックランナーに見初められるかもしれないんだからなあ。」

「あなた、変なことしないで下さいね。恥ずかしい思いをするのは恭子なんですからねえ。」

「お前たち一人揃つて、いつたい俺をなんだと思っているんだ？」

「まあ、あなたはご自分をなんだと思っているのかしら？」

「ん？まあ、なんだ… よき父親とでもいうか…」

「そうですね。あなたはとてもよき父親ですよ。ですから、優子と浩人も一緒に連れて行つてあげてくださいな。」

恭子たちが第五小に着くと、校庭の周囲は見物人でいっぱいだった。

地元のケーブルテレビまで取材に来ていた。

恭子は、同じ第三小の友達と引率の先生と一緒に練習が始まることを待つた。

しばらくすると、校門の方がざわついて來た。

野村先生と二人の高校生らしき男の人とが歩いて來るのが見えた。

野村先生の左側の人…

間違いない“あの人”だ。

運命の出会い

3・運命の出会い

拓たちが学校に戻ると、校庭の周囲にはかなりの人だからりが出来ていた。

「何だ？ この人だからは。なんか面白いことでもやるのか？」

「何を人事みたいに言つてるんだ？ みんな、お前を見に来たに決まつてるじゃないか！」

拓は正直驚いた。

高校では、これほどスター扱いされることではなく、一步間違えば、代表の座さえ危ういのだ。

実際、都大会クラスのランナーは数人いる。

拓たちのようにある程度完成されたクラスになると、0・01秒の壁がどれほど高いものなのかは、所詮素人にはわからないのだ。

それが、ちょっとテレビで取り上げられただけでこの騒ぎだ。

ただ、拓にしてみれば、こんな風にもてはやされるのは心地いいものだと思っていた。

それだけに、全国で無様な走りをしようものなら、何と言われるか… 考えただけでも、ぞつとする。

もし、そんなことになつたら、当分家に帰つてこられないな…

合同練習の主催者でもあり、この地区では指導者としても評価の高い野村が挨拶をしてから、拓を紹介した。

「ボクは第五小でこの野村先生に陸上を教えてもらつたのがきっかけで本格的に走るようになりました。いわば、野村先生に出会わなければ、今のボクはありませんでした。みんなも、野村先生に教え

てもらえることはすごく幸せなことだと思います。今日は野村先生のお手伝いをさせていただきますのでよろしくお願ひします。」

拓が挨拶を終えると、周囲から嵐のよくな拍手と、歓声が上がった。

野村が拡声器を使って、予想外の見物者たちに注意を促した。

それから、各学校の引率の先生を集めて、子供達を種目別に振り分けた。

子供たちはそれぞれの学校の体操着を着ていて、どの子もな名前を描いた布を胸に貼っている。

拓は、第三小の体操着が今でも変わっていないのを確認すると、懐かしさにとともに安心感を覚えた。

第五小の野村が長距離走、第三小の小林先生が投擲競技を、第四小の唐沢先生が跳躍競技を指導することになった。

拓と飛び入り参加の悠斗で短距離を教えることになった。

全員で準備運動をして、1週200mのトラックをゆっくり2週ほど走つてから、それぞれの種目別に分かれての練習が始まった。

短距離の選手は、各校男女一人ずつの12人。

とりあえず、各自の実力を見たかったので、一人ずつ50m走をやつしてもらうこととした。

悠斗にタイムを計つてもうことにして、拓は一人一人のフォームや走るときの癖をチェックした。

野村の指導を受けているだけあって、第五小の子供たちはタイムもフォームも申し分なかつた。

なかでも、長谷部と書かれた布を貼っている男子は、この時期の子供にしてはかなりいいセンスをしていた。

才能があるというのはこういう子のことと言つんだろうな…と拓は思つた。

話を聞いてみると、陸上競技が盛んな私立の中学校に進むということだった。

第五小の子供たちに比べると、他の学校の子供たちはフォームもバ

ラバラで教えるのがありそだつた。

全員が走り終わつたところで、悠斗が拓のところに走り寄つてきた。悠斗は、驚いたといづような表情でタイムを記録した表を見せてこう言つた。

それを見た拓も、一瞬目を細め、悠斗に確認した。

「お前、計り間違えたんぢやないのか？」

悠斗は首を左右に振つて、否定した。

「断じてない。なんなら、もう一度、彼女には知つてもらえればいいぢやないか？」

拓は“三浦”と書かれた布を付けている少女を捜した。

少女はすぐに見つかつた。

第三小の体操着を着て、一いちらをじつと見ていた。

拓は彼女を手招きした。

「三浦さん？ ちよつといい？」

そつ言つて悠斗からストップウォッチを取り上げた。

「お前、他の子たちに、もも上げ特訓やらせといてくれ。」

もも上げ特訓とは、拓と悠斗が中学の時、教育実習で来ていた体育教師の卵に早く走る方法として教えられたものだつた。

文字どおり、モモを高くあげてスキップするように走る練習方法だ。

「了解！」

そつ言つと悠斗は三浦と書いた布を貼つた女の子以外の子供たちを集めめた。

恭子は、拓にアピールしようとか、“あの話”をしようとかいう気持ちちは全くなかつた。

今はまだ、その時期ではないと感じていたからだ。

ただ、“あの人”的顔をその目に焼き付けておきたかつた。

テレビや新聞の写真では何度も見たが、实物を見るのはこれが初めてだつた。

そして、振り向いた拓と目が合つと、拓が手招きしていたので、辺

りを見回してから、拓の方に向き直り、自分を指して、読んでいるのが自分なのかを確認した。

拓は頷いて、恭子の名を呼んだ。

「三浦さん、ごめんね。ちょっとタイムを計り間違えたみたいだから、もう一度走つてもらつていいかな?」

「わかりました。」

恭子は頷いて、スタートラインの方に歩いて行つた。ゴールラインに着いた拓がピストルを高くあげてスタートの用意を促した。

恭子はクラウチングスタイルでピストルの先端を見つめた。白い煙が上がるのと同時にスタートした。

その瞬間、パンと鳴り響く音が辺りにこだました。

拓は、恭子のスタートを見て、抜群の集中力とタイミングの良さに感心した。

荒削りだが、前傾姿勢で、足も高く上がつている。

恭子の走りは、こつして見ていると、さつきとは違つて何かにひきつけられて行くよな気がした。そんな感覚に見舞われているうちに、恭子はみるみるゴールに迫つてくる。

そして、あつとこつ間にゴールを駆け抜け抜けて行つた。

先ほど、悠斗がしましたタイムよりも0・02秒速いタイムだった。

「これは…」

拓は、ふと、長距離の選手たちにフォームの型を教えている野村の方を見た。

野村はすぐに拓の様子に気がついた。

「はい。じゃあ、そんな感じでちょっと走つてみようか。トラックをゆっくりでいいから3週走つてみて。」

そう言つて子供たちをトラックに送り出すと、拓の方に駆け寄つた。

「どうした?」

拓は野村にストップウォッチを見せた。

「先生これを見てください。」

「ほ～う！大したタイムじゃないか。どこの子だ？」

野村が感心してると、ゴールを駆け抜けて、校門の近くまで走つていつた恭子が戻ってきた。

「今度はちゃんと計れましたか？」

声の主を見て野村は驚き、拓を見た。

「まさか…」

「はい。」

恭子は、きょとんとした表情で一人を交互に眺めた。

拓は久しぶりに自宅に戻つていた。

普段は、高校の体育寮に入つていて、土・日も練習があるので、通常は月1回の連休の時くらいしか自宅には帰らない。

この日は特別に次の日の練習も休みを許可されていたので、自宅でくつろぐことにした。

拓の部屋は、高校に入る前ままで、入試のための参考書などがぎっしり詰まつた本棚に混じつて陸上競技の雑誌や専門書が陳列されている。

拓は、ポケットアルバムを何冊か手に取つて、懐かしい写真を眺めてみた。

幼稚園のジャングルジムの天辺で、夕陽を受けながら風呂敷のマントを首にまいた自分の姿を見て、思わず吹き出してしまつたが、すぐに寛へに戻つて窓の外を見た。

窓からは沈んでいく太陽の日差しが入つてきていた。あの頃見ていた西の空と同じ夕陽だった。

今日の合同練習は、久しぶりに、のびのびとした気持ちで陸上に接することができ、有意義で大いに収穫もあつた。

三浦恭子という女の子の才能には本当に驚かされた。最初の50m走では、女子の中では抜群のタイムだった。

男子を含めても、レベルの高い第五小の一人と遜色がなかつた。

その後の練習で、ちょっとしたアドバイスをすると、すぐに走る“コツ”をつかんだようだつた。

練習終了前にもう一度50m走のタイムを計つたら、どの選手も0.01～0.1秒程度は早く走れうようになつてゐた。しかし、三浦恭子は特別だつた。

タイムだけなら、今日集まつたどの子よりもいいタイムを叩き出した。

もちろん、男女含めての話だ。

連合陸上大会で走れば、彼女のもとに名門校と言われる学校のスカラたちが群がるに違ひない。

これは、ちょっととした楽しみができた。

拓は、自分のことのように嬉しくて仕方がなかつた。

そして、この日いちばん大きな収穫だつたのは、“あの子”的な前を知ることができたことだ。

“あの子”は拓が予想した通り、少し前にこの町に引っ越ししてきたのだ。

三浦家では、恭子の父親孝幸が興奮して話している。

「でかしたぞ、恭子。あの、西崎拓に見初められるとは大したもんだ。」

「見初められるってなんなの？」

恭子は、うざつたそうに孝幸を睨み返した。

「そんなんに西崎拓が気に入つたのならお父さんが結婚すればいいでしょう！」

「なにを悠長なことを言つているんだ？このチャンスを逃す手はないぞ。他の誰かに持つていかれないように今からつばを付けておいても損はないと言つてるんだ。」

晩酌のビールを飲みながら、ほろ酔い気分の孝幸は田をワクワクさせて夢を膨らませている。

「お父さんつたらいい加減にしたら？恭子はまだ小学生なんだから。

「何を言つんだ、戦国時代や江戸時代には1・2・3で嫁に行くのは

当たり前だつたんだぞ。」

「今は江戸時代でもなければ、戦国時代でもないでしょ？いい加減にその話はもうやめにしましょ。まあ、御飯よ。」

孝幸は、グラスに残つたビールを飲み干すと、しぶしぶこの話題を切り上げた。

「第五小の野村先生と拓さんに、ちゃんとした先生について練習すれば、高校生くらいまでには全国大会に出られるようになるかもしないって言われたわ。今度の連合陸上大会くらいなら軽く優勝できるかもしれないって。」

恭子は大皿に盛られたサラダを自分の小皿にとりながら自慢げに話した。

「足が速いのはお母さんに似たんだな。お母さんも、高校生の時にインターネットに出てるんだぞ。」

孝幸が言つた。

「そつなのー知らなかつたよ。」

恭子は驚いて母親の早紀を見た。

早紀は照れ臭そうに、優子と浩人の皿にサラダを取り分けていた。

「赤ピーマンは入れないでね。」優子が注文を付ける。

「好き嫌いはダメよ。」早紀は優子をたしなめ赤ピーマンの入ったサラダの皿を優子に渡した。

優子は恭子の妹で小学校4年生だ。

「俺、ピーマン大好き。」

弟の浩人が言つた。

「浩人は何でも食べるから偉いね。」早紀に褒められると、自慢げに優子の方を見る。

浩人は小学校の2年生だ。

「ところで、恭子、中学はどうするんだ？」

孝幸が聞いた。

孝幸は、この町に引っ越してきてから、積極的に町会の行事に参加している。

そのため、町会のお偉いさん達ともひたしくなっていた。

実は、今日の合同練習を見に来ていた町会長が、野村先生から私立の中学校のスカウトが恭子を勧誘に来るというような話を聞いたと聞かされていたため、恭子が望めば、陸上競技の名門校といわれる私立中学への進学も考えはじめていたのだ。

そんな孝幸の考えなど知つてか知らずか、恭子はあっけなく「一中に行くよ。」と答えた。

一中というのは、もちろん、地元の公立中学校で、拓の母校でもある。

練習が終わつた後は、拓の周りにサインを求めたり、写真を撮らせてほしいという、保護者達が群がってきた。

拓は、丁寧にこれらの人たちの希望を聞き入れてやることにした。

そんな中、一人の少女に意外な話を聞かされたのだ。

その少女は、どこで手に入れたのか、拓の写真を持って来てサインをねだつた。

「伝説のガキ大将、西崎拓さんですよね。」

拓が卒業した後、第五小でそんなうわさ話がささやかれ始めていたのは拓も知っていた。

まさか、今でも語り継がれているとは思わなかつたので、照れ臭そうに苦笑いした。

その少女は、拓に写真とサインペンを渡すと、こう告げた。

「運命の人へつて書いてください。」

拓は一瞬、心臓が止まりそうになつた。

「まさか…」 そう思ったものの、気を取り直して、少女の顔を見つめた。

“あの子”の面影はどこにもない。

この少女がそんな風に言つたのは、ただの偶然か、もしくはミーア

一的な発想からのことだらうと考え直した。

ところが、その少女は言葉をつづけた。

「恭子にあげるんです。拓さん、恭子はどうでした？あの子つたら、おかしいんですよ。拓さんのこと、生まれる前からしていただつていうんだもの。」

ペンを持った拓の手が止まつた。

「キョウコつて？」

「今日、練習で教えたでしょ？二浦恭子よ。」

拓は愕然とした。

辺りを見回し、恭子の姿を捜してみたが、どこにも見当たらなかつた。

もづ、帰つてしまつたらしい。

「ねえ、早くサインして。」

少女に促されて、拓は再びペンを走らせた。
そして、サインをした後にこう付け加えた。

“何があつてもボクがささえてあげるから…信じて”
写真を受け取つた少女は拓が付け加えた言葉を読んで、一ヶコリ笑つた。

「最後の言葉、私には意味が分からぬけど、恭子なら、きっと喜ぶわ。」

そして、拓に礼を言つと、小走りにその場を去つた。
走り去る少女の後姿を拓は、ただ、ぼーっと見つめていた。

彼女はボクのことを知つていた…

なのに名乗らなかつた。

どうしてだらう？

部屋の窓から夕陽を見つめながら考えた。

ボクが思つていた人間とは違つたからか？それとも…
いくら考へても、納得のいく答えを見つけることは出来なかつた。
何か理由があることは間違ひないはずだ。

だが、やつとわかった。

“あの子”の名前は三浦恭子。

これからは、直接会うことなどがなくとも、見守つてやることができる。今後、彼女の身に何が起つるのかはわからないが、とにかく今は見守つてやることしか拓には出来ない。

白いヒゲのおじいさんの予言だと、恭子とひたしくなるのはもう少し先になる。

どんな経緯でそういうのかは想像がつかないが、あの予言が、どうやら真実であることがはつきりと見えてきた。

野々村仁美は、翌日の月曜日にバレーボールの練習試合があつたため、恭子に拓のサイン入り写真を渡したのは月曜日になつてからだつた。

「恭子！土曜日の合同練習、よかつたね。“あの人”どうだつた？」恭子と仁美は、恭子が転校してきた4年の時からずっと同じくラスで、出席番号も16番と17番で、席も、前と後だつた。

仁美は後ろ向きに椅子に座り、背もたれに両腕をおいて、恭子の顔を下から覗き込むようにして尋ねた。

恭子は、机に両肘をついて両手で顔を支えるようにした。

「拓さんつて、すごいね。あの人のアドバイスの通りに走つたらすぐ早く走れたのよ。」

仁美は、恭子を睨み付けて、違う、違うといつ風に首を振つた。

「もうじやなくて、告白しなかつたの？」

「わざわざ言わなくても、その時になれば自然と近くにいけると思つたから。」

「そんなことだらうと思つたよ。」

仁美は、やれやれというように両手を上げて、自分のカバンから一枚の写真を出して恭子の机の上に置いた。

その写真を見た恭子の表情を仁美はニヤニヤして眺めていた。

「仁美！あなた…」

“‘あの人’運命のこと知つてたよ。でも、それがあなただつてことは知らなかつたみたいだけど…驚いてたし。”

「どうして、そんな余計なことをしたの？」

「あら？ ジヤあ、これはいらないのね。」

仁美が写真をしまおうとした瞬間、恭子の手がさつと写真をさらつていつた。

「それとこれとは別。仁美、ありがとう。」

恭子は、写真に書かれたメッセージを心に刻んだ。

“何があつてもボクがさえてあげるから…信じて”

初めての金メダル

4・初めての金メダル

東京湾の埋立地。昔は「ゴミ捨て場だった地域だ。

近年、この地域に高層の共同住宅や大規模なショッピングセンターが進出し始めた。

恭子の父孝之が勤めている会社が、その中のプロジェクトの一つを請け負った。

会社の命運をかけると言つても大げさではないこのプロジェクトに会社側は孝之をプロジェクトリーダーとして、任命した。

孝之はプロジェクトの細部にまで細心の注意を払い、工事着工までに作業工程の計画から、初期作業における業者選定、資材の発注や製作物の図面承認、関係官庁への工事に必要な手続き等を完了させなくてはならなかつた。

そう言つた作業は、工事に入つてからも順次行わなければならなかつた。

孝之は5人の部下とともに、着工と同時に建設現場に常駐していた。

この日は朝からそわそわしていた。

朝礼の後は事務所で席について、パソコンの電源を入れると、現状までの工事予算収支を確認していた。

が、集中できずに何度も入力ミスを繰り返してはブツブツと独り言を言つていた。

「所長、気分転換にドライブでもしてきたいかがですか？」

見かねた主任の新垣が進言した。

「いや、気持ちは嬉しいが、しかし業務時間中だからなあ…」

「だつて、それ、今やらなきゃいけない仕事でもないでしょ？現場の方は大丈夫ですから、どうぞお出かけ下さい。なんなら、今日はそのまま代休と言つことにしてしまつたらどうですか？」

工事現場には似つかわしくない、ひょろりとした色白の新垣はにっこり笑つて孝幸を送り出そうとしていた。

孝幸は、部下に対する面倒見が良く、特に、家族や独身のものなら恋人が絡んだ私用について、寛大だった。

そんな孝幸だから、部下からも慕われていた。

今日が、孝幸の娘の陸上大会だということはみんな知つていた。朝からそわそわしている孝幸に、新垣をはじめとする5人の部下はおろか、現場の作業員たちまでが気を利かせて口にした。

「所長、早く行つてやらないと、終わっちゃいますよ。」

作業員たちが口を揃えてそう言つと、新垣の下についている富本が、からかうように言い放つた。

「そうですよ。後でやつぱり行つとけば良かつたって後悔しても、やけ酒には付き合つて上げられませんよ。」

新垣とは対照的で、いかにも体育会系といった感じの富本は、よく、こういった、やけ酒に付き合わされていた。

「どうか？お前たちがそこまで言つなら、ちょっとだけ行つてくることにするよ。終わつたらすぐに帰るから、その間だけ頼むな。」

そう言つと、孝幸はゆっくりとした歩調で駐車場の方へ歩いていった。

プレハブの事務所の角を曲がつて少し歩くと、後ろを振り返り誰も見ていないことを確認するやいなや、全速力で車まで走つた。

2階の窓からその様子を見ていた新垣は「素直じゃないねえ。」、富本も「しかし、わかりやすい人ですね。」そう言つて、腹を抱えて笑つた。

1年前は、800m走の代表だった。

長距離の経験が誰にもなかつたので、たまたま校内マラソン大会で

優勝した恭子が選ばれた。

校内マラソン大会は、学校近くにある河川敷の公園を周回するもので、5・6年生の高学年は1週約500mのコースを5週する。距離だけ考えれば、2・5キロだが、子供の追いかけっこの様なそんな大会では、ペース配分もなにもまったく関係なく、はじめは100m競争でもしているようなペースで始まり、最後は歩くようになんとゴールするものがほとんどだった。

そんなレースで優勝したからといって、競技会で通用するわけはなかつた。

案の定、スタートから飛ばした恭子は、すぐにスタミナを使い果たし、やつとの思いでゴールにたどり着いたが、後には誰もいなかつた。

今年は得意の短距離走だ。

しかも、オリンピックに出るかもしれないランナーに「コーチしてもらい、これくらいの大会なら優勝できるとお墨付きをもらっている。否応なしにも期待が膨らむ。

しかし、それがプレッシャーでもあつた。

恭子の最初のレースは予選の第3組。

合同練習をした第四小の選手が同じ組にいた。

恭子が2レーン、第四小の選手は6レーンだった。

8人で走って上位3人が準決勝に進む。

競技が始まると、あつと言う間に恭子達の順番がやつてきた。

「位置について…」

恭子はゆっくりとスタートラインに向かい、クラウチングスタイルで集中した。

ピストルの音がパーンとはじけた。

全身の力をこめて地面を蹴りだす。

見る見るうちに加速していく。

左右の選手があつという間に視界から消えて行つた。

恭子は白いテープを胸に受けてゴールを駆け抜けた。

「勝つた！」

スピードをゆるめながら、軽くガツツポーズをして見せた。

誰かにうしろから肩をたたかれ、振り向くと第四小の選手だつた。

「やつたね！おめでとう。」

「ありがとう。あなたは？」

第四小の選手は丶サインをして「3位に入った。」と嬉しそうに言った。

続く第4レースでは、同じ第三小の選手は登場したが、惜しくも4位で準決勝には進めなかつた。

予選8レースが終わつて、準決勝に進む24人の中に、合同練習に参加した6人のうち、第五小の二人と合わせて4人が準決勝に残つた。

「今年の一中校区の子たちはレベルが高いねえ……」

来賓で来ていた区議会議員の金村雅夫が野村に声をかけた。金村は第五小から一中を出た地元の議員だつた。

「…特に、あの第三小の子は素晴らしい。予選のタイムは2位だったそうじゃないかね。」

そう続けて、野村の背中をポンと叩いた。

「はい、強い子は予選レベルだと、タイムより順位を見ながら流して走っていますから。次の準決勝が試金石と言つたところでしょうがね。」

「それで、いけそうなのか？」

「はい！かなり期待できると思いますよ。」

「よろしい。今年は僕も鼻が高いよ。」

金村はそう言つと、来賓席の方に戻つていつた。

孝幸は競技場の駐車場に車を止めると、スタンドに駆け上がり、

フィールド内の様子をうかがつた。

トラックでは長距離のレースが行われてゐるようだつた。

第三小の選手たちは100m走のゴール方面に近いところのテントにいるようだつた。

その場所の真上に父兄の応援席があり、早紀が手を振つてゐるのが見えた。

孝幸は急いで移動すると、他の父兄たちに会釈をして挨拶をしながら早紀の隣に腰を下るした。

「あなた、仕事は大丈夫なの？」

「ああ、それより、恭子はどうだ？予選はもう終わつたのか？」

「ええ、無事準決勝進出よ。しかも、予選2位のタイムよ。」

「そいつはすごいなあ。それで準決勝は何時からなんだ？」

「いまやつてる1500m競争が終わつてからよ。」

「そうか、じゃあ、ちよつどいいとこだな。」

準決勝は8人ずつ3レースを行い、各レースの上位2位までと、3位以下のなかからタイムのいい2人が決勝へ進む。

恭子は最終組で第五小の一人と同じ組に入った。

恭子が4レーン、第五小の選手は6レーンだった。

第1レースで第四小の選手、第2レースでは第五小のもう一人の選手が登場したが、二人とも僅差の3位で順位による決勝進出はできなかつたが、タイムではまだ一人とも可能性を残していたので最後のこの第3レースが重要な意味を持つことになつた。

レースのタイムが遅く、恭子と第五小の選手が1位と2位なら、4人そろつて決勝に出ることができるのである。

最終レースに出る二人は、当然そのことが分かつていた。

そんな二人に野村は釘を刺した。

「いいか、余計なことは考へるなよ！全力でいかないとやられるぞ。

」

「はい！」

二人は揃つて返事をし、健闘を誓つた。

そして、いよいよ第3レースのスタート時間になつた。

恭子は集中した。

ピストルの音がはじけた瞬間、頭ひとつ飛び出した。

絶妙のスタートだった。

ゴールを通過するまで恭子の視界には誰も入つてくることはなかつた。

圧倒的な強さだった。

予選のタイムを0秒5上回って、区の小学生記録を塗り替えた。

文句なしの決勝進出だった。

一緒に走った第五小の選手は4位だったが、タイムで決勝進出することになった。

なんと、このレースの4位までは、前2レースの1位のタイムを上回っていた。

残念ながら、前の二人は、準決勝敗退となつたが、こんなタイムを出されでは仕方ないとサバサバしたものだった。

午後からの決勝では一人を応援すると言つて、自分のことのようこ喜んでくれた。

選手達は、PTAからの差し入れの弁当で昼食をとつた。

午後からレースがある恭子は付け合わせのパスタだけを口にした。余つた弁当は孝幸に渡した。

「仕事さぼつてこんなところにいていいの？」

「さぼつているわけじゃないさ。今日はもう終わつたんだ。」

「ウソでしょ？」

恭子は、孝幸が来てくれたのはちょっと嬉しかつたのだが、照れ臭くて素直に「ありがとう」と言えず、わざとからかつた。そして、選手席へと戻つていつた。

話を聞いていた早紀が口を挟んだ。

「あら？ いつの間に終わつちゃつたのかしら？」

「恭子が記録を塗り替えてからだ。」

「現場の人には話してあるのかしら？」

「今から電話していく。」

孝幸はそう言つて、立ち上がつた。

すると、高橋がそこに立つていた。

高橋は、現在は各現場を統括する課長になつてゐる。

「あつ、課長…」

高橋は首を振り、人差し指を口に当てた。

「新垣から聞いたよ。あつち（現場）は問題ないから最後まで応援してやれ。」

孝幸は高橋の横に立つと、頭を下げて礼を言つた。

恭子が生まれる時、同じ現場の所長だつたのが高橋だつた。

その後も高橋とは「コンビでいくつも仕事をした。

いわば、孝幸にとつては上司と言つても、友達のような存在なのだつた。

「それにしても恭子ちゃんも大したものだなあ。あの時の子がこんなに立派になるなんて、俺も歳をとるわけだよなあ。」

そう言つて笑う高橋を、孝幸は、自分で言つぽじ年をとつた風には見えないと思つた。

「なに言つてるんですか？ それじゃあ、遠回しに俺が歳を取つたと言つているようなもんじやないですか。」

「そう聞こえなかつたのか？ 俺はそう言つたつもりなんだがな。」

「あのう…漫才はその辺にして、お一人ともこつちに来て座りませんか？」

早紀が、隣のシートを指した。

早紀が座つてゐるシートの二つ隣のシートにはハンカチが敷かれていた。

もちろん、ハンカチの敷かれてシートは高橋のためだつた。

「さすが、早紀ちゃん！ 気がきくなあ。」

そつ言つうと、高橋はシートに敷かれたハンカチを手に取ると、早紀に返して早紀の隣にちやつかり座つた。

「こんなヤツを座らせるのにハンカチなんか敷くことないよ。」

「あら、そうですか…」

独身の高橋は、三浦家の身内のような存在でもあった。

「恭子ちゃん、優勝したら、何でも好きなもの買ってやるからなあ。」

高橋は大声でそう言つと、恭子に向かつて手を振つた。

スタンドでなにやらわめいている高橋に気が付くと、『やれやれ』というように首を振つた。

「こんな平日の昼間に、おじ様まで来ちゃつて、あの会社、大丈夫なのかしら?』

二人が応援に来てくれたこと、予想通り周りの雰囲気を無視してはしゃいでいること、そんな一人を見ていると、恭子はこれから出場する、決勝のレース前に気持ちが楽になつたような気がして感謝した。

決勝のレースを前に午後から、少し雲行きが怪しくなつてきた。レースが始まる頃には、雨がぱらつき始めた。

100m走の決勝は1500m決勝の後に行われる予定になつていた。

ちょうど、今、1500mがスタートしたところだつた。

1500mが終わると急に雨足が早くなつてきた。

競技場の係り員たちが一斉に出てきて、100mのレーンにシートをかけた。

既に他のフィールド競技は終了している。

残すは100m決勝と100×4リレーのみだつた。

競技委員が各校の責任者を集めて続行するかどうかを検討し始めたとたんに、雨が上がり、薄日が差してきた。

レーンの整備が終わり次第レースを再開することになつた。

恭子達はウォーミングアップを始めた。

係り員たちはレーンの所々にたまつてゐる雨水を拭き取つてゐる。

そして、準備は整つた。

決勝のスタートを告げるピストルの音が高らかに大空にこだました。

連合陸上大会が行われた日の週末。

高橋と孝幸が中心になつて、選手たちの慰労会を行うことになつた。高橋は孝幸の上司でもあつたが、この町で生まれ育つた町会青年部の部長を務めていた。

孝幸達が引っ越すと決めた時、この町を選んだのは高橋に勧められたからでもあつた。

慰労会は、第五小と第四小も合同で実施することにした。

そして、臨時コーセーを引き受けてくれた西崎拓にも声をかけた。しかし、拓は練習を休むわけにいかないと、小山悠斗を通じて丁重に断つてきた。

代わりに、悠斗が出席することになった。

会場は居酒屋“ばれいしょ”。野々村仁美の家だ。

“ばれいしょ”という店の名前の由来は、じゃがいもの馬鈴薯とバーレーボールのバレーをかけたもので、じゃがいも料理がこの店の売りでもあつた。

選手たちは是全員参加したわけではないが、それでも、3校合わせて40人近くが参加した。

子供だけ参加したところもあれば、保護者と一緒に参加したところもあり、町会のお偉いさんや先生ま含めると、70人からの大人数になつた。

“ばれいしょ”は2階の座敷も含めて100名ほど入れる店だったが、この日は店の外に『貸し切り』の札がぶら下げられていた。

子供たちは2階の座敷で、大人たちは1階のテーブル席とカウンターで大宴会が繰り広げられていた。

連合陸上大会では、何人かの生徒が優秀な成績を収めていた。

第五小では女子800mで3位、女子100mで3位、女子100×4リレーで2位、男子走り高跳びで6位、男子走り幅跳びで2位

と6位。

第四小では女子走り幅跳びで3位、女子800mで6位、男子400mで2位、男子1500mで5位。

第三小では女子100×4リレーで6位、男子1500mで5位、と入賞者を出した。

そして、3校合わせて唯一の金メダルを獲得したのが三浦恭子だった。

雨上がりに行われた100mの決勝はレーンのコンディションが悪く記録こそ平凡に終わつたが恭子の強さは、決勝でも圧倒的だった。

準決勝で恭子と一緒に走つて4位だった第五小の選手も決勝では3位に食い込んだ。

しかし、100×4リレーでは決勝には残つたものの、アンカーの恭子にバトンが渡つた時には再開の8位だった。

それでも恭子が一人抜いて、どうにか6位に入り入賞を果たした。100mの代表になつた選手と遜色のないベンバーを加え、実力のある4人のランナーを揃えた第五小は100×4リレーで2位に入つた。

2階では恭子の周りに、他の学校の生徒たちも多く集まつていた。
「三浦さんつてすごいよね。区の記録塗り替えちゃつたんだもんね。決勝前の雨が降らなかつたら、もっといい記録でたかもねえ。」

「本当。男子の決勝の記録より0秒1遅かつただけでしょう?」

「もしかしたら、男子のレースに出ていても優勝していたかもね。」

恭子は連合陸上大会以来、地区の女の子たちの間では、かなりの人気者になつていた。

だが、天狗になることもなく、依然と同じように学校生活を送つていた。

仁美は、そんな恭子のファンのために、プリクラで恭子に写真を撮

つてもう一、せつせと店の案内チラシに貼つては配り歩いている。

1階では、孝幸と高橋が将来はオリンピックに出で、西崎拓とカツプルになつてオリンピックペアの誕生だと大はしゃぎしてくる。あながち大ばらという訳でもない話だけに、町会の連中もすっかりその気になつて後援会を作るなどとい出す始末だ。

野村は、変に期待すると、フレッシュナーでつぶれる子もいるからあまり大騒ぎしない方がいいとしたしなめだが、「そんなことは分かっているが、今日だけは言わしてくれ。」そう言つて高橋が頭を下げるるので、「わかっているならいいですけど……」と引き下がつた。

悠斗は、酔っぱらつた大人たちを尻目に、2階に上がつていった。大勢に囲まれている恭子を見つけると、片手を軽くあげて合図した。恭子は頭を下げてそれに応えた。

悠斗は恭子のそばまで行くと、「ちょっと三浦さんには話があるから。」と言つて、廻りの子達を遠ざけた。
「すみません。助かりました。」

「助かつた？」

「はい、正直言ひと困つていたんです。私、話をするのは苦手で…」「なるほど、分るよ。拓のヤツもそうだけど、“英雄多くを語らす”ってね！なんかそんな言葉あつたよね？」

恭子は首をかしげた。

「あれつ？知らない？おかしいなあ…違つたかなあ…まあ、そんなことはどうでもいいや。拓から手紙を預かつてるんだ。」

そう言つて悠斗は恭子に可愛らしいイラストが描かれている封筒を渡した。

「バカにしてるだろ？…こくら女のだと言つてもこれはちょっとガキっぽいよな？」

封筒を手に取つた恭子は、悠斗の言葉を聞いてクスッと笑つた。

「ありがとうございます。拓さんに伝えてください。よく私がこの

キャラクター好きなの知つてましたねって。」

「へ～、そなんだ。あいつも隅に置けないなあ。じゃあ、確かに渡したからね。」

そう言つて悠斗は立ち上がつた。

歩きかけて、振り向くと、ひとつだけ質問があると言つた。

「君はアイツが言つところの“あの子”なのかい？」

恭子には悠斗の質問の意味がすぐに理解できた。

「はい。」

そう返事をすると、嬉しそうにほほ笑んだ。

その笑顔を見た悠斗は、何とも言えない不思議な気持になつた。

「まいつたな。あんな顔されたら俺だつて…」

悠斗は後ろ髪をひかれる思いで、酔っ払い達の相手をしに階段を降りて行つた。

つかの間の安らぎ

5 中学校の運動会／つかの間の安らぎ

慰労会が終わる頃には早紀が恭子を迎えてきた。

孝幸や高橋達は一次会だと黙って、カラオケの歌えるスナックへ繰り出していく。

早紀と恭子はマスターに頭を下げる。店を出た。

「あなた、明日はお仕事なんだからあまり遅くならないように気を付けてくださいね。」

早紀は孝幸に注意を促したが、高橋がそれを制して、手を振った。

「早紀ちゃん大丈夫。なんたって俺が付いてるんだから。」

早紀は、笑って、高橋に応えたが、本音は「だから余計に心配なのよ。」そう思っていた。

部屋に戻ると恭子は、早速、拓からの手紙を広げた。

「まずはおめでとう。

ボクには分かっていたよ。

君は最初の金メダルを手にしたわけだ。

これから先、君はきっと数え切れないほど金メダルを手になると思つ。

しかし、忘れないでほしい。

世の中には、自分の意志や力ではどうしようもないことがある。

今は、まだ気にする必要はないかも知れない。

いつか、そういう壁にぶつかっても決してあきらめないで乗り越えてほしい。

ボクはいつも君を見ているよ。

君が生まれる前からずっと・・・

「」の時はまだ、恭子には拓からの励ましの手紙にしか思えなかつた。

恭子がこの手紙の本当の意味を知るのはもう少し経つてからだ。

恭子は、この手紙をクリアファイルのポケットにしまい込んだ。そのクリアファイルには、他にも、仁美から貰った写真が入つていた。

その翌年の春、恭子は地元の第一中学に進学した。

仁美も一緒だつた。

恭子は陸上部に、仁美はバレー部に入部した。仁美は、身長も高く、アタッカーとしてはかなり、注目をされいていたので、私立の名門中学からの誘いもあつたが、弱小チームでも、気楽にバレーボールをやっていく方を選んだ。

今日このところにも、何人かのスカウトがやってきたので、孝幸は正直色気もあつたようだが、恭子がどうしても地元の学校に行きたいと言うので、あきらめざるを得なかつた。

「また一緒だね。」

入学式の後、仁美が恭子の肩を叩いて微笑んでいた。

仁美は春休みの間に、一段と背が伸びたような気がした。

恭子はそんな仁美を見上げて、頷いた。

「そうだね。これからもよろしくね。」

いつものように一人並んで教室の窓から外の景色を眺めた。

拓は高校3年に進級して、高校での最後のシーズンを迎えるとしていた。

周囲からの期待をプレッシャーに思つたことはなかつたが、このところ少しスランプ気味だつた。

高校生レベルでは間違いなくトップクラスではあつたが、今一つ勝ちきれないといったレースが続いていた。

「西崎、春の大会では何らかの答えを出してくれよ。それによつちやあ、大学の方にも影響してくるんだ。」

コーチの窪田は進路指導の担当でもあつたので、拓の進路についても何かと心配をしてくれた。

「まあ、東日本体育大学なら間違いなく特待生で行けると思うが、入つた後のこともあるからなあ。」

そんな窪田の心配をよそに、拓は相変わらずマイペースだつた。

「先生、大丈夫ですよ。一つ段落が終わりましたから。それに、ボクの目標は東日本じゃなくて、東洋電機ですから。」

「東洋電機だと? いきなり実業団に行くつもりなのか? それに、段落? 何のことだ?」

「まあ、見てて下さいよ。」

一中の運動会は毎年春に行われる。

秋だと、受験を控えた三年生に影響があるからだ。

例によつて孝幸と高橋は、朝から場所取りのためにゴザとキャンプ用の組み立て式テーブルといすを担いで、正門の最前列にならんでいた。

二人の姿を見て登校してくる生徒たちはクスクス笑いながら一人の脇をすり抜けていく。

見かねた副校長が、仕方なく門を開放した。

二人はダッシュで、ゴール前の特等席にいち早く陣取つた。

そんな一人のそばにやってきた副校長の添野は「これはダメですよ。

」と、一杯飲むしぐさをして見せた。

「まあ、そんな堅いことを言わずに副校長も一杯どうですか?」と、

缶ビールを差し出す高橋。

「バカッ！」慌てて、高橋から缶ビールを取り上げて、その場をしおのじうとする孝幸。

しかし、高橋が出した缶ビールはすっかり添野に見られたようだ。

「やつぱりね。」

添野はそう言ひと、高橋のクーラーボックスを担いだ。

「終わるまで職員室で冷やしておいてあげますよ。」

「先生、ちょっと待つて！ それは違うんですよ。」

高橋はガックリとその場にうなだれた。

早紀は弁当を作りながら、プログラムを確認している。

恭子が出席する競技は全部で5種目ある。

最初の100m競争が3番目に始まる。

次が、6番目に団体競技で借り物競争。

その後は午前中の最後にリズム。1年生の女子はタップダンスショーを演じることになつている。

それから、午後の部の最初にクラブ対抗リレー。これはアトラクション的なもので、各クラブの代表が、それぞれのユニフォーム姿で、バスケやサッカー部ならボールをドリブルしながらといった感じでやる競技だ。

そして、最後が紅白リレーだ。

三段重ねの重箱と、稻荷寿司が入ったタッパーをトートバッグに詰めると、子供たちを呼んだ。

「優子、浩人そろそろお姉ちゃんが走るから出かけるわよ。」

「え～つ、もうちょっと待つてよ」と浩人。

「待つてあげたいのはやまやまだけど、私がスタートのピストルを鳴らすわけじゃないからねえ。モタモタしてるなら先に行つてるから後から一人で来なさい。」

すると、優子がゲーム機の電源を切つた。

「あつ！ まだセーブしてないので。」

「出かけるの分かつてそんなのやつてる方が悪いのよ。」

優子いたしなめられ、浩人はよつやくあきらめて、テレビの画面を消した。

既に母親の早紀は玄関を出るといひだつた。

「お母さん待つて！今、行くから。」

早紀達が到着すると、孝幸達はゴール前の特等席から手を振つて合図をしていた。

まだ顔が赤くなつていなかつた。

「さすがにこんな時間から飲めるわけないか。」

しかし、席に着くなり、高橋が泣きついてきた。

「早紀ちゃん、聞いてよ！副校長にビール全部持つていかれちゃつたよ。何とか取り返してくれないか？」

孝幸に事情を聞いた早紀は呆れてものが言えないといった風に首を振つた。

「このおやじは飲む前から酔つ払つてるのか？」

早紀は口にこそ出さなかつたが、そう思つていていた。

「そんなことより、恭子の100mが始まるぞ。」

100m競争の組み分けは、事前に測定したタイムで遅いものから順に走るようになつていた。

恭子は言うまでもなく、最終組で走ることになつてゐる。

恭子が白組だつたので、白の選手が1着になると、孝幸達はやんやの喝采を浴びせた。

そして、いよいよ最終組のスタートが近付いた。

「位置について・・・」

恭子は6コース。いちばん外側のレーンだ。

つまり、ゴールした時に、観覧席にいちばん近いレーンになる。

ピストルの音が鳴り響くと同時に恭子が抜け出したのは反対側のゴール前からも分かつた。

もともと一番外のコースは、立ち位置からして最前列なので、恭子

はゴールするまで、他の選手を視界に入れることもなく悠然とゴールの白いテープを胸に受けた。

観覧席では、孝幸と高橋が廻りの保護者達をあおつて万歳をしている姿を1着の旗のいちばん後で見ていた恭子は、同じ列の最前列で✓サインしている仁美に気がついた。

走るのが苦手な仁美は持ちタイムが遅い方から6番目だった。つまり、最初のレースに登場したわけだが、他の5人が実力を発揮できなかつたので、1位になつた。

タイム通りに順位が決まれば、競争する必要はない。

実際、タイム通りであれば、この組のメンバーの中では仁美がいちばん早いことになるが、練習の時にはいつも3番目か4番目だった。何回か練習を重ねたある日、仁美は恭子にこう言つたことがあつた。「ねえ恭子、私、幼稚園の時から、徒競走と言うものでビリ以外の成績をとつたことがないの。だから、今年は、人生最大のチャンスが巡ってきたわ。」

その時の仁美の言葉にはなぜか説得力があつた。

恭子の記憶によると、恭子が転校してきた4年以降、確かに、仁美がビリより良い成績だつたのを見たことがなかつた。

それは、身長順でのメンバー構成だったので背の高かつた仁美のグループはいつも俊足揃いだつた。

それが幼稚園の頃からだつたとは初耳だつたが、

恭子も、✓サインを返して仁美を祝福した。

なぜか、そのことが自分のことのように恭子には嬉しく感じた。

プログラム6番は1年生の借り物競走。

スタートしてから50mほど進んだところに、いろんな品物が書かれたカードが置いてある。

カードは人数分の数があり、書かれている品物はすべて違うものばかりだつた。

中には定番の“校長先生”とか、“お父さん”と言つたものもあれば、その日その場にあるかどうかも分からない、“モモヒキ”だから、“かつら”などというるものもあった。

実際は、演劇部の部室に行けば揃つものなのだが、それは最後の手段であくまでも、会場内で探さなければならなかつた。

「恭子のヤツ何を引くかなあ？“お父さん”ならいいなあ。孝幸がそう言つと、高橋も‘‘青年部部長’’とか“素敵なおじさま”なんてのはないものかねえ？」

と、ワクワクしていた。

先と子供たちは、「バカじゃないの？」と呆れていた。

レースが始まると、恭子より先に高橋の出番がやつてきた。

“青少年部部長の高橋さん”と書かれたカードを持った仁美が高橋の前にやってきた。

本来なら、来賓席にいるはずの高橋のところへ仁美は真っ直ぐにやつってきた。

そして、仁美と高橋は見事に1着でゴールしたのだった。孝幸は「引いたのが恭子じゃなくて良かつたよ。」と胸をなで下ろしていた。

ところが、孝幸の期待も虚しく、『お父さんと二人三脚』のカードは他の子に先に引かれてしまった。

もはや、自分の出る幕はなくなつたと諦めたところで恭子の出番がやってきた。

恭子はゆつくりと、カードが置かれている場所に走つていいくと、迷わず一番手前にあるカードを引いた。

カードの文字を見た恭子は怪訝な表情で眉をしかめた。

そして、恐る恐る孝幸の方へ近づいてきて、尋ねた。

「お父さん、もしかしてビール飲んだ？」

実は、副校長にビールを取り上げられると、近所のコンビニで高橋と1本だけ買って飲んでいたのだ。

孝幸はそれを咎められると思ったのか、慌てて、灰皿代わりに使っていた空き缶を体の後に隠そうとした。

しかし、恭子が持ってきたカードを見て目の中の色が変わった。

そこには、 “ 酔っぱらいおじさん（または、醉っぱらいおじさんのまねをしてくれる人） ” と書かれていたのだ。

勇んで飛び出そうとした孝幸は観覧席の前の張られているロープに足を引っかけて転んでしまった。

しかし、痛いなんて言つている場合ではなかつたので、そのまま恭子とゴールを目指した。

途中、副校長の視線が気になつたので、酔っぱらつたふりをしながらゴールした。

1着は “ 福田先生におんぶ ” のカードを引いた子にさらわれたが、孝幸は満足だつた。

福田先生とは体育教師で、柔道部の顧問もしている先生だつた。

午前中の最後のプログラムは1年生女子のリズム “ タップダンスショーや ” だった。

セーラー服の下にジャージをはいたスタイルで登場した女の子たちは華麗なステップで踊り始めた。

しかし、孝幸と高橋は気に入らなかつた。

恭子が踊つていた場所が自分たちの陣取つた場所からいちばん遠い位置で、しかも向こう側をむいていたからだ。

「 だったら、あっちまで行つてくれればいいでしょう。 」

早紀にそう言わると、二人はおとなしくなつた。

「 まあ、今から向こうに行つたって、あんなに人がいたんじゃそもそもには見られないな。ここからでも見えるから、まあ、いいか。それに、他の子も見てやらないとな。 」

これで午前中の競技は全て終了した。

恭子たちはタップダンスショーの衣装のまま保護者席に戻つてきた。

早紀は「ザの上にランチマットを敷き、重箱を並べた。

一段目の重箱には、唐揚げと串カツ、それに卵焼きが入っていた。

卵焼きは恭子が好きな甘い卵焼きだった。

二段目の重箱にはポテトサラダに海老フライ、それにワインナーソーセージが入っていた。

三段目の重箱にはリンゴやイチゴなどの果物が入っていた。

そして、恭子の大好物の稻荷寿司。

去年までは、優子と浩人も一緒だったので、一人が好きな海苔巻きだった。

稻荷寿司のお弁当は本当に久しぶりだった。

恭子は午後もリレーが控えていたのだが、そんなことはまったく気にならないで、お腹いっぱい食べた。

午後のプログラムはクラブ対抗リレーで幕を開けた。

15のクラブにPTAチーム、教員チーム、町会チームが加わり、計18チームで1チームから4人づつ参加して、6チームづつの3レースが行われる。

第一レースは文化系の演劇部、吹奏楽部、放送部、園芸部、生徒会、PTAチームお組み合わせ。

第二レースは男女混合体育系で、陸上部、バスケットボール部、バレーボール部、卓球部、テニス部、町会チーム。

第三レースは格闘系中心の柔道部、剣道部、サッカー部、野球部、水泳部、教員チーム。

この競技に出場する選手たちはユニフォームに着替えたり準備があるため、昼食休憩が終わる前にそれぞれの部室や教室に向かつていった。

恭子も、陸上部の部室へ向かつた。

それを見送ると、孝幸と高橋が立ちあがつた。

「さて、それじゃあ、俺達も準備するか。」

その様子を見た早紀は、目を丸くして二人に聞いた。

「まさか、出るつもりなの？」

二人は揃つて丼サインを出し、「イエーイ！」とウインクをして見せた。

「その通り、二人とも町会代表さ。」

「それで、どんな格好をして出るつもりなの？」

孝幸は現場で来ている作業着に安全ベルト、ヘルメットに編み上げの安全靴を履き“働くお父さん”をモチーフにするといい、高橋は青少年部の部長として、お祭りのときのハッピ姿で走るのだという。早紀は、「まるで、誰のための運動会かわからないわね。」と閉口していたが、優子と浩人は大喜びだった。

そして、調子に乗った二人はそれぞれ、優子と浩人を背負つて走ると言いだした。

「ただ走るだけじゃあ、芸がないってもんだよなあ。」

クラブ対抗リレーは、各クラブともそれぞれの特性を生かした趣向を凝らし、その姿や演技は見ている者たちを大いに楽しませてくれた。

陸上部は、レーンの外側を上級生たちがウサギとボヤハードルをやりながら、他のチームの脚色を見ながら、進んで行き、最後に体の小さな恭子が一気に追い抜いて行くという芸当を演じて見せた。子供たちを背負つて走った孝幸と高橋も大いに場内を沸かせた。そして、運動会も次々とプログラムをこなしていく、いよいよ佳境に入ってきた。

最後の紅白リレーを前に、紅組と白組の点差はわずかで恭子達の白組はリードさせていた。

紅白リレーは男女別で、それぞれ2チーム出して競われる。

白組は白チームと青チーム、紅組は赤チームと黄色チーム。

先に女子のレースが行われ、最後に男子のレースが行われて前プログラムが終了する。

各チーム2人代表を出し6人でバトンを繋いで「ぐ」となる。

恭子は青チームの第一走者だった。

まず、女子のレースがスタートした。

青チームの第一走者はトップで恭子にバトンを渡した。

孝幸達は、恭子が前のランナーをじぼつ抜きにするシーンを思い描いていたので少しばかり拍子抜けした。

しかし、恭子はそれなりに見せ場を作った。

バトンを受け取ると、後続のランナーを見る見る引ひき離していった。

青チームは恭子が作ったリードを守り切って、最後はきわどかつたものの、見事に1位でゴールした。

帰り道、恭子は仁美と並んで歩いていた。

「残念だつたね。あと少しだつたのに。」

運動会の結果を恭子は仁美に話していた。

「そうそう、せっかく女子がリレーで逆転したのに、男子が3着と4着じゃ話にならないわ。」

仁美も恭子と同じ白組だったので、男子の紅白リレーの結果に怒りをあらわしている。

「だいたい、同じ白組同士でぶつかって転ぶなんて、バカげてるわ。あれがなければ1着3着で白組の優勝だつたのに。」

仁美の怒りはなかなか收まりそうにないと想いながら、ふと、目を向けた先には西崎拓がいた。

「仁美、先に帰つて。」

そう言つと恭子は拓のもとへ駆けだした。

「なによ、急に…」

そつ言つて、恭子が走り出した方を見て仁美は納得した。

「なるほど、そういうことね。」

仁美は恭子に手を振つて一言だけ言つた。

「がんばってねー。」

恭子は恥ずかしそうな笑顔で仁美に応えた。

拓は大学に行くより、実業団に入つて、金を稼げるランナーになるつもりだった。

もつとも、陸上競技では、選手としてやつていけるのは他のスポーツに比べて、決して長いとはいえない。

まして、プロとして食べていけるだけの報酬を得るとなるれば日本国内ではまず無理だ。

とは言え、海外に出て夢を追うつもりもない。

選手としてやつていけなくなつた時のことを考えれば、ちゃんと大學を出ていたほうが就職にも有利であることは間違いない。しかし、高校卒業とともに、大学を出なければ入れないような企業に陸上競技で入れるのなら、その分、仕事も覚えられる。

そうなれば、選手として通用しなくなつても、仕事で会社に残ることも出来るだらう。

拓は、入念にストレッチをこなすと、トラックをゆっくりと走り出した。

高校3年の今シーズンは最後のチャンスになる。

窪田コーチに言われるまでもない。

日本記録にいちばん近い男と騒がれてから、スランプが続いたが、その時期にも拓には確かな手ごたえがあった。

「コーチ、一本取つてもらえますか？」

拓は、そう言って、100mコースのスターとラインの方へ歩き始めた。

「一チの窪田は、突然の拓の行動に、一瞬、何事なのかと思つたが、拓の表情が今までとは違つてゐるのに気がつくと、『ゴールの位置に向かつた。

ピストルは持つていなかつたので、ホイッスルを加えて拓に合図した。

拓がスタート位置につくと、「よーい」の掛け声の変わりに左手を上げた。

「ピーッ」窪田は思いつきりホイッスルを鳴らすと同時に右手でストップウォッチのボタンを押した。

スタートしてからの一完歩が拓は強い。
そして、一気に加速していく。

今日は、足がいつもより高く上がつてゐる。

本来なら、80mくらいが拓のベスト距離なのだ。

今まで記録が伸び悩んでいたのは、残りの20mで失速してしまつからだつた。

80mが近づいてきた。

すると、拓は体を前に沈めて更に加速した。

実際は、前に沈んだのではないが、窪田にはそう見えた。目の前を一陣の風が吹き抜けた。

窪田はストップウォッチのボタンを勢いよく押した。
そこには日本記録と同じタイムが記されていた。

窪田が拓のほうを見ると、拓は背中を向けたまま、高らかに手を掲げてVサインをして見せた。

「こいつ、やりやがつた。」

恭子は陸上部に入つて短距離を学んだ。

小学校で区の記録を塗り替えたとはいへ、中学にあがると、明らかにレベルが違つた。

さすがに、1年から選手に選ばれるほど甘くはなかつた。

しかし、いつも謙虚な恭子は他の新入部員達と一緒に先輩達の雑用

をこなしながら練習に励んだ。

一中の陸上部顧問は、この春から一中に移ってきた第五小の野村が勤めていた。

「三浦、ちょっと来い。」

野村は恭子を呼ぶと、走り幅跳びをやってみないかと聞いた。

「幅跳びですか？体育の授業でしかやったことないんですけど。」

「三年の原田が転校することになつて、幅の選手がいなくなつたのは知つてるな？」

「はい。」

「ちょっと跳んでみる。海外では短距離の選手は幅跳びでも一流なのは知つているな。」

「分かりました。やつてみます。」

「よし、じゃあ、とりあえず、自分の跳びたいように跳んでみる。」

恭子は、踏み切りの位置から歩幅を確認しながらスタートの位置についた。

その様子を見ていた野村は、「たいした本能だ。」そう思った。

恭子はスタートすると、一気にトップスピードにギアチェンジして左足で踏み切つた。

とりあえず、踏み切りの位置は気にせずに思いつきり跳んだ。
みようみまねで、空中を歩くように跳んでみた。

けつこう跳べたような気がしたが、野村は渋い顔をしていた。

「やっぱりダメでしたよね。」

「ああ、てんでなつてないな。しかし、跳び方さえ覚えたら原田く
らいは跳べるようになるかも知れないぞ。」

「あの、先生。私、幅跳びに転向するんですか？」

恭子は不安そうに野村に尋ねた。

「バカ言つな！ 基本は100だ。100の練習は続ける。続けながら幅をやる。幅をやるのは試合に出るためだ。幅なら1年から試合に出られるからな。試合に出て思いっきり走ることが大事なんだ。」

「分かりました。先生。」

拓は新学期早々に国体の予選に参加し、見事に本選出場を果たしたのを皮切りに、6月には高校総体の地区予選に出場した。

さすがに、この辺りでは拓の相手になるランナーはないかと思われたが、唯一のライバルであり親友でもある聖都大付属高校の村上悠馬との今シーズン初顔合わせとなつた決勝のレースでは、ゴール前でかなり追いつめられたがかろうじて逃げ切つた。

そして、8月。高校総体の本番。

下馬評では非公式ながら、日本記録と同タイムを叩き出した拓が断然の優勝候補で地区予選で拓に迫つた聖都大付属の村上、今シーズン九州地区の高校記録を塗り替えた熊本・九州学園の末吉星也の三つ巴になるとマスコミは報じていた。

3人とも危なげなく準決勝に進出した。

そこで拓は九州学園の末吉と同じレースを走つた。

末吉は10秒50の好記録を出したが、拓は高校記録を塗り替える10秒38で1位のタイムを出した。

そして、二人共決勝に進んだ。

もう一方では、村上が10秒55で1位となり、拓、末吉と決勝で顔を合わせることになった。

決勝のレースを前にして、拓はコーチの窪田に入念なマッサージを受けっていた。

「手ごわいのはどっちだと思う?」

もちろん、村上と末吉のことを聞いているのだろうと拓は思つたが、こう答えた。

「一番手ごわいのは大阪南の成田だな。」

窪田は、予想外の答えに一瞬顔色を変えたが、すぐに根拠を聞いた。

「あいつ、準決で村上の2着だったけど、余力を残した走りだった。10・55なら村上も調子が悪い方じゃなかつたはずだけど、あいつはゴールする時、笑つてやがつた。」

「笑つてた?走りながら?」

窪田は、冗談だろ?とでも言つよう前に首を振つて見せたが、拓は真顔で話を続けた。

「一緒に走った村上が一番分かっていると思つけど、とんでもないヤツが隠れていたもんだ。」

「成田ねえ…」

窪田は、まだ半信半疑という風な顔をしていたが、レースの時間が近付いてきたので、拓と一緒にグランドへ出た。

既に、村上も末吉もアップを始めていた。

窪田は廻りを見まわしたが、成田はまだ出ていなかったよつだつた。

「コーチ、あつちを見てみなよ。」

拓に言われてトラックの向こう側に田を向けた。

すると、成田は同じ学校の女子選手と談笑していた。

「なんだ、あいつ? 決勝の前だつていうのに、アップもしないで女の子とイチャついてやがんのか?」

「それだけ余裕あるんだうつよ。」

最初の試合は中体連の地区大会だった。

恭子は、付け焼刃で覚えたフォームで走り幅跳びに出場した。

スピードに乗つた助走から、思いつきり跳ぶ。

恭子は、100mの練習のつもりで、思いつきり走つた。

助走路は100mより短いので、早い段階でトップスピードに持つていいくことが要求される。

スピードにのつたジャンプは、技術的な未熟さを補うには十分な効果があつた。

もともと参加者も少なかつたので、恭子はなんとか決勝に残ることができた。

「先生、なんだか気持ちいいです。」

野村は恭子の表情を見て、大きな可能性を秘めた子だと痛感した。ついこの間までは、小学校に通つていた子だ。

中学校に入つて、初めての試合で上級生たちに混じつて、しかも、

今までやつたことがない走り幅跳びに出場しているのに、試合を心から楽しんでいる様子だ。

キラキラと目を輝かせながら、そう言つ恭子の屈託のない笑顔を見て、「この子は、きっと走るために生れてきたに違いない。」野村はそう思つた。

さすがに、決勝では、走り幅跳びを専門にやつている上級生たちには太刀打ちできず、8人中8位に終わつたが、どの跳躍も、踏切の30cm前から飛んでいた。

野村の指示で、「下手に足を合わせようとすると、かといって、せっかく試合に出てるんだ。ファームで記録なしじゃあしょうがない。だから、踏切が見えたら最初の左足で思いつきり跳べ。たとえ1m手前になつてもかまわん。」ということにしていたからだ。

踏切がぴったり合つていれば、あと30cm記録が伸びていた。これは3位に該当する記録だつた。

しかし、野村も恭子もそんなことはみじんも気にしなかつた。とにかく、2年後、トップで100mのゴールを駆け抜けることしか頭になかつた。

拓の予想通り、決勝は拓と成田の一騎打ちになつた。

スタートは拓が断然強かつた。

しかし、成田は徐々にスピードに乗つて拓を追いつめてくる。今までの拓なら、ゴール前で失速するところだが、今の拓は違う。ゴール10m前でさらに加速をくわえて成田を突き放した。窪田はすぐに電光掲示板に目を移した。

10秒の位から順番に数字が浮かび上がつてきた。

1・0・0・2…10秒02!

窪田は飛び上がってガツツポーズをした。

拓は、当然といったように窪田の方を向いてニカツと笑つてVサインをして見せた。

もはや、高校生レベルでは拓の敵はいなかつた。

2着に入った成田も10秒30の好記録を出した。

末吉が10秒40で3着、村上は10秒42で僅差の4着に終わった。

高校総体という器の中では、まれに見る好レースだった。

拓は高校総体優勝の勢いで10月の国体に参加した。

拓は高校生ながら、青年の部に出場することになっていた。

少年の部では大阪の成田が10秒32で優勝した。

青年の部に出場する拓の最大のライバルは千葉の実業団東洋電機の篠塚健太郎だ。

現在の日本記録保持者もある。

公式戦で一人が対戦するのは、もちろん初めてのことだ。

マスコミは一人の対決と、日本新記録が出るかどうかをこぞつて書きたてた。

周囲の期待通り、100mはまさに一人のマッチレースになった。準決勝第1レースに登場した篠塚は10秒03を出して余裕の決勝進出。

拓も、第3レースで10秒05で一位通過。

二人とも絶好調で臨む決勝は、日本中の注目を集めた。

オリンピックや世界陸上以外で陸上競技がこれだけ注目されたことは初めてだった。

準決勝で1位のタイムだった篠塚が4コース、拓が5コースからのスタートだった。

決勝に出場した8人のランナーが一斉にスタートラインについた。スタートマークがピストルを高く掲げた。

拓は集中した。

“パン”ピストルの音が鳴り響くと同時に拓は思いっきり地面を蹴った。

スタートの一完歩の強さでは、日本記録保持者をもじのぐ拓のダッシュ力に篠塚も付いて行くのがやっとといった感じだったが、さす

がに日本記録保持者だけのことはある。

徐々にスピードに乗ると、あつという間に拓に並んだ。

そのまま並走を続けたが、拓が最後の力を振り絞って地面を蹴るとさらに加速が加わり、拓の視界からは「ゴールのテープしか見えなくなつた。

秋の新人戦で、1年生ながら100mに出場した恭子はその豊かな才能を見せつけて決勝まで進んだ。

1年生で決勝まで進んだのは恭子だけだった。

そして、見事に6位入賞を果たした。

そして、走り幅跳びでは3位になつた。

春に比べて、踏切の位置が合うようになつてきたのだ。

予想外の成績に恭子はまるで他人事のような口調で野村に言った。

「先生、意外と、走り幅跳びもいけるかも知れないですね。」

「そうだな。しかし、お前が欲しいのは100のメダルだろう?しかも、とびつきり眩しいヤツだろ?」

「はい!」

何の迷いもなく、そう答える恭子に野村は改めて期待を高めた。

今年の冬はいつもより暖かい気がした。

大学に進学をしない拓は、他の受験生達と比べて、ずいぶん余裕がある日々を過ごしていた。

高校の部活は引退して、後輩たちの指導をしながらトレーニングを続けていた。

社会人の目ぼしい大会などがあれば出かけていつてレース感覚を磨いた。

この頃には東洋電機への就職が内定していたので、学校が終わると、千葉の東洋電機陸上競技場まで通つて練習に参加した。もと、日本記録保持者の篠塚健太郎と一緒にトレーニングをすることは、拓にとつて願つてもないことだった。

塙田から、拓の希望を聞かされていた東洋電機の池田直次郎監督は、国体の生年の部で決勝に残つたら受け入れる旨を打診していた。

塙田は、そのことをあえて拓には伝えていなかつた。

それがプレッシャーになつたらいけないとthoughtたからだ。

しかし、それが杞憂に終わつたことを決勝のレースが終わった瞬間思い知らされた。

拓は、廻りの緊張をよそにリラックスしていた。

スタンドには、恭子と野村が応援に来ていた。

野村を通じて拓が招待したのだ。

レースを間近に控えた拓は、スタンドで見守る恭子に右手を高くあげて人差し指を1本立てて微笑んだ。

恭子は頷いて、拓と同じポーズをして返した。

新人戦が終わつた後、野村のところに拓から手紙と国体が開催される岡山までの新幹線のチケットが一組入つていた。

『野村先生、是非、三浦さんを連れてきてください。きっと、めつたに見られないものを見ることができますよ。』

ということだつた。

野村が恭子に話をすると、恭子は一つ返事で了解した。

恭子が野村と出かけるにあたつては、例によつて孝幸がひと騒ぎしたが、仕事の都合がつかず、同行することをあきらめざるを得なくて悔しがつた。

恭子は、野村と一緒にスタンドの材前列に降りてきた。

いよいよ、決勝のレースがスタートする。

祈るように手を組んで5コースの城東第一高校の白いユニフォームを着た西崎拓しか見ていなかつた。

レースがスタートすると、拓が一步飛び出した。

「やつた！」思わず口走り、握りしめた手に力が入る。

しかし、隣の赤いユニフォームに身を包んだ篠塚健太郎がすぐに追いついて来る。

「神様……」恭子は祈るように目を開けて拓を見続けた。

心臓がドキドキと音を立てて唸りを上げているようだつた。

拓が追いのかれるのが怖くて目を閉じてしまおうと何度も思つた。

しかし、信じ続けて最後まで目を閉じなかつた。

拓がゴールした瞬間、野村と向き合つて万歳をした。

そして、抱きついて喜びを表現した。

それから、すぐに電光掲示板に目を移した。

記録はなかなか表示されなかつた。

そして、10秒の位の位置に“0”の文字が表示された。

会場は歓喜の渦に包まれた。

日本新記録が誕生した瞬間だつた。

そして、準に“9”の文字が3つ並んだ。

9秒99！

日本人が初めて10秒の壁を超えたのだ。

「あの野郎！やりあがつた。」

野村は何度もガツツポーズをしながら涙を流していた。

恭子も感動で胸が震えた。

感極まつた野村は、スタンドのフェンスを乗り越えてグランドに降り立つた。

そのまま一直線に拓のもとへ走りだしたがすぐに係員たちに制止され連れていかれた。

スタンド前の戻ってきた拓は、恭子と握手を交わすと、右手の親指を立ててウインクして見せた。

恭子はなぜか顔が赤くなつていぐのを感じて、どこかに隠れてしまいたい気持ちになつた。

「今度は君の番だね。とりあえず、日本一の中学生になつてみようか？」

その言葉を聞いた恭子は、すぐに気持ちが切り替わった。

「はい！」

力強くそう返事をした恭子の表情はキラキラ輝いていた。

拓は心の中で「なるほど」とつぶやいた。

確かに、こんな表情を見せられたらまいづらうな！

そして、そんな話をしていた悠斗の顔が浮かんできた。

恭子に勝利の報告をしたのもつかの間、拓の周囲にはすぐに報道陣の垣根ができた。

いくつものフラッシュが光り、まるで光の雲の中にいるようだつた。しばらくすると、野村がスタンドに戻ってきた。

「先生、何やつてるんですか？これじゃあ、お父さんと来た方が良かったかなあ。恥ずかしいつたらありやしない。」

野村は両手を合わせて頭を下げた。

「いや～あ、面白い。本当にお前の言つ通りだなあ。これじゃあ、どっちが引率者だか分からんなあ。」

そう言って、野村は大笑いした。

恭子も、クスクスと笑った。

ジュニアスターズ

7・ジュニアスターズ

東洋電機の池田監督は、日本新記録のおまけまでつけて国体を制した拓を自宅の離れに住まわせて迎え入れてくれた。

幸い、拓は高校での学業のほうも成績優秀だったので、総務部の人事課に配属され、業務に支障がない限り、陸上競技の練習に専念できる環境を得ることが出来た。

これで、目標の第一段階をクリアした拓は、社会人として、そして、男としての器を磨くべく日々の鍛錬に励んだ。

恭子は中学2年になり、念願の100mの代表になることが出来た。春の中体連では100mで3位に入り、走り幅跳びでは2位に入った。

リレーでは見事に優勝し、恭子はリレーを含めて3種目総てで都大会への出場権を得た。

リレーは都大会でも決勝に進んだが、8位に終わった。

走り幅跳びでは、大健闘で決勝まで進んで5位入賞を果たした。

最も期待していた100mでは準決勝で敗退し、決勝へ進むことが出来なかつた。

野村は、「来年がある。」と恭子を励ましたが、恭子は悔しくて、その夜は家に帰るなり部屋に閉じこもつて夕食も取らずに泣きまくつた。

そして、その後は気持ちを切り替え、いつも恭子に戻っていた。孝之は、部屋で泣きじゃくつている恭子を心配していたが、部屋から出てきた恭子の様子を見てわが目を疑つた。

「おい、恭子？ 大丈夫か？」

「大丈夫！ 来年は絶対優勝する。そして全国大会に行くわ。約束よ。そして、拓さんと同じ城東第一に入るわ。」

今までとはまるで別人のようになりんとした表情で言い放つ恭子はもはや前しか見ていないようだった。

実業団では、高校のときと違つて、大会の数が格段に多かつた。東洋電機陸上部としては、種目別、選手のレベル別にあらゆる大会にそれぞれの選手を派遣していた。

ルーキーとはいえ、拓の実力は折り紙つきだつたため、池田監督は篠塚健太郎と同等の扱いで競わせた。

レースになればライバルの一人ではあつたが、普段は先輩・後輩の立場をわきまえ、拓はひたすら、シユーズ磨きや部室の掃除など裏方の仕事にも進んで取り組んだ。

そういう高飛車ではない拓の姿勢は他の部員達からも好意をもたれ、名実ともに東洋電機陸上部の顔としての知名度を徐々に上げていった。

一方、高校選手権で、サッカー選手としての再起の夢を立たれた悠斗は、体育教師としての資格を取得すべく、地元からそう遠くない場所にある国立の体育大学へ進学した。

選手としての実績は残せなかつたが、早くに再起を諦めることになつたのが幸いして、自力で合格できるだけの学力を養うのにはちょうどよかつた。

悠斗がこの道を選んだのには理由があつた。

それは、恭子だった。

無論、恭子と拓には運命とも言えるつながりがあつて他の誰もそれを断ち切ることなど出来ないことは十分に分かつていた。

それでも、悠斗は恭子に恋をしていた。

当時小学校6年生だった恭子に、高校2年の悠斗は恋をしてしまつ

たのだ。

それは、あの連合陸上大会の慰労会の時だ。

普通に考えたら、その段階での5歳差はありえない年齢差だが、そのとき雄団が見た恭子は不思議なくらい大人っぽくて綺麗だった。いつか拓が一人前の男になつて恭子を迎えて来る日が必ず来るに違いない。

ならば、せめて、それまでの間、自分が恭子のそばで彼女を見守つていてやりたい。

そう思ったのだ。

大学に進んだ悠斗は、特に陸上競技の指導者としての基礎知識からみつちりと学んでいった。

体育教師になつたからといって、恭子が進学する学校へ赴任できるかどうかは分からぬ。

しかし、今の悠斗には、そうするしか他に考えられる事がなかつた。その一方で、相変わらず、地元の小学校で、サッカーのクラブチームのコーチは続けていた。

そして、そのことが恭子との接点を大きくするきっかけともなつた。小学校4年生になつた恭子の弟、浩人がチームに入つてきたのだ。悠斗は、三浦浩人という名前を見る前に、恭子によく似た顔立ちの新入部員が恭子の弟だと確信していた。

新入部員は浩人のほかに4人、浩人も含め5人いた。いずれも、ちゃんとしたチームに入つてサッカーをやるのは初めてだということだった。

考えてみれば、悠斗自身も小学校4年になつて、このチームに入つたのがサッカーとの出会いだった。

それが、高校1年で選手権に出場するまでになつて、怪我さえなければ、リーガーになって、日本代表にだつてなれたかも知れないのだ。

そう考えれば、この5人の新入部員は日本サッカー会の黄金の卵なのだ。

悠斗は、ふとそんなことを思った。

新入部員の初日のメニューとしては、基礎体力と適正を見るために体力測定を行うことになつていて。

浩人が恭子の弟だとはいえ、悠斗はあえて特別な目で見るつもりはなかつた。

しかし、何といつても優秀なスプリンターと同じ血が通つている浩人は自然と悠斗の目を引き付けた。

50m走を行つたときだ。

5人の新入部員の中では、最先着を果たした。

タイム自体はそれほど優秀というわけではなかつたのだが、スタート直後の反応が抜群で、瞬発力がけた違いのように思えた。

そう、まるで拓の走りを見ているようだ。

驚かされたのはそれだけではなかつた。

スタミナがすごい。

グランド10週の持久力走では、浩人以外の4人は全て1週以上周回遅れにさせられるありさまでつた。

「こいつは驚いたなあ。けっここうな掘り出し物かもしれないなあ。監督の寺西が浩人を見ながらつぶやいた。

野村が一中に赴任したため、この寺西が後を引き継いだ。

寺西は第五小の教員だが、悠斗と同じく、高校時代に冬の選手権に出場したほどの実力者だつた。

「なんと言つても生糸のサラブレッドですからねえ。」

満足げな顔をして悠斗が答えた。

「何だ、悠斗、知つているのか？」

「ええ、母親は高校生のとき100mでインターハイに出たことがあるそうです。そして、中学生のお姉さんは2年で都大会に出場しています。100と幅とリレーに出て、100は惜しくも準決止まりでしたが、幅は5位入賞したそうです。来年は、100と幅では間違いなく優勝争いするといわれてますよ。」

「ほう、カエルの子はカエルってヤツか。よしつーボールに慣れ

たらボランチで使ってみるか。」

「そうですね。本当は手薄なディフェンスに持つていただきたいところですが、体が小さいのがちょっと気になりますね。」

「まあ、まだ4年だ。これから体力くなるさ。」

「そうですね。」

広めのリビングルームはバルコニー側を本来のリビングとして使っている。

ソファや洒落たサイドボードが置かれていて、大型テレビが目をひく。

母親の早紀は、恭子をはじめ、子供達の運動会やイベントがあるたびに、ビデオカメラを担いで撮影をしていた。

このテレビは、それを見るために孝之が奮発して購入した。

キッチンよりのスペースはダイニングとして使われていて、対面キッチンのカウンターと一緒になつていてテーブル席で恭子は雑誌を読んでいた。

去年の国体の記事が載っている陸上競技の専門雑誌だ。

そう、拓が日本新記録を出した時のものだ。

何度も何度も読み返しているうちに、書かれている記事を恭子は一語一句全て暗記してしまった。

向かい側の席では父親の孝之が新聞を広げて読んでいる。

キッチンでは母親の早紀が昼食の支度をしている。

「ねえ、恭子ちゃん、浩人を迎えてくれに行つてくれないかしら？それとも恭子ちゃんやってくれる？」

早紀はタマネギをきざみながら、涙目で恭子に言った。

「そうか、今日からジュニアスターズに入ったのか。」

浩人が入ったチームのチーム名がジュニアスターズというのだ。

「どうせなら、城東タイガースに入れればよかったのに。」

城東タイガースとはこの地区では強豪の野球チームのことだ。

孝之は、熱狂的な阪神ファンで、同じタイガースと名のついた城

東タイガースに浩人を入れたかったのだ。

「仕方ないよ。今はサッカーのほうが人気あるもの。」

恭子は父親の孝之にそう言つと、雑誌を閉じてマガジンラックにしまった。

「久しぶりに小山先輩の顔も見たいから行つてくるね。」

そう言つて、恭子は阪神タイガースの野球帽をかぶつた。

実は孝之の影響で、恭子もかなり熱狂的な阪神ファンになつてしまつていたのだ。

“ピーッ”朝礼台の上から寺西がホイッスルを鳴らすと悠斗は子供達に集まるように指示をした。

「集まれー！」

子供達が朝礼台の前に集まると、寺西は練習の終了を告げた。

「来月の大会には6年生中心のメンバーでいくが、調子のいいものがいたら5年も4年も試合に出すからそのつもりで練習しろよ。6年も、しっかりやらないと、メンバーからはずすからそのつもりでいろよ。」

「はい！監督。」

子供達は声をそろえた返事をした。

レギュラーには入れるかどうか微妙な位置にいる6年線の顔からは緊張の表情が覗いている。

逆に、5年生と春からやつている4年生たちは日を輝かせている。今日、入ったばかりの4年生たちには、現実とは程遠いといつりな話に聞こえたようだ。

「よし！じゃあ、今日はこれで解散。」

悠斗が言つと、子供達は声を揃えて、「ありがとうございました。」
と言いそれぞれに散つていった。

悠斗が水道で顔を洗つていると、後ろから聞きなれた声がした。

「小山先輩、浩人、どうですか？」

タオルで顔をふきながら振り返ると、恭子がいた。

「よう！久しぶりだなあ。弟を迎えて着たのか？」

「はい。」

浩人は日影になつた玄関の庇の下でシューズを履き替えていた。

恭子に気がつくと、手を振つて合図をした。

恭子も手を振つて返した。

「カエルの子はカエルってヤツだなあ。」

「えつ？ カエル？」

「ああ！ あいつ、たいした瞬発力してゐるよ。それに持久力が群を抜いている。6年と走つてもいい勝負になるんじゃないかな？」

恭子は、悠斗の評価が高いのに意外だといふような顔をしたが、すぐには納得したような表情になつた。

「そりやあそうですよ。だつて、小さいときから、私達と一緒に走り回つていたんですもの。浩人はチビで走るのが遅いから、いつも必死に走ってきていたわ。考えてみればそうよね。私達からすれば遅くとも、同じ4年生なら誰にも負けないくらい走つてるんだから、当たり前といえば当たり前よね。だけど、それだけじゃあ、サッカー選手にはなれないんじやないですか？」

恭子の話を聞いて、悠斗はなるほどと思つた。

「何言つてんだ？ 今日入つたばかりでそんなの決め付けられるかよ。だけど、あいつは、きっと、すごい選手になるような気がする。」

「まあ、先輩がお世辞を言うなんて、どういう風の吹き回しかしら？」

「いや、あながちお世辞でもないんだぞ。」

声のした後ろを振り向くと、そこには監督の寺西がいた。

「あつ！」

とつそに声を出した恭子は思わず手で口を塞いだ。

「なるほど、この子がサラブレットのお姉さんか？ さすがに、いい体してゐなあ。」

寺西の言葉に、恭子と悠斗は一瞬たじろいだ。

寺西は、一人の表情を見てすぐに弁解した。

「バ、バカ！勘違いするな。スプリンター向きのいい体だといったんだ。」

すると、二人は顔を見合わせて笑つた。

「監督さんつたら、冗談ですよ。」

そんな話をしているうちに、浩人が恭子のそばにやつてきたので、恭子は一人に挨拶をして浩人と一緒に帰つていった。

恭子は、途中で振り向いて、手を振りながら悠斗に向かつてこう叫んだ。

「先輩、来月、新人戦なんで時間があつたら見に来てください。絶対優勝しますから。」

悠斗は分かつたと合図して恭子たちを見送つた。

「ちえっ！どうしてあのじいさんは、俺じゃなくて拓のところに現れたんだ？」

「じいさんつて誰だ？」

「い、いえ、なんでもないです。」

悠斗は慌てて、その場を取り繕つよつて、濡れたタオルで顔を覆つた。

「じゃあ、また頼むな。」

寺西はそう言つて悠斗の肩をポンと叩いて自転車にまたがつた。

「はい、分かりました。」

紺に白いラインが三本、胸には漢字で“一中”と書かれている。シンプルだが、インパクトのあるユニフォームだ。

「まだデザイン変えてないんだなあ。なんか懐かしいや。」

拓は久しぶりに母校のユニフォームを見て自分が中学生だった頃のことと思いだしていた。

「やっぱり、あの紺色は強く見えるよなあ。」

紺色は一中のスクールカラーなのだ。

区営総合運動場のスタンドの中段ほどで手摺にもたれかかった、小山悠斗と西崎拓は中体連秋の新人戦陸上競技大会の会場に來ていた。

拓は、一応、有名人なのでスポーツキャップにサングラス姿だ。
もちろん恭子の走りを見にきたのだ。

「彼女の調子はどうなんだい？」

「絶対に優勝すると言つてたぞ。」

「野村先生も相当入れ込んでいるようだな。」

「なんでだ？」

「走り幅跳びやらせてるんだろう？」

「ああ、なんでも、試合に出ることがいい経験として生きてくるからだそうだ。まあ、確かにその通りだよな。」

「俺の時は、ああいう指導はしてくれなかつたからなあ。先生も色々勉強してゐんだろうなあ。」

「おい、出できたぜ。」

恭子たちがグランジに出できた。

恭子はグランジに出るとすぐに、悠斗が来ている事に気が付いた。
しかし、悠斗の隣にいる拓を見て驚いた。

「拓さん？」

恭子が手を振ると、拓は一瞬だけサングラスをはずして笑つて見せた。

「先生、大変！ 拓さんが来てるよ。」

「なんだつて？」

野村はスタンンドを見渡して悠斗と拓の姿を確認すると、恭子に微笑んだ。

「今日は無様な走りは見せられないぞ。新記録を出したあいつの前ではなあ。」

「もちろんですよー。」

午前中は100mの予選と一次予選、走り幅跳びの予選が行われた。

恭子は、100mでは2戦とも軽く流して組のトップで通過した。

走り幅跳びでは、1回田の跳躍で早々と自己記録を更新して、そのまま決勝進出を決めた。

昼休みになると、悠斗と拓が一中の選手団に励ましの言葉を言った。控え室へやつてきた。

恭子以外の生徒達は拓を目の当たりにするのは初めてだった。

「キャー！ 西崎拓よ！」

たちまち、控え室は大騒ぎになつた。

「今日はたまたま会社が休みになつたのでみんなの応援にやつきました。ボクも、4年前まではこのユニフォームを着て走っていたので、みんなにも頑張つてもらいたいと思ってこれを差し入れします。」

そう言って、紙袋を野村に差し出した。

中には東洋電機陸上部のスポーツタオルが入つていた。

生徒達は、早速、スポーツタオルを取り出すと、次々に拓にサインをねだつた。

拓は、一人一人に丁寧にサインをした。

学校の先輩で、同じ地元に自宅があつても、宅の場合、高校に入つてからは殆ど、寮に入つていたので、めつたに地元で顔を合わせる機会はなかつたので、まさに、スターといった間隔でしかない。逆に、悠斗はずつと、自宅から通つているし、休日のときはジュニアスクールのコーチをしているので、弟がチームに入つたりすると、接する機械が多い分、一中生たちには人気もある。

「小山先輩、西崎選手とは仲がいいんですね？」

生徒の一人が質問した。

「幼稚園の頃からの親友さ。羨ましいだろう？」

悠斗が走答えると、いつせいに「いいなあ。」という声が聞こえてきた。

「恭子、約束忘れんなよ。」

悠斗が言つと、恭子はサインを出して見せた。

「三浦、頑張れよ！」

拓が右手の親指を立て、恭子のほうに突き出してウインクすると、恭子も同じように親指を立てた右手を拓の方に突き出した。

「じゃあ、スタンドで見てるから。」

そう言って、悠斗と拓は控え室を後にした。「二人が去った後の控え室では、恭子が他の、特に女子生徒たちに」「どういうこと?」「知り合いなの?」等の質問攻めにあつたのは言つまでもない。

午後の早い時間に、リレーの予選があり、一中は準決勝に進出した。

引き続き、100mの準決勝。

恭子はここもトップで決勝進出を果たした。

その後は走り幅跳びの決勝。

本職ではないとはいえ、恭子は一度、自己記録を更新して、優勝した。

「いい走りだ。」

拓は、走り幅跳びの時の恭子の助走を見てそつぶやいた。

「彼女はトップスピードに持っていくまでのダッシュ能力が半端じゃないんだ。」

「お前の走りと似ているなあ。」

「ああ、これは偶然じゃない気がする。」

悠斗は宅の顔を見た。

「例のあれか?」

「たぶんな。」

「じゃあ、彼女も日本新記録を出せそつか?」

「いや、それは叶わないだろうな……」

拓は、どこか遠くを見るような目でグランドを眺めていた。このことを知つてるのは拓だけだ。

このことだけは、悠斗にも話していない。

そのときが来たら、彼女を支えてあげられるのはボクしかいない。

そのときまで、あと2年……

立ち止まるな・・・そして、風になれ

8・立ち止まるな・・・そして、風になれ

リレーの準決勝第1レース。

8チーム中3チームが順位で決勝に進出することが出来る。
4位以下のチームはタイムで2チームが決勝にいくことが出来る。
したがって、5位でも、タイム次第では決勝に行くチャンスが残さ
れることになる。

恭子の中は第二コース。

もちろん恭子がアンカーだ。

予選のタイムでは準決勝に進んだ16チーム中9位だった。
この第1レースの8校の中では4位。

微妙な位置にいることはチームの全員が自覚していた。

「いいか、予選のような走りでは決勝に行くことは難しい。分か
つていてると思うが、予選で流してきた学校も、ここでは力を出して
くるぞ。第2レースに強豪が揃っているから3位には入れなかった
ら、タイムで残ることはないとえ。」

野村は、恭子たちに檄を飛ばした。

リレーのメンバーは円陣を組んで気合を入れた。

「由美、スタート大事だからね。」

キヤプテンで第一走者の大橋歩美が言った。

橋本由美は頷いた。

そして、歩美は続けた。

「そしたら、私も頑張るから、陽子も何とか恭子にバトンを渡すま
でふんばって。」

「頑張るわ。」

秋本陽子も気合充分だ。

「最後はいつも頼つてばかりで申し訳ないけど、やっぱりあなたが頼りなの。お願い！私達を決勝に連れて行って！」

キヤプテンの大橋歩美と他のメンバーが一斉に恭子を見た。
「任せなさい！」

恭子は一言言い放った。

そして、キヤプテンの号令で最後の気合を入れた。

「イッチュウー ファイッ！」

「オー！」

野村は腕時計を見てキヤプテンの肩を叩いた。

「時間だ。一中のど根性を見せてみろ！」

メンバーは声を揃えて「ハイ！」と応えると、それぞれのスタート地点へ散つていった。

円陣を組んだ一中のメンバーを見ていた拓と悠斗は、決勝へ進むのが微妙な状況であることは把握していた。

「ずいぶん気合が入っているなあ。」

悠斗が呟つ。

「ああ、ギリギリの線だからなあ。この第1レースで3位までには入れなかつたら2レースの顔ぶれからしても、タイムで拾われるのは難しいだろうからな。」

拓は、相変わらずどこか遠くを見ているような視線で答える。

「なあ、拓。どうかしたのか？さつきから、なんか、上の空みたいだけど、気になることでもあるのか？」

長年一緒にいる悠斗には、拓の微妙な心の変化も手にとるようにな分かつた。

「別に。なんでもないさ。」

そう言つて拓は意識をトラックに集中させた。

「そつか？だつたらいいけど…」

悠斗は、このとき、拓が恭子とのことで何か隠しているに違いない

と確信した。

スタートーがピストルを持った手を空に向かってかざすと、第一走者たちは意識を集中させ、その時を待つた。

「バーン！」

その瞬間、8人のランナーは一斉に地面を押しのけるように飛び出した。

一中の第一走、者橋本由美は持ち前の瞬発力でトップに立った。しかし、第二走者の大橋歩美にバトンを渡すときに少しもたついて2位に転落した。

歩美はそれで動搖したのか、実力を出し切れないまま、一人に抜き去られ、一中は4位に後退した。

それでも最後は意地を見せて、第三走者にバトンを渡す間際には3位とほぼ同着くらいまで盛り返した。

「お願い！」

歩美からバトンを受け取った秋本陽子は、しっかりと頷いてバトンを握りしめた。

陽子は必死に食らいついでいこうと頑張ったが、恭子にバトンを渡すときには少しあなされた4位だった。

恭子はバトンを受け取ると、すぐにトップスピードに入つて、前を行く3位のランナーを追いつめ、ほとんど同時にゴールしたが、完全に追い抜くことは出来なかつた。

そして、どっちが3位に入ったのかは写真判定になつた。写真判定の結果、一中は惜しくも4位となつた。

恭子たちはがっくりと肩を落とした。

中でも、バトンの受け渡しで失敗したキャプテンの大橋歩美は膝について泣き崩れてた。

「まだ、落ちたと決まつた訳じゃないわ。」

由美が歩美の肩を抱いて励ました。

「そうよ。第2レースの結果を見ましょ。」

恭子もそう言つて歩美を抱き上げた。

スタンドで見ていた、拓と悠斗は電光掲示板の順位とタイムを見比べていた。

「4位か…」りやあ、まずいな。」

悠斗が呟く。

「ああ、でもタイムを見てみろよ。第2レースの結果では充分可能性を期待できるタイムだ。」

「なるほど。よく頑張ったな。これなら期待できるぞ。あいつら、そのことにまだ気が付いていないらしいな。」

「そのようだな。」

グランドでうなだれている一中のメンバーを見て、拓と悠斗はそう思った。

悠斗は大声で一中のメンバーに呼びかけた。

そして、掲示板の方を指して、両手で大きなを作った。それに気が付いた恭子が、同じように両手でをつくつて返したので、恭子がまだ諦めていないと一人は理解した。

拓が予想して通り、第2レースでは上位3チームが圧倒的な強さを見せたものの、4、5位のチームは大きく離されてゴールした。その結果、一中は7番目のタイムでギリギリ決勝進出を果たしたのだった。

第2レース5位のチームのタイムが電光掲示板に浮かび上がったとき、恭子たちは飛び上がって喜んだ。

キヤブテンの歩美はこの幸運を神様に感謝した。

そんな恭子たちを野村は戒めた。

「おい、嬉しいのは分かるが、喜ぶのはまだ早いぞ。決勝では少しでも上の順位を目指して貰わないと、あいつらにも失礼だぞ。」

そう言って、野村が示した方には、僅差で敗れた第2レース5位だ

つたチームのメンバーが肩を落として泣き崩れていた。ついさっきまでは自分たちがそこにいた。

そのことを考へると、恭子たちも浮かれているわけには行かないと思つた。

100mの決勝に残つたのは8人。

準決勝で3番目のタイムだつた恭子は第3コース。

1コースには南部三中の君塚真奈美。

2コースは川村中の江藤和美。

4コースが南部四中の原智子、準決勝の1位のタイムを出した選手だ。

5コースは高野台中の田中美由紀。

6コースはつつじヶ丘中の進藤麻衣子。

7コースは南部四中の原郁子、4コースの原智子とは双子の姉妹だ。そして、8コースには東部一中の柳瀬川純子。

恭子と原智子とのタイム差はわずかに0秒02。

準決勝をトップ通過を確信した瞬間からスピードを落として、流した恭子には充分逆転可能なタイム差だった。

「いよいよ100の決勝だな。」

スタンドの手摺にもたれかかった悠斗は拓に向かつてそう言つた。スタンドのプラスチック製の椅子に座つていた拓も立ち上がりて手摺にもたれかかった。

「そろそろ行かなくちゃ。」

「なんだって？」

「そろそろ練習に行かなくちゃならない。」

「何を言つてる？今日は休みじゃなかつたのか？」

「ああ、会社は休みにしたが、練習を休むわけにはいかない。」

「じゃあ、せめてこのレースだけでも見ていいってやれよ。」

「いや、見るまでもないさ。」

そう言つて、拓はスタンドを後にした。

「冷たいヤツだなあ。」

歩き去る拓の背中を見つめて悠斗はそう呟いた。

拓が競技場の外に出たとき、ピストルの音が響き渡り、場内に歓声が沸き上がった。

「立ち止まるなよ。君はこんなところで躊躇してなんかいられないんだから……そして、風になれ。」

拓は一瞬だけ振り向くと、そう呟いた。

スタートと同時に恭子は一步前に飛び出した。
それからみるみる他の選手たちを引き離した。

50mに差し掛かる前に既にトップスピードに乗せていた。

4コースの原智子と5コースの田中美由紀が食い下がる。
しかし、誰も恭子の影を踏むことすらできなかつた。

電光掲示板に浮かび上がつた数字を見て野村は腰を抜かしそうになつた。

11・75。

女子の中学生記録に0秒02届かなかい数字だつた。

走り幅跳びの5m87cmも大した記録だが、これは中学生記録から比べると、30cm以上差がある。

これが2年の秋の新人戦で出た記録となれば、当然、中学生記録の更新が期待される。

野村は改めて自分の運命を神に感謝した。

もしかしたら、自分の教え子が男女の日本記録を両方塗り替えるかもしれないのだ。

そう思つたら、気絶しそうになつた。

それは不思議な感覚だつた。

まるで空を飛んでいるよつた気分だった。

廻りの景色が消え去り、歓声も雜音も聞こえなくなつた。

自分が今いるのは陸上競技場のトラックの上、しかも、100mの決勝の舞台だということさえ忘れてしまいそうな感覚。

恭子は風邪と同化して「ゴールを駆け抜けた。

テープを切った瞬間、意識が戻つて後ろを振り向いた。

1、2、3…7人いる。

恭子の前には誰もいない。

『勝つた？』

そう思つた瞬間、「やつたぞー！」そう叫んでいる野村の声が耳に飛び込んできた。

そのまわりでチームメイト達が、飛び跳ねてバンザイをしている。

「どうか、私レースに出てたんだ！」

恭子にはまるで実感がなかつた。

すると、原姉妹が恭子のそばに駆け寄ってきて祝福の言葉をかけた。「三浦さんおめでとう。さすがだわ。でも、リレーでは負けないわよ。」

「ありがとう…」

恭子はようやく自分が優勝したことを意識した。

優勝するのは当たり前。

レースお前まではそう思つていたが、いざ、実際に優勝してみると、その言葉の重みがズシリとのしかかつてきた。

そう、まだリレーの決勝が残つてゐる。

リレーの決勝では原姉妹がいる南部四中が油症候補の筆頭に挙げられてゐる。

準決勝の第一レースでは、100の決勝に進む原姉妹を温存して1位通過しているのだ。

しかも、タイムは決勝に進んだ8チーム中で最速だった。

その南部四中が4コース。

1 ハーフが恭子達、第一中学。

2 ハーフは新藤麻衣子率いる、つづじヶ丘中。

3 ハーフは君塚真由美率いる南部三中で原姉妹率いる南部四中にはライバル意識をむき出しにしていて、100決勝でのリベンジを団論んでいる。

5 ハーフは江藤和美率いる、川村中。

6 ハーフは田中美由紀率いる、高野台中。

7 ハーフの東洋中は100の決勝には選手を送れなかつたが、4人がそこそこまとまつたチームだ。

そして8 ハーフが、柳瀬川純子率いる、東部一中。

恭子達、第一中学のタイムは50秒38。

原姉妹のいる南部第四中学の記録は飛車角抜きでも48秒23。この段階で2秒以上劣っていた。

これに原姉妹が加われば、中学記録の47秒73を更新するかもしれないという期待がかかる南部四中にどこまで善戦できるか、…正直、野村は6位入賞できれば言うことはないと思つた。

いくら、100mチャンピオンの恭子がいるとはいえ、他のメンバーの力量を考えたら、決勝に出られただけでも、奇跡に近かつたからだ。

男子は「ことじ」とく予選で敗退し、からうじて走り高跳びの佐藤良伸が6位入賞を果たし、面目を保つた。

したがつて、第一中学としてはこの女子100×4リレーが最後の種目となる。

特の近隣校も、リレーでは決勝に残ることができなかつたので、このレースにはそれらの学校の選手や関係者が期待を込めて第一中学の応援に集まつてきていた。

恭子は、こういったプレッシャーを存分に楽しむことができる選手だったが、他のメンバーは相当緊張しているようだつた。

野村はメンバーの緊張をほぐそうと、「冗談を交えて励ましの言葉をかけたが、これがかえって逆効果になつたようで、準決勝でバトン抜け私でミスをしたキャプテンの大橋歩美と第一走者の橋本由美は手の震えが止まらなかつた。

見かねた恭子は他のメンバーを集めて円陣を組むと小さな声でささやいた。

その言葉を聞いた他のメンバーは、普ッと吹き出して笑い始めた。「だから、気楽にいきましょう。それに、私達、一度、準決で落ちてるんだから。そう思えば、このレースはロスタイルみみたいなもんだから。ねつ！」

歩美と由美の震えは止まつていた。

そして、いつものようにキャプテンの大橋歩美が気合を入れる言葉を口にした。

「由美、スタート大事だからね。」

「任して！」

橋本由美は頷いた。

そして、歩美は続けた。

「私は今度こそ、頑張るから、陽子も何とか恭子にバトンを渡すまでふんばって。」

「OK！頑張るわ。」

秋本陽子もいつも以上に気合充分だ。

「最後はいつも頼つてばかりで申し訳ないけど、やっぱりあなたが頼りなの。だけど、今日は思いっきり楽しみましょう。」

キャプテンの大橋歩美と他のメンバーが、いつものように一斉に恭子を見た。

「任せなさい！」

恭子も、いつものように一言言い胸をパーンと叩いた。

そして、キャプテンの号令で最後の気合を入れた。

「イッチュウ　ファイツ！」

「オー！」

さあ！準備は整つた。

選手たちは中央の表彰台の前の整列して、メンバーの確認が行われて後、レースに関する注意事項を聞かされ、それぞれのスタート地点へ散つていった。

第一走者の橋本由美は他のメンバーを見渡した。
準決勝で一緒に走った南部三中、川村中、東部一中は同じ顔触れだつた。

少なくともこの三人には先行できると確信していた。

できれば、トップで歩美にバトンを渡してやりたいと思ったが、南部四中は第一走者に原郁子を起用してきた。

100m決勝では4位に入賞した選手だ。

由美自身も、決勝には残れなかつたが、準決までは勝ち残つたランナーで、恭子に比べれば見劣りするが、他の学校だつたら、アンカーに起用されてもおかしくない実力があつた。

実質、第一中は由美が逃げて、他の二人が持ちこたえ、最後、恭子が突き放す。

これがリレーでの必勝パターンだつた。

しかし、由美は原郁子の顔を見ても動じることはなかつた。
不思議と、落ち着いて物を考えることができた。

『まあ、最悪、5位くらいでいけば、最後、6位入賞は出来るかもね。』なんて計算をする余裕すらあつた。

反対に、他の学校の選手たちはかなり緊張している様子だつた。

第一走者の大橋歩美は、あくまで、つなぎに徹することと割り切つている。

第一走者のメンバーを考えると、おそらく由美は2位でバトンを運んでくるだろう。

『私が一人、陽子が一人に抜かれたとして、最悪6位で恭子にバトンが渡ればそこから順位が下がることはないから、入賞確定、野村

先生大喜び！』

二人に抜かれてもいい！そう考えると、気分が楽になった。

第三走者の秋元陽子も歩美と同じような計算をしていた。しかし、他のメンバーの様子を見ると、明らかに緊張しているのが分かった。

この新人戦では、ほとんどの選手が初めて決勝のレースに出ているのだ。

場慣れしているものなどほとんどいない。

南部四中の選手だけが、200mで優勝している。

そんな選手が入ってきた第3グループの他のメンバーは相当南部四中を警戒している。

しかし、陽子にとっては彼女を計算に入れる必要がない。

当然、自分より先にバトンを受け取るだろうし、彼女を追い抜くとか差を詰めるなんてことは全く考えていなかつたからだ。

何より、自分のうしろには恭子がいる。
こんなに心強いことはない。

恭子のいる第4グループ。

さすがに、ここは100mの決勝を再現したかのようなメンバー構成だった。

当然、他の学校の選手たちは恭子を警戒しているようだった。

しかし、これはリレー。

ここでのバトンが運ばれて来た時の順位とタイム差が重要になる。当然、ここで横一線だつたら誰も恭子にはかなわない。

ここに来るまでに、第一中学をどれくらい離して来られるかが、他の学校の作戦上のキーポイントだつた。

したがつて、第一、第三走者にある程度実力のある選手を廻したいところだつたが、そうなると、第一走者が手薄になる。

スタートでの出遅れはやっぱり避けたい。

その辺の駆け引きがレースのポイントだと考えていた。

ただ、一校南部四中以外は。

南部四中は、明らかに実力が抜けていた。

最後に三浦恭子がいても、相手は第一中学ではなく、中学記録だけ。

そう考えていた。

各校、様々な思惑を秘めてスタートに時間が、刻一刻と近づいていた。

9・優勝の「」褒美

恭子は顔を上げて空を見上げると、そつと目を開じ、大きく深呼吸をした。

「時間です。準備してください。」

係員の男性が声をかけた。

恭子は目を開いてスタートと地点を見た。

由美がスタート位地に付いていた。

「いい顔をしているわ。」

由美的表情に緊張のいろはなく、今、この時を楽しんでいるような、そんな顔に見えた。

スタートーが位置に付き、「位置について。」と促す。
各校の第一走者たちはスタート位置へ進んだ。

「用意…」

由美は自分の心臓の鼓動を感じながら、意識を集中させた。
周囲の雑音が消えた瞬間、一か八かの勝負に出た。

思いつきり地面を蹴りだしたのと同時に“パーン”とピストルの音がした。

「ドンピシャ！」

由美は他の選手たちより1歩先に飛び出した。

フライングギリギリだったが、一度目のピストルはならなかつた。

第一中学は1コースだったので、他の選手たちのスタート具合が手に取るように分かつた。

由美はスタート直後には2コース・3コースの選手の前に出ていた。

その後はもう何も考えずに、第2走者の歩美の左手だけを見て走つ

た。

「もう少し…」

もう少しでトップのままバトンをつなげる。

しかし、4コースの原郁子選手が先にバトンを渡すのがチラツと見えた。

ほぼ同時に由美も第2走者の歩美にバトンを渡した。

歩美には、ピストルがなるると同時に由美が飛び出すのがはつきり見えた。

それから、あつと言つ間に由美が近づいてくる。

歩美は徐々に助走を始め、左手を差し出した。

そして、今度はしっかりと由美からのバトンを受け取った。

「行けーっ！」

歩美は左手で受け取ったバトンを右手に持ち替えながら、後方から聞こえてきた由美の声に心の中で頷いた。

バトンを受け取ったときは2位だつた。

しかし、最内を走る歩美には、まだ前方に5人の選手が見えた。そんな中で、今、自分が何番目なのかは考えるつもりはなかつた。ただ、次の第3走者、秋元陽子へバトンをつなぐことだけしか考えていなかつた。

そして、すぐに陽子の背中が見えてきた。

「お願ひ！」

そう言って陽子にバトンを渡して歩美はその場にひざまづいた。既に走り終えた由美が右手の指を3本立てて歩美に微笑みかけている。

「よかつた。さつきよりがんばれたんだわ。」

歩美は立ち上がると、ゴール地点へ向かって駆けだした。

歩美から渡されたバトンは、準決の時よりずっと重たく感じられた。

陽子は、この重さにそが自分を励ましてくれるメンバーたちの気持ちの証だと感じた。

第一中学が1コースだったのは、陽子にとってプラスだった。

陽子は小学生の頃、スケートのショートトラック競技を冬の間やっていた経験がある。

コーナーがきつければきついほど、力を発揮できるのだ。

しかし、さすがに、土の上では陸上競技の専門家たちに食らいついていくのがやつとだつた。

アンカーにバトンを渡すところは直線コースの入口になる。

ここで各校横一線に並ぶのだ。

今までずっとコーナーを走つてきた陽子は、自分が今何番目なのかまったく分からなかつた。

というより、気にする余裕がなかつた。

「頑張つて！」

そう叫ぶ恭子の声がはつきり聞こえた。

陽子は最後の力を振り絞つてバトンを差し出した。

その外側で3人の選手が既にバトンを渡し終えて、最終走者に声援を送つている姿があつた。

恭子にバトンが渡つた二が4番目。

野村は、この時点で6位入賞は間違いないことを確信した。

しかし、野村が驚いたのは今まで走つた3人が、3人とも100mの自己記録を更新していたからだ。

あくまでも、バトンを受け取つて渡すまでの参考記録だが、第2走者の大橋歩美と第3走者の秋元陽子は、終始コーナーを走つていたにも係わらず、直線で記録を取つたときの最高タイムを越えていたのだから驚いた。

「こりやあ、ひょつとするとひょつとするかもしけんなあ！」

スタンドで見ていた、悠斗も、ここまで展開から一中が相当、

頑張っているのが分かつた。

もつとも、準決勝でもバトントラブルがなければ、1秒以上タイムが短縮されただらう」とを思えば、当然といえば当然だと頷いた。

そして、いよいよ、恭子へバトンが渡った。

「よし！ 行け～っ！」

悠斗は懇親の思いをこめて叫んだ。

「いい感じだわ。みんな最高の走り。」

恭子は由美、歩美、陽子の走りを見つめながら、自分の体の中で血液が躍動しているのを感じた。

第3走者の陽子が近づいてくるに伴って、恭子はワクワクして仕方がなかつた。

心臓の鼓動がリズミカルに時を刻んでいる。

スタンドの歓声がスローモーション画像のBGMように聞こえてくる。

4コース、南部四中の原智子が先頭でバトンを受け走り去つていった。

続いて、5コースの川村中・江藤和美、3コース・南部三中の君塚真由美が僅差で走り出した。

少し遅れて、4番目で陽子からバトンを受けた恭子は、バトンの感触を左手に感じた瞬間、全身に今までに経験したことのないエネルギーが溢れてくるのを感じた。

恭子はバトンを受けて最初の力を左足で思いつきり地面に向かって放出した。

同時に、地面で反発した力が少し沈め加減にした恭子の体を一気に前方へはじき出した。

ものの二、三歩で恭子は江藤和美と君塚真由美を視界の外に弾き飛ばした。

恭子以外の全てのものが止まっているように見えた。

恭子の動き 자체も、まるでスローモーションのようだった。
競技場にいた誰もがそう感じていた。

それほど恭子の走は力強く、美しかった。

江藤和美と君塚真由美は恭子の姿を確認することが出来なかつた。
一陣の風が通り過ぎたと思つたら、恭子の姿は遙か彼方に消えてい
こうとしていた。

実際には1、2m前にいるだけだつたが、二人にはそう思えた。

恭子の前には南部四中の原智子しかいなくなつた。

バトンを受けたばかりの江藤和美、君塚真由美とは違つて、既にト
ップスピードに達している原智子を捉えるのは、さすがの恭子でも
容易なことではなかつた。

しかし、恭子の視界にはゴールの白いテープしかなかつた。
今、自分が走つているのは、3人のチームメイトが運んできたバト
ンをホールまで届けること。
その思い以外には何もなかつた。

原智子に届こうが届くまいが、そんなことはどうでもよかつた。
そして、もう一度あの時のような風を感じてみたいと思つた。
「もう少し！もう少し…」

目の前には、ゴールの白いテープが迫つていた。

月に一度、練習が休みになる第一日曜日の前日。
それこそ一月ぶりに拓は実家に帰つてきていた。

居酒屋“ばれいしょ”の一階の座敷。

拓が来るときは、マスターが気を利かせて一階の個室を空けてくれ
る。

そこで悠斗と酒を飲んでいると、マスターの娘でもあり、恭子の親友でもある野々村仁美が二人のそばにやつてきた。

「ねえ、拓さん？ 恭子に知られてもいいかしら。拓さんが来ていること。」

拓は、“恭子”と聞いて、少しためらつたが、「かまわないよ。」と、答えた。

逆に、悠斗はかなり“ドキッ”とした。

悠斗がコーセー勤めるサッカーラブ、ジユニアスターズに恭子の弟の浩人が入ってきてから、恭子と接する機会が多くなつていた悠斗は、以前にも増して恭子のことが気になつっていたからだ。

「悠斗先輩もいいですよね？」

仁美に念を押されて、悠斗は一つ返事で「もちろんさー」と答えた。仁美は嬉しそうに、その場で携帯電話で恭子の家に電話をかけた。

「へ～え、もう携帯電話なんか持つてるんだ？」

拓は、感心して仁美に問いかけた。

「今時、持つてない方が珍しいですよ。私の友達だと、恭子くらいのもんかしら。」

「そうなんだ？」

拓は、益々感心した。

そう言う拓も携帯電話は持つていなかつた。

「まったく、走ることばかり考えているヤツには携帯電話なんか必要じゃないみたいだな。」

悠斗がからかうように、拓の方を見て言つた。

「えつ？ まさか、拓さんも携帯持つてないんですか？」

拓は、少し恥ずかしそうに「う、うん。まあ…」と、話しを濁した。

「それは残念ねえ…」

そう言って仁美は首を傾げて何やら考え出した。

「どうかしたのか？」

その様子に気が付いた悠斗が尋ねた。

「実はね、今電話したら、恭子も、この前の新人戦で優勝したから、

携帯買つて貰つたんだって。だから、拓也と番号とアドレスを交換できるって楽しみにしていたのに…」

「やうなんだ！じゃあ、替わりに俺が交換してやるよ。」

雄太が自分の携帯電話を取り出して、じりり始める。急に拓が立ち上がった。

「仁美ちゃんゴメン、すぐ戻つてくるから恭子ちゃんが来たら、少し待つててつて、そう言つといで。」

そして、階段を駆け下り、出ていった。

「なんだ？ 急に、どうしちやつたんだ？」

悠斗は、訳が分からず、仁美の顔を見た。

仁美もキヨトンとした顔で突つ立つていた。

受話器を置いた恭子は、嬉しさを表情に出れないように部屋へ戻つた。

部屋に戻ると、買つてもらつたばかりの携帯電話を手に取つた。折りたたみ式で、白いボディのシンプルなデザインのものだ。ジーンズに後ろのポケットにそれをねじ込むと、ウイングブレーカーを羽織り、阪神タイガースの野球帽をかぶつて部屋を出た。そのとたん、居間にいた父親の孝之に、声をかけられた。

「仁美ちゃんなんだつて？」

「うん、ちょっと話があるつて。だから今から、仁美ん家行つて来る。」¹はんじ馳走してくれるみたいだから、お母さんにそう言つといじ。」

孝之はチラッと時計に目をやつた。

午後6時だった。

「遅くなるようなら電話してくれ。迎えに行つてやるからな。」

「うん、お願ひ！」

その返事を聞いて、孝之は、安心した。

恭子は、孝之が迎えに来るのを拒絶されしなければ、父親に束縛されることがないのを心得ていた。

「気をつけて行って来いよ。」

孝之がそう言つた時にさ、既に恭子は玄関を出でていた。

その頃拓は、駅前の携帯電話ショップに來ていた。携帯電話の事なんかまるでわからないので、ショップの店員に聞いてみた。

「実は、初めて使うんですが、どれが簡単ですか？」

電話会社の制服を着た女性の店員が歩み寄つてきて、無数に並べられた携帯電話の中から、1台を手に取つて、拓に示した。

それは、テレビのリモコンのようなデザインのものだつた。

「これが、いちばん簡単に扱える機種です。お年寄りの方へのプレゼントには最適ですよ。」

「お年寄り?」

そう言われて、拓は店員が勘違いしているのだと気が付いた。

「いえ、プレゼントではなくて、僕が使いたいんです。」

店員は少し驚いた顔をしながらも、すぐに表情を整えて、いくつかの携帯電話を物色しながら、拓に質問をしてきた。

「どういう目的でお使いになられますか?」

「目的ですか?」

拓は不思議に感じた。

電話を買うのに、電話を掛ける以外の目的って…

「ええ、例えば、写真の画質にこだわるとか、音楽を楽しむとか色々ありますけど。」

「はあ…操作が難しくなければ何でもいいです。」

「今は、どの機種もそんなに難しくはないですから、これなんかいかがですか?若い方には結構人気があるんですよ。」

「じゃあ、それ下さい。すぐに使えるんですか?」

「ありがとうございます。少々手続がありますので、30分ほどお待ちいただけますか?」

「30分…分かりました。なるべく急いで下さい。」

恭子が“ばれいしょ”のドアを開けると、マスターが人差し指で上を指した。

恭子は頷いて一階での階段を上がつていった。

座敷の個室から、笑い声が聞こえてきた。

恭子は個室の襖戸を少し開けて中を覗いた。

仁美と悠斗が見えた。

拓の姿は見当たらなかつた。

襖戸が開いたのに気が付いた仁美が、大きく襖戸を開くと、そこには恭子が立つていた。

「あら、いらっしゃい。さすが、チャンピオン。早かつたわね。」

恭子は拓がいないことに、ちょっと、がっかりしているようだつた。

「仁美、拓さんは？」

「うん、なんだか、急に出ていつちやつて。すぐ戻るから、恭子が来たら待つてるよ！」って。」

「そう……」

「まあ、上がりなよ。すぐに戻つて来るつて。」

悠斗に促されて、恭子は座敷に上がつた。

「はい。これで、今から使えますよ。」

店員に携帯電話を手渡された拓は、手提げ袋を受け取ると、大急ぎで“ばれいしょ”へ向かつて駆けだした。

女性の店員は、クスクス笑いながら駆け出して行つた拓の後姿を見送つた。

「おい、今の西崎拓じやないのか？」

奥にいた男性の店員が女性店員の横に来てそう言つた。

「西崎……？」

「なんだ、知らないのか？100㍍の日本記録保持者でこの町の小学校と中学校を出てるんだぞ。」

「やうなんですか？だつたら、もつと早く教えて下さこよ。サイン貰つておけばよかつた。」

“ばれいしょ”の一階の座敷では、悠斗が恭子の新人戦での活躍をたたえていた。

「しかし、野村先生も君に走り幅跳びをやらせるなんて、大したもんだよ。先見の明があるというか、なんといつか…」

その時、階段を駆け上がつてくる足音が聞こえてきたかと思うと、背後の襖戸が勢い良く開いた。

そこには息を切らしながら、額の汗を手でぬぐつている拓がいた。

「おい、どこ行つてたんだ？恭子ちゃん、とっくに来てたんだぞ。悠斗が、少々激しい口調で拓を責めると、拓は、左手で“ゴメン”という風な仕草で三人にそれぞれ詫びた。

そして、右手に持つっていた手提げ袋を差し出し、ようやく落ち着いた心臓に左手を当てて口を開いたが声にならなかつた。

拓が差し出した手提げ袋が携帯電話会社のものであることは、他の三人にはすぐに分かつた。

それを見た悠斗が、ニヤニヤしながらからかうように拓に言つた。

「なんだ、急に飛ぶ出していつたと思ったたら、恭子ちゃんが携帯電話の番号を交換したがつて聞いたもんだから、それ買いに行つたのか？」

悠斗の言葉で、状況を理解した恭子は、拓の方を見てはにかむよくな笑みを浮かべた。

拓は座敷に上がると、早速悠斗に買つたばかりの携帯電話を見せて、使い方を聞き始めた。

「とりあえず、ここにいるメンバーの電話番号とメールアドレスを入れてやるから、あとは自分で説明書を読んで研究しろ。」

悠斗はそう言つて、三人の番号とメールアドレスを拓の携帯に登録した。

「ねえ、悠斗先輩、私もお願ひしていいかしら？」

そう言つて恭子も携帯電話を取り出し、悠斗に渡した。

「あれっ？これ、お前のと同じじゃないか？」

悠斗はそう言つて、拓の携帯電話と見比べた。

拓が買つてきた携帯電話は、恭子が買つてもらつたものとまったく同じものだつた。

「なんだよ！お前たちは…どこまで、運命共同体なんだ？」

四人は、しばらく互いの携帯電話をいじつたり、メールをしてアドレスの確認をしたりしながら過(じ)していたが、やがて拓が新人戦の話を始めたので、恭子の表情が変わつた。

「リレーは残念だつたね。」

「そうだよ！ゴールがあと1mでも先にあつたら、絶対に抜かしていたのに。」

実際にその場で見ていた悠斗は、本当に悔しそうな顔をして残念がつた。

リレーの決勝では、惜しくも第2位だつた。

4位でバトンを受け取つた恭子は、あつという間に、前の一人をかわすと、先頭を走る南部四中の原智子を追いつめた。そして、ほぼ一人同時にゴールになだれ込んだ。

判定は写真に委ねられ、一中は一着に敗れた。

しかし、一中のメンバーたちは、恭子に駆け寄り、まるで、優勝したかのようにはしゃぎ、そして、大声をあげて泣いた。

「ありがとう！恭子。」

「だけど、いちばん楽しかつた。今までのどのレースよりも風に近づけたような気がするわ。」

「ああ、確かに、野村先生が言つていたけど、バトンを受けてからだから、実質100mなかつたかもしれないけど、普通に100m走つていれば、中学新を出していたかもしれないって。」

「でも、あれはリレーだったから、気持ちがすぐ入っちゃってたから。」

「その気持ちを忘れないようにするんだ。それが、君の走りの原動力になる。いつでも、君の周りにはそういうエネルギーが満ち溢れているんだ。それは、ある意味、神様に選ばれた人間にしか『えられないものなんだと思つ。君はそれを間違いなく持つている。』拓にそう言われると、不思議と、その気になつてくる。

そして、それは、恭子の心の奥深くにずっと眠つていた感覚でもあつた。

拓と巡り合つてから、恭子の中の『いつ』た感覚が徐々に田覚めてくるのを恭子は感じていた。

「『りやあ、一中から男女の日本記録保持者が出るのも時間の問題だなあ！』

そう言つてはしゃぐ悠斗と仁美をよそに、拓はやせじこまなむじで、恭子を見つめていた。

恭子は、その時、拓のまなむじが何を語つているのか、感じ取ることはできなかつた。

「拓さん、私も覚えるから、拓さんも早く携帯の使い方覚えてくださいね。」

「ああ、頑張るよ。」

「ねえ、拓さん？『写真撮つてもいい？』

そう言つて、恭子は拓に向かつて携帯電話のカメラを向けた。

それを見た仁美が、恭子から携帯電話を取り上げて『いつ』言つた。

「どうせなら、二人一緒の写真撮つてあげるよ。ほら、恭子向こうに行つて拓さんの横に座つて。」

仁美にそう言われると、恭子はテーブルの向かいに座つていた拓の方に行き、拓の腕を取つて体を寄せた。

「ほら、もう少しくつついて。じゃないと入らないわ。」

恭子は拓にほつぺたがくつづくほど顔を寄せた。

「ハイ、チーズ！」

カシャッとシャッター音が響くと、恭子は早速画面を確認した。
「やつた～！この写真、拓さんにも送つておいてあげるわね。」
無邪気の喜んでいる恭子の表情はまだまだ子供そのものだった。
拓は複雑な気持ちで、恭子の笑顔眺めた。

ホワイトクリスマス

10・ホワイトクリスマス

空はどんよりとした雲に覆われ、朝から寒さが肌を刺した。しかし、駅前の商店街は活気に満ち溢れていた。

どの店の店頭にも“SEL”と書かれたビラが貼られている。そして、クリスマスツリーのイルミネーションと“ジングルベル”的曲が、行き交う人たちの心をよりいっそうかき立てているようだ。「じりやあ、久しぶりにホワイトクリスマスになるかもな！」携帯電話ショップの男性店員が空を見上げてそう言った。

中から、女性の店員もでてきて空を見上げた。

女性の店員は腕組みをして早々に店の中へ引き上げていった。店内に流れているラジオ番組のパーソナリティが“今夜は夕方から降り始めた雪が、日付の替わる頃にはうつすらと積もるだろう。久しぶりのホワイトクリスマスになるだろう”と伝えていた。

通知票を開くと、国語4、数学5、理科（物理）5、社会（政治・経済）4、英語4、音楽5、美術4、体育5、家庭科5といった数字が並んでいる。

「うわー！いいなあ！と、いうよりさすがだね！」

そう言つて恭子の通知票を後の席から覗き込んだ仁美は、自分の通知票と見比べてため息を付いた。

「どーれ、見せてみなさい！」

恭子が振り向いて、仁美の通知票を取り上げた。

恭子は、そのまま仁美の机で通知票を広げて、自分のと比べてみた。国語5、数学3、理科（物理）4、社会（政治・経済）5、英語3、音楽4、美術3、体育5、家庭科5。

「あら、凄いじゃない！」

「そんなことないわよ。『3』が3つもあるし。それに、恭子に『凄い』なんて言われても、ありがたみが感じられないわ。」

「何言つてるのよ。私にしてみれば、政治・経済で『5』を貰う人なんて神様みたいだわ！」

「そうなのよねえ！国語も得意だし、私って、新聞記者に向いてるんじやないかしらー！」

「いいかもね！」

「そうよね！もしそなつたら、恭子の記事が書けたらいいなあ。」

「私の？」

「そう！恭子がオリンピックで拓さんと一緒に活躍する記事。『

「オリンピックだなんて大袈裟だわ。』

そんな話しで盛り上がる一人をよそに、担任の野村が冬休み中の注意事項を話し始めた。

恭子は正面に向き直り、野村の話に耳を傾けた。

毎を過ぎても一向に気温が上まる気配はなかった。
グランドを周回する部員たちの口元からは一様に白くなつた息が吐き出されている。

2週、3週、周回を重ねることで、徐々に体が温まり、ついすりと汗をかき始めた頃、空から白いものが落ちてきた。
選手たちは立ち止まって、一斉に空を見上げた。

「予報よりずいぶん早いなあ。」

誰かがそんなことを呟いた。

拓は、かまわずに一人で走り続けた。

すると、いきなり後から肩をポンと叩かれた。
振り向くと、篠塚が走りながら拓に言い寄ってきた。

「練習が終わつたらちょっと付き合つてくれないか？」

「今日はちょっと……」

「分かつてゐるセーフードなんだろ？手間はかけさせないから、ち

よつとだけ！なつ？頼むよ！」

篠塚はそれだけ言つと、拓の返事を聞かずに、ペースを上げて拓を追いかけていった。

「相変わらず、訳わからんねえおじさんだなあ。しかし、あんなに喋りながら走つてゐるのに全くリズムが替わらない。さすがシノさんだ。

拓は、篠塚が参加しなかつた国体こそ、連覇を果たしたが、全日本は篠塚が制した。

日本記録保持者とはいえ、百分の一秒を競う世界では、ちょっとした体調の変化で勝負の結果が変わってしまうほど、拓と篠塚の力は拮抗していた。

終業式を終えた恭子と仁美は駅前のショッピングモールにある広場で待ち合わせをしていた。

クリスマスのプレゼントを買つたのだ。

恭子は、広場の真ん中にある時計台の下で白いベンチに座つて仁美が来るのを待つていた。

手をセーターの袖の中に納めて、ほっぺたを覆つている。

吐く息は白くじっと座つていると、凍えそうなほど寒い。

「まったく、なんでこんな外で待ち合わせすることにしたんだろう？」

そんなことを思いながら立ち上がり、飛び跳ねたり時計台の廻りを歩いたりしていると、頬に冷たいものが触れたような気がした。

恭子は立ち止まり空を見上げた。

空から雪が舞い降りてきた。

「雪？」

恭子は、一瞬、さつきまでの寒さを忘れてしまった。

「どうりで寒いはずね！」

都会では温暖化の影響なのかどうかは分からぬけれど、こんな時期に雪が降るのは珍しい。

雪を見てワクワクするなんて、自分もまだまだ子供なんだとそう思つた時、聞きなれな声が自分を呼んでいるのに気がついた。もちろん、声の主は仁美だつた。

ただでさえ、暗くなるのが早いこの季節なのに、空は厚い雲に覆われ、昼過ぎから降り始めた雪が次第に世界を塗り替えていく。町の明かりに照らされた雪は、いつそう白く輝き、天然のイルミネイションはクリスマスイブの夜を最高に演出してくれた。まさにホワイトクリスマスとなつた。

拓は本社の玄関口で篠塚を待つていた。

クラクションが2回ほどなつた後、ヘッドライトが拓を照らした。シルバーのセダンな窓から篠塚が顔を出し、拓を手招きしている。拓は小走りで車に近づき、助手席のドアを開けると、素早く体を押し込み、シートベルトを締めた。

「こんなに雪が積もつてゐるのに大丈夫ですか？」

拓は、篠塚の運転を心配した。

「バカ言え、俺は自分の脚で走れなけりやあ、カーレーサーになつてゐるところさ！」

自慢げにそういうながら、篠塚はセダンを発進させた。

「ところでどこに行くんですか？」

「まあ、いい！黙つてついて来いよ。」

しばらく走ると、セダンは駅前のショッピングモールの中にある駐車場に入つていった。

駐車券を受け取り、車を空いたスペースに止めると、シートベルトを外してドアを開けた。

「何か買いもんでもするんですか？」

「うん！モノはもう買つてある。受け取るだけだ。」

「だったら俺が来る理由がないじゃないですか。」

「大ありさ！受取人が来なけりやあ、話にならない。」

「受取人？つて、俺つすか？」

「いいから、早くついて来い！」

そう言って、篠塚はショッピングモールに入っているブランドショッピングへ入つていった。

「頼んでいたものを貰おうか。」

そう、店員に告げると、店員の女性は満面の笑みを浮かべてレジブースの方からきれいにラッピングされた大小の箱を二つ取り出した。

それを受け取つた篠塚は、大きい箱を拓に渡し、ウインクをしながらこう言った。

「金は後でいいぞ！ とりあえず、クリスマスイブに彼女に余おうつてヤツがプレゼントの一つも持つていかないんじや、お姫様が悲しむぜ！」

「シノさん！」

呆気にとられた拓を残して、篠塚は小さい方の箱をジャンパーのポケットに突っ込むと、駐車場の方へ走つていった。

走りながら、ふりまかずに、手を振つて、叫んだ。

「早く行けよ！ 雪で電車が止まつちまつたら大変だぞ！」

一人置いて行かれた拓は、女性の店員に箱の中身を聞いてみた。店員はニコニコしながら、答えた。

「ヴィトンのポーチですよ。」

「ヴィトンってなんですか？」

女性の店員はクスクス笑いながら、同じ商品を手に取つて見せてくれた。

「これもらつたら、女の子は嬉しいもんなんですか？」

「はい、もちろんですよ。ちなみに、篠塚さんがお持ちになつたのはステファニーの指輪なんですよ。」

そんなやり取りをした後、店内の壁に掛けられている時計に目をやると、拓は女性の店員に一礼して、駅の方へ向かつて歩き出した。ショッピングモールは駅ビルと繋がつていて、駅ビルから直接電車のホームへ出られるようになつていた。

拓が切符を買おうとした時、ちょうど上りの電車がホームに滑り込んできた。

急いで切符を買って、ホームを横切り電車の飛び乗った拓は、大事なことを聞き忘れたと思った。

「これって、いつたい、いくらくらいにするんだ？」「五千円くらいはするんだろうな・・・」

恭子と仁美は、ショッピングモールの中にある、パッケージショッピングに来ていた。

この日の買い物の目的は、プレゼントを買うことではなく、用意したプレゼントをラッピングするための包装紙やリボンを買つためだつた。

実は、秋の新人戦が終わつた後、一人でマフラーを編み始めたのだ。

それまで、一人とも編み物などやつたことがなかつたから、恭子の母親に手ほどきを受けながら、ようやく“手編みのマフラー”が完成したところだった。

恭子はもぢりん拓のために、そして、仁美は悠斗のために。

その頃、悠斗は終業式を終えた後の子供たちを連れて、サッカーの練習試合をするため、隣町の小学校を訪れていた。

「こんな雪の中で試合をしたのは選手権に出た時以来だなあ。」

悠斗が懐かしそうにそういうと、監督の寺西は複雑な表情を浮かべて悠斗の顔を見た。

「もう、引きずつてないよな？」

「ああ、怪我のことですか？引きずつてたら、こいつらの面倒なんて見ていませんよ。それに、今はちゃんと新しいの目標がありますから！」

悠斗がきつぱり言い切つたので、寺西は微笑んで立ちあがつた。

「そりが、新しい目標ねエ・・・まあ、お前なら、せつとやり遂げられるさ。」

そんな寺西の顔を見上げて、悠斗はニッコリ笑った。
雪はだんだん激しくなり、すぐ先の景色も見えないくらい吹雪いってきた。

寺西は相手校の監督と話し合い、試合を中止することにした。
この時点で2-2の同点だったが、お互い、点を取っていたのでそこそこの収穫はあったとして中止することに同意した。

「さあ、みんな帰るぞ」

寺西はマイクロバスにチーンを巻きつけて子供たちを車に詰め込んだ。

「監督、将来の日本代表たちが乗ってるですから、無茶な運転はしないで下さいね！」

悠斗が真顔でそういうと、寺西は分かったと頷いて曇った窓ガラスをヒーターで暖めた。

恭子と仁美は、それぞれ好みの箱や包装紙を選び終えると、ラッピングコーナーへ行つた。

そこでは、ショップの店員がきれいなラッピングの仕方を教えてくれるクリスマス時期だけのサービスをやつていた。

二人は手編みのセーターを箱に入れた。

仁美は白い長方形の箱で蓋が透明のセロハンになつていて中身が見えるもの。

それを、赤い包装紙で包んだ。

そして、グリーンのリボンでクリスマスっぽいらぴんぐにした。

恭子は紺色の丸みのついた筒状の箱のリボンのシールを貼つた。

それを、銀色のラッピング用の袋に入れてからブルーのリボンで縛つた。

「どお？」

仁美はラッピングし終わったクリスマスプレゼントを掲げて恭子に

見せた。

「素敵！まさにクリスマスつて感じだよ。私のはどう？」

恭子も自分のを仁美に見せた。

「すごく可愛い！」

二人とも満足げに、笑みを浮かべながら、ラッピング「コーナーで貰つた、クリスマスツリーの絵が描かれた赤い紙袋にラッピングしたクリスマスプレゼントを入れてパーティー会場へ向かつた。

“ばれいしょ”の店先には店のイメージには似つかない、クリスマス用の飾り付けが施されていた。

厨房では、仁美の父親が、忘年会のグループのための料理の下ごしらえの余念がない。

アルバイトの店員達が忙しそうにテーブルのセッティングをしている。

カウンター席では馴染みの客数人が既に一杯やつている。

午後、6時を過ぎた頃から、店内は忘年会の団体客でにわかに騒がしくなってきた。

仁美の父親は、宴会客の料理を板前に任せると、別の料理の支度にとりかかつた。

「おやつさん、お嬢さんたちのパーティーは何時からですか？」

仁美の父親は、手を休めることなく、板前の質問に答えた。

「6時半からだ。」

「もう、時間がないじゃないですか？手伝いましょうか？」

「大丈夫だ。それに、こっちの料理はお前さんの専門外だ。」

板前は、仁美の父親が用意した材料や調味料を見て、なるほどと頷いて自分の仕事に戻つた。

そこには、パスタや生クリーム、霜降りのステーキ肉、レタスに似た見たことのない野菜、トロピカルなフルーツといった洋食の材料が山ほど用意されていた。

寺西は、子供たちを一人一人自宅の前まで送り届けた。

途中で、 “ばれいしょ” の前にさしかかり、そこで悠斗を降ろした。

「じゃあな！」

そう言って寺西は悠斗に手を振った。

車を降りた悠斗は、店の軒先まで走り、頭や服についた雪を払い落した。

店に入ると、そこは別の世界のように暖かかった。

「うー！ 暖つたけえ！」

両手を口の前で合わせて、息を吹きかけながら、奥の階段へ向かって店の中を進んでいった。

道中、アルバイトの店員やおかみさんに「早いね！」などとからかわれながら、二階の座敷へ上がっていった。

見渡すと、二階の座敷もほとんどの席が客で埋まっていた。

悠斗はいちばん手前の個室の襖戸を開けた。

まだ、誰も来ていない部屋にあがりこんで、ジャンパーを脱ぎ、ハンガーに掛けた床の間のポールにぶら下げた。

そのまま、奥の右側の席に腰を下ろした。

すぐに、女将の仁美の母親が熱いおしぼりと緑茶を持ってきた。

「いらっしゃい！ 寒かつたでしょ？ 試合どうだつた？」

悠斗はおしぼりを顔にかぶせて、しばらく上を向いたまま、答えた。

「後半途中で中止！ 2 - 2で引き分け。監督が車で子供たちを全員家まで送つていったよ。」

「まあ、寺西先生も大変ね。今時珍しいわよね。あんな先生。」

「本当ですよ！ ボクもあんな先生に習いたかったなあ。」

悠斗はよしやくおしぼりを顔から取つて暑い緑茶を一口すすつた。

「じゃあ、じゅっくり！」

そつまつて女将は部屋を出た。

改札口を出た拓は、南口方面へ歩いた。

駅ビルの出口から空を眺めたが、雪は到底やみそうになかった。

篠塚に車で送つてもらつたので傘を持つていなかつた拓は駅の売店でビニール傘を買つた。

“ばれいしょ”までは駅から歩いて10分。

タクシーの乗るうかとも思つたが、タクシー乗り場には5～6人の行列があつたので、歩くことにした。

道中は見慣れた風景だつたが、雪が舞う景色はどこか新鮮に感じた。白い息を吐きながら、店の明かりが見えるところまで歩いてきた頃には、手がかじかんで、体もすっかり冷え切つていて。

店の前まで来ると、場違いな飾り付けを見て思わず吹き出した。

「なんだか、すごい飾り付けだなあ。」

そつと、拓は店のドアを開けた。

恭子と仁美は、帰る途中、あまりの寒さに、ショッピングモールを出たところにある、ハンバーガーショップに立ち寄つた。

その時点では、パーティーが始まるまでに、まだ2時間はあつた。二人とも、ホットココアを飲みながら話し込んでしまつた。

ハンバーガーショップの店内は、それほど暖房が利いていなかつたが、ホットココアのおかげですっかり体も暖まつた。

しかし、ココアが覚めてくると、次第に肌寒くなつてきた。

それでも外の寒さに比べたら天国のようだつた。

「ちょっと、お手洗いに行つてくるね。」

仁美がそう言つて席を立とうとした。

そのとき、仁美の後方の壁に掛かつていた壁掛けの時計が目に入つた恭子はハツとした。

6時35分。

「仁美、たいへん！ もう、時間過ぎちゃつてるよ！」

「えつ？ 過ぎてるって、今、何時よ？」

そう言つて仁美は店内を見まわして時計を捜した。

恭子が指差した方を見て目の色が変わつた。

「やばい！お手洗いなんて入つてる場合じゃないわね！走るよ！」
そつ言つと、自分のトレーに恭子のカップを乗せ、空いた恭子のトレーと重ねて返却ブースの戻すと、紙袋と上着を手にとつて店を出た。

恭子も慌てて仁美に続いた。

二人は走つて“ばれいしょ”向かつた。

勢いよくハンバーガーショップを飛び出した仁美は、100mもしないうちに立ち止った。

「もうダメ！走れないよ。恭子、先に行つて！」

「なに言つてるの？ほら、お店はもうすぐそこじゃない！」

恭子にそう言われて正面を向いた仁美の眼には、色とりどりの電飾が巻きつけられたプラスチック製の巨大な雪だるまと、暖簾代りにぶら下がった万国旗が見えた。

その場所だけは異様な雰囲気を醸し出していたが、あたりはすっかり雪化粧をして静まり返つていた。

走つていた時には景色を眺める余裕すらないほど、必死だったが、こうして立ち止つて、周りの景色を目にすると、それぞれの家の玄関先にはきれいなイルミネーションが施されていて、白銀の世界をより一層、神秘なものに感じさせていた。

恭子も仁美も、こんなクリスマスイブの夜を経験したことがなかつたので、思わず、パーティーに遅刻していることさえ忘れてその場にたたずんだ。

背の高い仁美と、恭子のシルエットはあるで、恋人同士のようだつた。

一人が帰つてこないので、心配になつた仁美の父親は店の外に出て、辺りを見回した。

すると、道路の向こう側でカツプルがイチャついているのが見えた。

「まったく、最近の若いもんときたら、恥を知らんのかねえ。」

そう思つて、大声でアベックをからかつた。

「おい！おめえら、そんなところでイチャイチャしてないで、早く家に帰えんな！」

すると、そのアベックは驚いて振り向き、こっちを向いた。

店の明かりに照らされた二人の顔を見て仁美の父親はギョッとした。アベックだと思っていた一人は、仁美と恭子だつた。

その瞬間、仁美が駆け寄つて来て、ほっぺたに平手を叩きつけた。

「何考へてんの？このくそおやじ！」

仁美はそのまま、雪も払わずに店の中へ入つていった。

「恭子、何してんの？早くいくわよ！」

恭子は、赤い手形がついたマスターの顔をしみじみと眺めながら頭を下げる。

「お世話になります。」

ほっぺたを押えて、ボーッとしていたマスターが我にかえつて押えていない方の手を差し出し、恭子に応えた。

「なーに、いいつことよ！」

一人が二階の座敷へつくと、当然ながら、悠斗と拓はすでに席についていた。

「遅れちゃつて、ごめんなさい。」

二人が気まずそうに謝ると、拓と悠斗は目を見合させて、クラッカーを鳴らした。

「メリークリスマス！」

クラッカーの細い紙テープと小さな色紙の切れ端を頭から受け止めた恭子と仁美に拓と悠斗は満面の笑みを浮かべて迎えてくれた。

恭子は、嬉しくて、目が潤むのを感じて、涙がこぼれ落ちないように紙テープを拭うふりをして眼を拭いた。

「メリークリスマス。」

久しぶりに会つた拓は、一段と男らしくなつたように思えた。

11・4人の関係

年の瀬独特的の雰囲気は、クリスマスのそれとはまた違った面持しがある。

恭子はどうやらかといふと、年の瀬のワサワサした感じが好きだった。

12月29日。

この日から、父親の孝之は年末年始休暇に入っていた。

昼食を終えると、家族揃つて、近所の商店街へ買出しに出掛けた。

駅前のショッピングモールには、なんでも揃う、大きなスーパーもあるのだが、お正月の買出しは、やっぱり地元の商店街と決めてい

る。

恭子たちの住むマンションから“ばれいしょ”の前を通つて路地を右へ曲がると、商店街のほぼ真ん中あたりに出てくる。

ここで、一手に分かれて買い物をする。

恭子と母親の早紀は生鮮食品などを取り扱う商店が集まっている右手に、父親の孝之と弟の浩人は雑貨屋や乾物屋等がある左手の方へ買出しに行く。

「じゃあ、後でね。」

恭子は孝之と浩人にそう言つて手を振つた。

「お姉ちゃん達、今日は早く戻つてきてね。」

浩人が恭子たちに釘をさした。

毎年、買い物が終わると、この路地の向かい側にあるフルーツパーカーで待ち合わせすることになつていて。

浩人と孝之は、いつも先に買い物を追えて、かなり待つことになる。

今年は夕方から、浩人が大好きなアニメの特番があるので、早く帰

りたい…出来れば、今年は留守番をしていた方が良かつた…それが浩人の本音だつた。

「分かつた、分かつた。分かつたから早く行きな。」

孝幸と浩人が担当するのは、大掃除に使い道具や洗剤と年越しそばや雑煮の材料だ。

最初に米屋によつて、伸し餅を切つておいてくれるよつに頼んでから、乾物屋に入った。

そこで、だしを取るための昆布や鰹節、煮干しなどを買った。
それから雑貨屋で洗剤や化学雑巾、「ミニ袋」、軍手、そして、しめ飾りなどを買う。

浩人は進んで、買い物袋を持つた。

米屋の戻る前に、おもちゃ屋に寄る。

お年玉用のぽち袋を選ぶ。

「お父さん、これがいい！」

浩人が選んだぽち袋は、今日、帰つてから見る予定のアニメのキャラクターのものだつた。

「OK！ 恭子はどれがいいだろうか…」

悩んだあげく、キャラクターものではなく、お札を折らずに入れられる梅の花を「デザイン」したものに決めた。

「ねえ、お父さん、今何時？」

孝幸は腕時計に目をやつた。

「2時40分だ。」

浩人が見たいアニメの特番は4時からだ。

まだ充分時間がある。

孝幸と浩人の買い物は、米屋でお飾り用の餅と切つて貰つた餅を受け取つて、フルーツパーカーの隣のそば屋に年越し用のそばを予約するだけだつた。

恭子と先は、商店街の一一番奥まで歩きながら、野菜や肉などの値

段をチェックしていった。

八百屋や肉屋、魚屋はこの商店街の中だけでも何件がある。品物によっては、店を変えて買った方が安い場合があるので、いつもそうしている。

まず、商店街の奥の八百屋で、青菜系の野菜を買つた。それから肉屋で、鶏肉を買い、一件目の八百屋では漬物用の白菜や煮物に使う材料を調達した。

魚屋では刺身を数種類購入し、酢蛸や切り身は、また違う魚屋で買つた。

そんな感じで、恭子と早紀は商店街を3往復位してから予定の買い物を終えた。

二人で両手にいっぴいの買い物袋をぶら下げて、待ち合わせ場所のフルーツパークに到着すると、浩人がにっこりと一人を迎えてくれた。

「今日は早かつたね。」

店の壁に掛けられている時計を見ると3時25分だった。

孝幸と浩人は既に、パフェを食べ終わっていた。

「浩人が早く帰りたいみたいだから、荷物持つて先に帰るよ。お前たちはゆっくりしてくるといい。」

孝幸がそう言うと、浩人はそわそわして、恭子たちが買ってきた買い物袋を担ぎ始めた。

先是、そんな浩人の姿を見てクスッと笑い、頷いた。

「おそばはもう頼んだの？」

「いや、まだだ。」

「じゃあ、それは私頼んでおくわ。」

早紀はそう言って、既に店の出口に向かっている浩人を見た。

「浩人、大丈夫？重かつたら少し置いて行きなさい。」

「大丈夫！」

浩人は振り返らずにそう答えると、店のドアを開けて外にでていった。

た。

「じゃあな！」

孝幸は一人に手を振つて、浩人の後を追つた。

「おい、お父さんがもう少し持つてやるよ。」

「いいよ。」

一瞬、店の外からそんなやり取りが聞こえてきたが、すぐに静かになつた。

二人は、顔を見合させてクスッと笑つた。

ウェイターが水の入つたグラスを持つて注文を取りに来たので、恭子はメニューを広げた。

「う~ん…」

12月30日。

この日は朝から大掃除に取りかかつた。

孝幸は照明器具やエアコンの上など、高い場所と窓や網戸などの危険を伴う場所を担当した。

早紀は台所を中心には水回りを担当する。

恭子と浩人は自分たちに部屋と、浩人が風呂場、恭子は玄関廻り。それぞれの分担が終わると、居間をみんなで掃除してからお供えのお餅を飾つて廻つた。

最後に、玄関にしめ飾りをかけて、大掃除が終了した。

12月31日。

朝、台所に立つてるのは父親の孝幸だつた。

年越しそば用のだしを取つていてる。

昆布、煮干し、鰹節、それぞれ別の容器でだしを取つていてる。

水につけて、夕方まで、じっくりだしを取るのだ。

夕方になると3種類のだしを合わせながら味付けをしていくのだ。

孝幸が買つてくる昆布は、羅臼昆布なので、昆布自体からかなりい味がである。

孝幸は二が日に食べる雑煮の分も見込んで、大鍋一杯のだしを創つた。

ついでに、この日の食事は、朝・昼・晩と孝幸が作る。

早紀は、昨日の疲れがでたのか、朝から微熱があり、ゆっくり過ごすこととした。

起きていられないほどではなかつたが、孝幸が食事の支度をしてくれるというので、疲れを癒すことに専念することとした。

浩人は、午前中、ジュニアスターーズの練習納めに参加していた。

恭子は陸上部の練習がなかつたので、浩人の練習納めに一緒について行つた。

朝から、いい天氣で、日なたにでていると、ぽかぽか気持ちがいい陽気だつた。

第三小の校庭には、クラブのメンバーのほとんどが既に来ていた、準備運動をしていた。

恭子は監督の寺西のそばに行くと、軽く会釈をして、横に立つた。

「おはようございます。いいお天氣で良かつたですね。」

「おお、おはよう！ 陸上部の練習はもう終わりなのかい？」

「はい、冬休みの間の練習は休みなんです。」

「そうか、まあ、たまにはゆっくりしないと、体が持たないからな。」

「いえ、いえ、そんなことはないんですけど、コーチが帰京しているもので。」

「へえ～っ、野村先生の田舎つてどこなの？」

「たしか、九州の方だつて言つてましたけど。」

「そうか、じゃあ、辛子明太子だなあ。」

「何が辛子明太子ですか？」

後から悠斗が急に声をかけたので、寺西は一瞬、ビクッと体をふるわせて振り向いた。

「いや、その…野村先生の田舎が九州だつて言つから…」

「九州は九州だけど、辛子明太子は福岡でしょうか？野村先生は鹿児島県ですかから明太子はないと思いますよ。」

「そ、そうか…」

悠斗は、チラツと恭子を見てウインクした。

「拓が帰ってきたから、練習が終わった後会うんだ。一緒に来るかい？」

「いいんですか？おじやおしても？」

「ああ、その方がきっと楽しいから。そういう、『美ちゃん』も呼んだらどう？」「

「そうですね。じゃあ、そうします。」

「うん！今日は、ずっと練習見ていくのかい？」

「ええ、そのつもりです。」

「じゃあ、練習の後、一緒に食事会にも顔を出すかい？」

「ええ、一度家に帰ります。」

「そうか、じゃあ、適当にやつて。」

「はい、ありがとうございます。」

子供たちの方へ走つていく悠斗を眺めながら、恭子は携帯電話を取り出した。

メールが1件入っていた。

（今夜、初詣に行かないかい？）

恭子はすぐに返信した。

（午後、悠斗先輩と会うんでしょう？『美ど』一緒にさせていただくことになりましたが大丈夫ですか？）
すると、今度は電話の着信音がなった。

拓からだった。

「恭子ちゃん？悪い。メールつてどうも面倒くねー。それより今、第三小に来てるのかい？」

「はい、弟の練習納めなんで見物に来てます。」

「やうか、じゃあ、俺も今からそいつに行くよ。」

そう言うと拓は電話を切った。

子供たちがいなくなつた三浦家では、久しぶりに夫婦水入らずでくつろいでいた。

早紀は、だいぶ具合が良くなつてきたようで、自分で紅茶を入れて居間に入ってきた。

孝幸はソファをずれて早紀が座れる場所を開けてやつた。
「具合はどうだ？」

そう言つて孝幸は、早紀の額に手を当てて、熱が下がつたかどうか確かめた。

「うん！ もう、熱はなさそうだな。だけど、油断は禁物だ。今日は夕方までゆつくりしているといい。なんと言つても、君がダウンしてしまつたら、おせちをこしらえる人がいなくなつてしまつからな。

「まあ、恭子がいるわ。」

「ああ、でも、まだまださ。」

三浦家では、毎年、大晦日の夜、母親の早紀がおせち料理の支度をする。

恭子も中学生になつてから、早紀を手伝つよつになつた。
とはいへ、まだまだお手伝いレベルだ。

“ばれいしょ”では昨日30日で年内の営業を終えているが、マスターと女将はこの日も忙しそうに料理の下拵えをしている。板前の徳次郎は、今日から休みを取つて帰京しているので、普段は調理をしない女将も一緒にやつている。

大晦日の夜は、常連客だけを集めてカウントダウンパーティーをするのが恒例となつてゐるからだ。

「おい、今日は悠斗と拓も来るんだよな？」

「来ると言つても、ちょっと顔を出す程度だよ。それに、まだ二人は未成年だからね。」

「分かつてゐるよ。だから聞いたんだよ。一人が来るなら仁美もパー

ティーに」でるだろ？ そしたら、三浦ん家の嬢ちやんも来るだろ？

「まあ、さうだねえ。少なくとも、仁美は顔を出すと言つていたわよ。」

「そしたら、子供たちが食えるもんも何か用意しなきゃならないだろ？？」

「そんなに気にすることないよ。子供と言つたって、赤ん坊じやないんだから、そこそこのもんは食べられるんだからーそれに、もう徳さんを休ませてるんだから、手が廻らないよ。」

「そうか？ それならいいんだが…」

仁美の父親であるマスターは、一人娘の仁美が可愛くてしかないで、俗に言つ、『親ばか』に輪をかけたよつに仁美のことになると張り切つてしまつ。

当の仁美も、どちらかといえば、父親つ子で、そのことに對してまんざらではない様子なので、さらには増長しているのだ。

母親の女将は、ある程度、放任主義なので、父親の親ばかぶりには、『やれやれ』とこつよつに、半ば諦めてゐる。

そんな二人を後目に、仁美が調理場に顔を出した。

「あれつ？ お母さん、料理してる。珍しいね。」

「何言うんだい？ これでも昔はちやんと食事の支度だつてやつてたんだからね！」

野々村家では、『ばれいしょ』を始めたときに、雇つた住み込みの板前、吉田徳次郎が三食の食事の支度をするようになつたので、女将の久仁子はそれ以来、料理をすることが少なくなつたのだ。

「まあ、そんなことはどうでもいいや。ちよつと出掛けてくる。お昼ご飯はどうなるか分からないから、後で電話するね。」

「ああ、分かつたよ。氣を付けてお行きよ。」

仁美は、母親の久仁子にウインクすると、奥にいる父親の勝晴に手を振つて、出ていった。

「美が三小に来ると、朝礼台の上に並んで座つてゐる恭子と拓の姿があつた。

「まったく、あの二人ほどお似合いのカップルは、この辺ではお目にかかるないわね！」

そう呟きながら「美は一人に近づいた。

電話を切つてから拓は、ウインドブレーカーを手に取ると、外へ跳びだし、走りながら羽織つた。

拓の家は第五小学校の学区域になるので、第三小学校までは普通に歩いて20分ほどかかった。

しかし、拓はジョギング程度のペースで走り、10分とかからずにして第三小のグラウンドに到着した。

グラウンドに着いた拓は辺りを見回すと、すぐに、朝礼台の上に座つている恭子を見つけた。

白いウインドブレーカーを羽織つて、お馴染みの阪神タイガースの野球帽を被つている。

「やあ、相変わらずだね。」

拓は、朝礼台の前に回り込み、恭子が被つていた野球帽を手に取つた。

「先輩！」

恭子はちょっと驚いたが、すぐに帽子を取り返し、言い返した。

「先輩こそ、相変わらずですね。電話を切つてから、まだ10分も経つていませんよ。それなのに、息も乱さずにいられるなんてさすがオリンピック代表ですね。」

拓は、朝礼台に登つて、恭子の隣に座つた。

「オリンピックか……まだ、代表になつたわけじゃないけど、もし、行けたら一緒に来てくれるか？」

恭子はその言葉を聞いて、少しどキッとしたが、素直な気持ちを正直に伝えた。

「うん！というか、絶対に連れて行ってくださいね。出来れば、次

の北京へ！」

拓は、正面を向いたまま、少し考えていたが、恭子の顔を覗き込むようにして、右手の小指を差し出した。

恭子も、同じように小指を出して拓の小指に絡ませた。

「指切げんまん嘘ついたら針千本飲～ます。指切つた。」

ちょうどそのとき、近づいてくる誰かの気配に気が付いた。振り向くと、仁美が腕組みをして仁王立ちしていた。

朝9時から始まつたジュニアスターズの練習納めは、一時間の通常メニューを終えると、グランドの整備に取り掛かつた。悠斗は楽しそうに談笑している朝礼台の三人がずっと気になつていた。

普通なら、あつといつ間に終わつてしまつ練習が、今日はやけに長く感じられた。

グランド整備が終わつて、ようやく監督の寺西が子供達に集合するよつに号令を掛けた。

寺西は、休みの間の注意事項を話した後、解散の挨拶を悠斗に依頼した。

「… おいー悠斗！」

早く拓たちと合流したかった悠斗は寺西の話が耳に入つていなかつた。

寺西に大声を出されて我に返ると、子供たちがクスクス笑つっていた。

「う・うん… エーと…」

悠斗はチラッと寺西の顔を見た。

おおかたの事情を察知していた寺西は、悠斗を睨み付けて、ポンと軽く頭を叩いた。

「最後の締めをやれ！」

「あ！ はい。」

最近は一年中休みなしで営業している店が増えてきた。

おかげで、大晦日のこの時期でも、時間をつぶすのに不自由しない。駅前のショッピングモールでは、今年最後の大売り出しと銘打った商戦が繰り広げられている。

明日になれば、初売りと銘打つて今年最初の商戦が繰り広げられるのだ。

恭子たちは、ショッピングモールの中にある、ファミリーレストランに来ていた。

ここで、ジュニアスターーズの食事会が開催されていたからだ。恭子も、結局、家には戻らず、ジュニアスターーズの食事会に參加した。

会費は、拓が仁美の分も合わせて3人分出した。

ちょうど、昼時で込み合っていたが、ジュニアスターーズは店の半分を貸し切っていた。

食事のメニューは決められていたため、好きなものを選ぶことは出来なかつたが、恭子と仁美は大好きなハンバーガーとオニオンリングフライが出たので、大喜びだった。

食事会が終了した後も、4人はそこに居残つて、お茶を楽しみながら雑談に花を咲かせた。

「そう言えば、今夜は仁美ちゃん家でカウントダウンパーティー やるんだろう？」

悠斗が切り出すと、仁美が悠斗と拓に参加することを確認した。

「そう、そう！一人とも来るんでしょう？」

「ああ、ちょっと顔を出すくらいだけね。」

拓がそう答えると、仁美は恭子も誘つてみた。

「ねえ、恭子もおいでよ。」

「うーん… うちはお父さんがおそばを作るから、無理かもね。」

「えつ？ だつて、お店のリストに恭子くん家のお父さんの名前もつてたよ。」

「じゃあ、お父さんはおそばを食べてから行くのね。」

「それなら、お父さんと一緒に来ればいいじゃない。」「でも…遅くなっちゃう…」

「その、おそばって何時頃食べるの?」

「10時頃だと想つけど。」

恭子は、拓に初詣へ行こうと誘われていたので、遅い時間まで父親と一緒に居たくなかったのだ。

恭子が困っているようだったので、拓が助け舟を出した。

「じゃあ、こうしたらどうだい? パーティーは7時からだろ? 7だったら、逆に、早い時間に来て、おそばを食べる頃に家に帰ればいいんじゃないかな?」

「そうだ! それがいい!」

拓の提案に仁美と悠斗が賛成した。

「ねえ、それならいいでしょ。」

仁美が強引に誘うので、半ば、押し切られるような形で恭子は承諾した。

家に帰ると父親の孝之が夕食の支度をしていた。

三浦家では、毎年、大晦日には夜に年越しそばを食べるので、少し早い時間に軽めの夕食を見る。

5時過ぎには、食事を終えたので、恭子は仁美との約束のことを両親に話した。

孝之も先も、拓や悠斗が一緒なら安心だと、承諾してくれた。

恭子は食事の後、風呂に入つて“ばれいしょ”へ出かけた。

店についたのは7時半過ぎだった。

既に、店内は盛り上がっていた。

1階の奥のテーブル席で仁美が手を振つて合図をしている。

この席のテーブルには鉄板が備え付けられている。

マスターは、結局、仁美たちのために、もんじや焼きが出来るように特別メニューを用意してくれたのだ。

パーティーは、「町会の青少年部部長で孝之の上司でもある高橋が仕切っていた。

拓と悠斗は、ちょくちょく知り合いに勺をしたり、してなかなかテーブルに落ち着けなかつた。

メンバーは入れ替わり立ち代り常に店の中は満員に近かつた。拓と悠斗が一通り勺をし終えた頃を見計らつて、マスターがいつもの一階の座敷を用意してくれた。

4人は速やかにそつちへ移動した。

すかさず、女将が上がってきて、冷蔵庫の鍵を置いていった。

「今日は、勝つてに好きなもの飲んでおくれ。食べたいものがあるなら、とうちゃんに言いな。」

やつと静かになつた。

拓は、両手を高く上げて伸びをした。

「いや～あ、やっぱ、地元は良いなあ！」

「さすがに地元のヒーローは違うわね。」

仁美が、感心して拓にウーロン茶を注いだ。

「まあ、陸上競技なんて、マイナーなスポーツだから、地元でもない限り、変装もせずに居られるのはあらがたいけどね。」

そんな話で盛り上がりしているところで、恭子の携帯がなつた。

「もしもし…うん、分かった。」

電話を切ると恭子はそろそろ帰ると告げた。

「おそばの時間？」

仁美が聞く。

「そう。」

恭子はそう言つて席を立つた。

すると、拓も席を立ちこう言つた。

「送つていいくよ。」

「でも、せつかく集まつたのに、みんなに悪いわ。」

恭子が遠慮してそう言つと、仁美と悠斗が声を揃えて、こう答えた。

「私たち（俺たち）のことは気にしなくてもいいよ。」

「

それを聞いた恭子は、一瞬あよとんとしたが、拓がウインクしながらいり言つたのでジョントモ。

「やつこつことだから、一人つきついしてやるわせ。」

そして、拓と恭子は、裏口からそのまま店を出て行つた。

11つの決意

12・11つの決意

恭子を送つてきた拓は、恭子の両親と一緒にそばを食べていかなければ引き止められた。

拓はそういう事態を予測していたので、素直に従つた。

恭子は拓を居間へ案内すると、ソファを指して座るよう指示した。ソファには先客がいて、テレビゲームをしていた。

「やあ、こんにちは。優子ちゃんに浩くん。」

声がした方を振り向いた優子は、拓を見て驚き、ゲームのコントローラーを手放した。

浩人はすかさず、優子が動かしていたキャラクターをやつつけた。「ちょっと、浩人！」

「よそ見するほうが悪いんだ。拓さんこんにちは。」

そう言って拓に手を振り、ゲームの電源切つた。

テレビの画面が紅白歌合戦に変わつた。

恭子は台所で孝幸が年越しそばを作るのを見ていた。

「お父さんって、じうじうの、すじく凝るよね。普通につゆのもととか使えばいいのに。」

「お父さんだつて、楽はしたいけど、このそばだけは特別なんだ…。」

・

孝幸はそばの具に使つかまほこを切ながら話し始めた。

孝幸は今の会社に就職したばかりの頃、工事現場で人夫に混じつて土方まがいの力仕事をさせられることも少なくなかつた。

そんな頃、現場の先輩に連れて行つてもらつた新宿のパブで偶然、前の席に座つていたショートカットの女の子を見て一目惚れしてしまつた。

彼女は大学の友達と一人で来ていた。

一緒に来たお調子者の先輩は抜け目なく彼女たちに話し掛けた。

先輩の目当ては彼女の隣にいた髪の長い女の子だつたらしく、しつこく電話番号を聞き出そうとしていた。

しかし、その子は孝幸のことが気になるようで、二人の電話番号を教えてくれるならOKだと申し出た。

孝幸が住んでいたアパートには電話がなかつたので、孝幸はアパートの住所を教えた。

先輩は積極的に彼女にアプローチして何度かデートを重ね、付き合つようになつた。

孝幸は、もう一人の女の子の電話番号を教えてもらつべきだつたと後悔していた。

しばらくたつてから孝幸宛に1通の手紙が届いた。
差出人は“沢村早紀”。

部屋に戻つた孝幸は聞き覚えのない名前になにかのセールスかと疑いながらも、女性からの手紙は気になつたので、すぐに封を開いて手紙を読み始めた。

それはセールスでも不幸の手紙でもなく、純粹なラブレターだつた。『三浦孝幸様、私のことを覚えていらっしゃるでしょうか・・先日友達と二人で新宿のパブでお会いしました。今、そのとき一緒だったあなたの先輩と私の友達がお付き合いをしています。私はあのとき以来あなたのことが気になつて仕方なかつたのですが、友達もあなたのこと気が入つていたようなので言い出せなかつたし、連絡をする術も知りませんでした。ところが幸運なことに、私の友達はあなたの先輩とお付き合いをするようになつてあなたへの関心がな

くなつたようです。あつ、すいません。もしかして、あなたが彼女のことを想つていたとしたら申し訳ありません。でも勘違いしないでください。私は決してあなたを中傷しようと思つてこの手紙を書いたわけではありません。実は、あの時初めてお会いしたときからあなたのことが気になつて仕方ありませんでした。勇気を出して友達にあなたの住所を教えてもらい、この手紙を書きました。もし、よろしければ一度会つていただけないでしょうか・・・」

孝幸は、天にも昇る気分になつた。

手紙を握り締めて、近くの電話ボックスに走ると、手紙に書かれていた番号をダイヤルした。

受話器の向こうから聞こえてきたのは聞き覚えのある澄んだ声だった。

こうして一人が付き合つようになつて初めての大晦日を迎えた。二人とも地方出身で、早紀は親戚の家に下宿していたが孝幸は一人暮らしだったため、いつも自炊をしていた。

その日、早紀は孝之のアパートで過ごすことになつていたのだが、貧乏暮らしの孝幸の部屋には早紀を喜ばせるようなものは何一つなかつた。

しかし、早紀はそんなことをまったく気にしていなかつた。

朝から一人で部屋の大掃除をし、昼はありあわせの材料で早紀が作った料理を一人で食べた。

大掃除が終わつた後、孝幸は年越しそばのだしを取り始めた。

「へー！いつも、そうやってだしを取るの？」

「ああ、年越しそばだけは、いつもお袋がこうやつて作つてくれたんだ。自分でやるのは初めてだからうまく出来るか分からなければ、付き合つてみる勇氣ある？」

「ええ、もちろん！楽しみだわ。」

夕食になると近くの居酒屋で軽く食べながら酒を飲んだ。

九時になると一人は部屋に戻つて紅白歌合戦を見た。

孝幸は白組を、早紀は赤組を応援しながら、他愛のない、しかし、二人にとつてはかけがえのない時間を過ごした。

孝幸は赤組の歌手が歌っている合間に年越しそばの支度をした。歌合戦は赤組の勝利で幕を閉じ、孝幸は心から悔しがった。

そんな孝幸が可笑しくて先はクスッと笑った。

「さて、君の勇気が本物かどうか試す時が来たよ。」

そう言って、孝幸は立ち上がり、台所でそばを用意してきた。かまぼこと天カスだけが入ったそばは、シンプルではあったが、羅臼昆布のいい香りがしていた。

早紀は両手でどんぶりを抱えると、つゆを一口すすった。

「おいしい！こんなに美味しいおつゆ初めて！」

「本当？」

二人は一言も喋らずにそばを食べた。

テレビの画面には増上寺の除夜の鐘が鳴らされている映像が流れていた。

その夜、孝幸は、初めて“この人とあつたかい家庭を築きたい”そう想つた。

恭子は、孝幸の話を聞いてなぜか感動した。

そういうえば、両親が付き合つようになつたきっかけなど、聞いた事がなかつたし、聞きたいとも思つていなかつたから意外な事実に心を打たれた。

「へ～！そんなことがあつたんだ。だから年越しそばだけはお父さんが作るのね。」

孝幸は、ウインクして恭子に微笑んだ。

「さあ、できだぞ！みんなのところへ運んでくれよ。」

恭子が年越しそばを運んでくると、優子と浩人はゲーム機を片付け、テーブルを開けた。

普段の食事は食堂で取るのだが、この年越しそばだけはテレビのある居間で紅白歌合戦を見ながら食べるのが三浦家の慣わしなのだ。

「へ～！美味そうだなあ。」

拓は、初めてみる三浦家の年越しそばを手に取ると、立ち上る湯気を顔で受けながらつゆの香りを嗅いだ。

そんな拓に向かって浩人が叫んだ。

「拓さん、お父さんのおそばは長寿庵のそばより美味しいんだからね！」

「うん、この香りはすゞぐ食欲をそそるね。」

最後に自分のそばを持つてきてソファに座った孝幸は、全員にそばが行き届いているのを確認して、箸を持つて手を合わせ感謝の言葉を唱えた。

「それでは、今年も家族全員無事に過ごすことが出来た幸せに感謝し、来年も一年間無事に暮らしていくように祈っていただきます。」

そして、孝幸に続いて家族も全員一斉に「いただきます。」そう唱えてそばを食べ始めた。

拓の父親は出張で家を空けることが多かつたので、家族揃つて食事をすることがあまりなかつたので、三浦家のこんな風景がなんだかとても暖かく感じた。

そんなことを思つていると、浩人が早速問い合わせてきた。

「ねつ！美味しいでしょ？」

拓はどんぶりを抱えると、つゆを一口すすつた。

「うん！これは美味しい。この関西風の味付けはこの辺ではあまりお目にかかりませんよね。」

それを聞いた孝幸は嬉しそうに微笑んで早紀の方を見た。

早紀も満足そうに笑みを浮かべて頷いている。

そんな中、優子がボソッと拓に話しかけた。

「ねえ、拓さん？拓さんはお姉ちゃんと結婚するの？」

突然の優子の質問に、拓より先に恭子が反応し、危うくそばを喉に

つかえそうになつた。

「優子、いきなり何てこと聞くの？」

恭子は慌てて、話題を変えようとして優子を戒めるように見えた。そんな一人をよそに拓は、にっこり笑いながら、こう答えた。

「そうだね、こんな綺麗なお嬢さんがお嫁さんに来てくれたらどんな男の人だつて嬉しいだろうね。」

拓の予想外の答えに、周りの全員が一瞬動きを止めて拓のほうを見た。

当の拓は、まるで、何もなかつたかのようにそばをすすり始めた。そして、みんなの視線に気がつくと、他人事のように言った。

「あれつ？どうしたんですか？まだ食べちゃいけなかつたですか？」すると、孝幸は田に涙を潤ませて、拓に向かつてこう言つた。

「西崎君、よく言つてくれた！」これで俺も安心して成仏できんよ。いや、その前にちゃんと恭子の花嫁姿を見ないとな・・・」

孝幸のその言葉を聞いて、拓は孝幸が勘違いしているのだと思つて言葉を付け加えようとしたが、もはや後の祭りだった。

優子が、自分の花嫁姿は見てくれないのかと孝幸にくつてかかつたのだ。

孝幸は慌ててそんなことはないと弁解したが、優子の機嫌は直りそうになかった。

見かねた早紀は、孝幸を睨みつけ、優子の肩をやさしく抱いて慰めた。

「大丈夫。お父さんはあなた達みんなが幸せになつてくれることう何よりもいちばんに願つているのよ。だから、ちゃんと優子の花嫁姿だつて見てくれるわ。」

孝幸はバツの悪そうな顔をしながらも、頷いて優子に謝つた。

恭子は、自分の話題が思わぬ方向へ変わつてしまつたことにホツとした。

そばを食べ終わると、恭子は両親に拓と初詣に行きたいと話して

みた。

「ねえ？お父さん、お母さん、今年は拓さんと初詣に行つてもいい？」

「ああ、いいとも。紅白が終わつたらみんなで出かけよう。」

孝幸は即答した。

しかし、恭子は拓と二人だけで出かけたいと言いたかったのだが、孝幸には伝わらなかつた。

「えつと・・・そつじゃなくて・・・」

早紀は恭子の気持ちが分かつていた。

「お父さん、一人で先に行かせたあげたりどうかしら？紅白が終わるこりだと神社も混んでくるわ。」

早紀にそう言わると孝幸は驚いて早紀と恭子を見た。

恭子は、恥ずかしそうにモジモジしていたが、早紀は微笑んでさらには言葉を続けた。

「恭子も、もう子供じゃないんだし、西崎さんが一緒に安心だわ。」

孝幸は怪訝な表情を浮かべながらも、渋々承諾した。

「西崎君、それじゃあ頼んだよ。」

「分りました。お任せ下さい。参拝が終わつたら向こうで待ちしてますから向こうで一緒に甘酒でも飲みましょう。」

そう言って、コートを手に取ると立ち上がり、孝幸に頭を下げるとい既に恭子はスタジアムジャンパーを羽織り、マフラーを首に巻きつけ、タイガースの野球帽を手にしていた。

「拓さん、早く。」

そう言つて、拓を手招きした。

部屋を出る時、拓はもう一度孝幸に頭を下げた。

孝幸はテレビの画面に田を向けたまま片手をあげて応えた。

恭子は見送りに玄関まで出てきた早紀にウインクして両手を合わせた。

「お母さん、ありがとう。恩に着るわ。」

早紀は恭子のほっぺたに手を当てて「寒いからね。」と言だけ言った。

そして、改めて拓に恭子のことをお願いした。

外に出ると、さつきより気温が下がっているように感じた。
日当たりのよくない路地には、クリスマスイブの日に降った雪がまだ残っている。

恭子は手を合わせてこすりながら拓の方を見た。

「手袋忘れちゃった。拓さんのポケット借りてもいい?」
すると、拓は自分の左手がつっ込まれたコートのポケットにすき間をつくってくれた。

恭子はそのわずかなすき間に自分の右手を滑り込ませた。

「あつたかい!」

恭子はポケットの中で拓の手を握り締めた。

拓はもう片方のポケットから手袋を取り出ると、片方を恭子にわたした。

「そっちの手に付けるといい。」

そう言って、拓は残った方を口にくわえて、右手を差し込んだ。

恭子も同じように手袋を口にくわえると、余った左手を手袋に突っ込んだ。

拓の手袋は言つまでもなく大きかった。

恭子は余った指先の部分をふらふらさせながら笑つた。

「大きな手袋・・・でもあつたかい。」

「そりやそりやー・すつとポケットの中であつたためていたんだから。」

神社の近くまで来ると、松明の火やちょうどちんに照らされた灯りがほんのりと見えてきた。

初詣に来た人の列が既に鳥居の外から神社の廻りを一周していた。

恭子と拓は鳥居の前を通り過ぎると、列の最後尾へ向かつて歩いた。途中で一人を知る町会の面々に合うと、「よつ！未来のオリンピック選手」とか「お似合いだよ！」などとからかわれた。

本来ならひさしひさつたいはずの言葉が、なぜかこの時は心地よかつた。

列の最後尾が近付いてきたとき、悠斗と仁美が手を振っているのが見えた。

「恭子遅いわよ。」

悠斗と仁美は一人で一本のマフラーを首に巻きつけていた。

仁美は背が高いので悠斗とのバランスもちょうどいい。

「こうして見ると、二人は恋人同士みたいだわ。」

「あら、あなた達こそお似合いよ。」

恭子は今まで散々からかわれてきたが、仁美にこんな風に改めて言われると、急に恥ずかしくなってきた。

「よう！大将。三浦家の年越しそばはどうだった？」

「抜群だった。」

「そうか、じゃあ、来年は俺も食いに行きたいもんだなあ。」

「先輩、ダメですよ。そばならウチで食べて下さい。」

そう言って仁美が悠斗の腕をつねつた。

「痛いなあ！分かつたからもうやめてくれよ。」

そうこうしているうちに、境内の方からカウントダウンの声が聞こえてきた。

4人も、時計を見ながらカウントダウンを始めた。

「10・9・8・・・・3・2・1！」

「明けましておめでとうございます。」

4人をはじめ、そこらじゅうでおめでとうの声が聞こえてきた。それと同時に、列も少しずつ動き始めた。

恭子達の後には、もう最後尾がこちら邊にあるのか分からぬいくら

いの列が続いていた。

列が進み始めて20分ほどしてから、孝幸達がやつてきた。

“ばれいしょ”のマスターと女将、高橋も一緒だ。

優子と浩人が4の方へ走り寄ってきて列に加わろうとした。

すると、孝幸が「ちゃんと並ばないとダメだぞ。」と怒鳴った。

しかし、後ろに並んでいる人たちは、「いいから入れてやれ。」と気を使つてくれた。

「すみません、どうもありがとうございます。」

孝幸も一緒に加わろうとすると、「大人はダメだよ。後ろに並びな」と言われ、すごす」と早紀や高橋達と一緒に列の後ろへ歩いていった。

「あなたつたら本当に大人げないんだから・・・」

「まったくだ！何のために一人を先に行かせたのか分かつてないようだな。」

恭子が振り返ると、孝幸が早紀や高橋にたしなめられている声が聞こえた来た。

列が動き始めて40分。

ようやく恭子達に参拝の順番が回ってきた。

参拝は4人まで並んで出来る。

恭子達は優子と浩人を自分達ん前に置いてその後ろに4ん並んで参拝した。

浩人はさい銭を投げ入れると、パツと手を合わせて、すぐに鈴のひもをつかんだ。

ガラガラ、ガラガラ・・・4回鐘を鳴らすと、先に一人で小走りに階段を降りていった。

恭子は手を合わせて、全国大会への出場を誓つた。

参拝を終えて拓の方を見ると、拓はまだ目を閉じて手を寄せたままだた。

しばらく見ていたが、後が詰まっていたので「美たちと一緒に先に降りた。

階段を降りると、既に社務所の前では、破魔矢を手にした浩人が手招きしている。

「今年は、ボクが選ぶ番だからね。」

浩人はそう言って優子をけん制した。

破魔矢は矢の色が赤と白の一種類ある。

浩人は赤、優子は白がいいと言つて毎年ケンカになる。

そこで何年か前からは、交代で選ぶことにしているのだ。

そして今年は浩人が選ぶ番だった。

恭子は財布を出そとジーンズの尻ポケットに手を突っ込んだ瞬間、冷や汗が出てきた。

財布がない！

「浩人、ちょっと待つて……」

そう言つて、今歩いて来た道を引き返そうとした。

「お姉ちゃんどうしたの？早くお金ちょうどだい。」

「ごめん、浩人、お姉ちゃん、お財布落としたみたい。」

「なんだつて？そりゃ大変だ！」

悠斗は、とりあえず、浩人の破魔矢の代金は自分が払つておくからと言い、仁美と、優子と一緒に探すよう指示した。

拓は例の夢のことを考えながら、自分の決意を確かめていた。

そして、近い将来起じうることに対しても最善を尽くすと固く誓つた。

目を開けて、歩き出そとしたとき、財布が落ちているのに気がついた。

見覚えのある財布だった。

「これは……」

財布を拾うと、辺りを見回した。

恭子達の姿はすでになかった。

急いで階段を降りようとしたとき、辺りを伺つよつキヨロキヨロしながら戻つてくる恭子達の姿が見えた。

「恭子ちゃん！」

拓は手を振つて恭子に合図すると、財布を掲げて見せた。

そして、恭子のもとへ降りていった。

社務所のそばには二ヶ所の長椅子が並べられていて、甘酒が振る舞われている。

先に参拝を終えた恭子達は長椅子に座つて甘酒を飲みながら孝幸達が来るのを待つた。

優子と浩人は、さつき引いたばかりのおみくじをそばの木の枝に結んでいる。

「いいなあ、あ姉ちゃんは大吉で。」

「田じろの行いがいいからよ。あんただつて中吉なんだからいいじゃない。」

「でも、お正月のおみくじは大吉じゃなきや。僕、一回も大吉当たつたことがないよ。」

そんな二人をよそに、恭子はじつとおみくじを見つめていた。

“凶”

「知つてるかい？」

拓が恭子のおみくじを覗きこんで言った。

「凶って箱の中に入っているだろ？ 箱にはフタがないから芽が伸びて大きな木になることの暗示なんだつてさ。考えよによつちやあ、大吉よりもずっと縁起がいいもんなんだよ。」

その話を聞いた仁美が自分のおみくじを差し出した。

「本当？ それじゃあ、私つて大ラッキー？」

仁美のおみくじは大凶だった。

「なんだよ、さつきまで落ち込んでいたのに現金なヤツだなあ。」

悠斗がそう言つとみんなは一斉に笑いだした。

恭子も笑つて、甘酒が入った湯のみを両手で持つて、冷たくなった手を温めた。

「やあ、お待たせ。」

ようやく参拝を終えた孝幸達が恭子達に合流した。

「みんな、今年最初の運だめはどうだった？」

高橋が自慢げに自分のおみくじを差し出して見せた。

“大吉”だった。

孝幸は小吉、早紀は中吉、マスターは大凶、女将は大吉だった。

「なんだよ、“ばれいしょ”的親子は揃って大凶かよ。」

高橋が言つと、女将の久仁子もあきれたような顔をして言つた。
「なにも、そんなところまで真似しなくてもいいだろうに・・・」
すると仁美は母親に反論した。

さつき、拓が言つたことをそのまま話して聞かせたのだ。

「へ～！さすが俺の娘だ。なかなか良いことを言つじやないか。」

脇で、恭子達はクスクス笑つてお互いの顔を見合わせた。

恭子達は家族と一緒に帰つて行つた。

それを見送つてから、拓と悠斗は一人で歩いていた。

「なあ、タイショウ、ずいぶん長く拝んでたみたいだが何をお願いしてたんだい？」

悠斗は拓に尋ねた。

「内緒だ。」

「まあ、だいたい察しがつくさ。」

「ああ、そんなところだ。」

そして、二人が見上げた冬の空からは白い雪が舞い降りはじめた。

13・ござ、全国へ！

13・ござ、全国へ！

恭子は年が開けて、正月の3が日ばかりでも出かけず家で過ごした。

4日には学校のグラウンドでランニングをはじめた。

新学期が始まる頃にはいつでも記録を更新できるような気がするほど充実した練習を消化することができた。

そして、あつという間に4月になり、恭子は3年になった。

恭子が廊下に掲示されたクラス分けの結果を見ていると「仁美が後ろから声をかけた。

「また同じだね。神様に感謝しなくちゃ！」

「そうね。仁美と同じクラスで本当によかつたわ。三年間同じクラスでいたのはきっと神様のおかげだね」

「それより、見て！ 担任

「ええ、知ってる！ 野村先生」

「野村先生ったら、恭子にクビつたけって感じだね」

「そうね！ 違う意味で、だけどね」

そんな話で盛り上がりをつけていると、恭子は背後に人の気配を感じて振り向いた。

野村だった。

「それより、もっと凄いニュースがあるぞ。一組のメンバーをよく見てみるよ」

そう言われて恭子は一組のところを順番に見ていった。

「田中・・・高野台の田中美由紀？」

「そうだ。 春休みの間に最近できたマンションに引っ越して來たんだと」

田中美由紀は去年の100m決勝で3位に入った選手だ。

「そう言えば、彼女も2年生だったわね。 原姉妹が抜けたとはいえ、四中は選手層が厚いから彼女が来たのは大きいわ。 これでリレーも期待できるじゃない」

仁美は恭子の手をとつて飛び跳ねた。

ちょうどそこへ田中美由紀が現れた。

「三浦さん、同じチームで走れて光榮だわ」

そう言って田中美由紀は手をさしのべた。

こうして、恭子の中学生生活最後の1年は、学校も万全のサポート体制で、いよいよ全国へ行くための花道が設けられたのだ。

春の中体連陸上大会では、一中から恭子と美由紀が決勝に駒を進めた。

結果は言つまでもなく恭子の圧勝だった。

美由紀が2位に入り、一中がワン・ツーを決めた。

恭子走り幅跳びでも優勝し2冠を達成した。

恭子以外のメンバーが卒業していくくなつた、 100×4 リレーでは第一走者の美由紀が貴録で先頭に立つたが、第二走者の横井直美よこい なおみと第三走者の宮下麻衣子みやした まいこは共に2年生で実力は他の学校のメンバーと比較しても見劣りしたが、懸命に頑張つて、僅差の3番手で恭子にバトンを渡した。

その時点での野村は一中の優勝を確信した。

恭子は麻衣子からバトンを受け取ると、一気に大外を回つて前の二人を抜き去つた。

直線に入ると、その差は広がる一方だった。

「やつたネ！」

表彰台の上で美由紀に握手を求められて恭子は笑顔で答えた。

そして、二人の2年生に労いのことばをかけた。

「あなた達も頑張ったわね」

直美と麻衣子は首にかけられた金メダルを噛むポーズをしてVサインを返した。

「さあ、次は都大会だ。そして全国が待つているぞ」

野村は恭子達の肩に手を廻して涙目でそう言った。

都大会では、手始めに走り幅跳びで5m89を飛び優勝すると、100mでは中学記録の迫る12秒07で優勝し、全国の切符を手にした。

「よしつ！いいぞ！」

応援に駆けつけてきた孝幸と高橋がガツツポーズをとると、横で見ていた早紀は思わず吹き出してしまった。

「課長、夏休みは8月の末にして下さいね」

「当たり前だ！俺も四国に行くぞ」

今年の全日本中学陸上選手権は8月の末に四国の香川で開催されることになっていた。

美由紀も決勝まで進み、3位と健闘したが標準記録の12秒60にはわずかに届かない12秒65で全国行きの切符を逃した。

100×4 リレーは残念ながら準決勝で敗退した。

2年の直美と麻衣子は自分たちが足を引っ張ったと泣き崩れたが恭子と美由紀は一人のおかげで都大会まで来ることができたのだと二人を称えた。

「先輩、来年は私たちだけでも決勝に行けるように一生懸命頑張って練習します」

涙ながらに、恭子達にそう訴える一人を見ていると、自分も、もつと練習し根ければと言う気持ちになった。

「全中選手権は夏休み中だからみんなで応援に行くわね」

美由紀がそう言うと、直美と麻衣子も頷いた。

「仁美先輩に頼んで“ばれいしょ”でアルバイトをさせてもらいま

しょう！それで旅費を貯めなくつちや

そんな二人を野村は睨みつけた。

「なにバカなこと言つてるんだ。中学生がバイトなんかできるわけないだろ？！それに、今、一生懸命練習するといつただろう」「そんな～」

拓は国体に備えての合宿中で応援には行けなかつたが悠斗からのメールで恭子の活躍を喜んだ。

「今年の全中選手権は確か四国の香川だつたな・・・」

9月に開催される国体が兵庫で時行われるため、千葉県代表で参加する拓は他の競技に参加する東洋電機のメンバー達と会場の下見を兼ねて8月末には兵庫に行く予定になつていた。

「・・・どんぴしゃだ！」

野村に全日本陸上選手権の日程を確認してもらつたら、100mの決勝が行われる日に拓は兵庫にいる。

しかも、その日は下見を終えた後の自由行動になつっていたのだ。拓は早速、孝幸と連絡をとり、同じホテルを手配してもらつた。孝幸は快諾し、早紀や夏休み中の子供たち、高橋に“ばれいしょ”的一家、悠斗も同じホテルに泊まることを告げた。

「こりやあ、まるで、町内会の旅行だな」

拓は、苦笑いしながら宿舎の窓を開けて空を眺めた。

ひとりわ輝く星が二つ、そして、その周りには無数の星が集まつているように見えた。

まるで、自分と恭子のように思えた。

夏休みに入ると、野村は東洋電機の陸上部と合同練習を申し入れ、グラウンド近くにある女子寮に恭子と美由紀を止めてもらひ手配を陸上部の池田監督に依頼した。

池田は快く引き受けてくれた。

「いきのいい子が来てくれるトウチの真田にもいい刺激になるつてもんだ」

真田と言つのは、東洋電機陸上部の女子部員で恭子達と同じ短距離の選手である。

男子は拓や篠塚といった全国区のトップランナーを抱えていたが、女子は長距離に有望な選手が多く、短距離ではこの真田綾子さなだあやこがリーダー的存在で、高校生の時に関東大会まで行つて池田にスカウトされた。

実業団に入つてからは伸び悩んでいて池田も頭を悩ませていた。綾子本人も陸上をやめようかと悩んでいるようだつた。

野村の申し入れは、まさに“渡りに船”で、恭子達を指導することで綾子が何かを掴んでくれるのではないかと期待していた。

合同練習を前日に控え、恭子は身の周りの物をバッグに詰め込んでいた。

そんな恭子に孝幸は手提げ袋を差し出し、激励した。

「いよいよ明日だね。しつかり練習してくるんだぞ。香川にはそのまま行くんだろう?」

「そうよ。だからしばらく会えないね」

「みんなで応援に行くからな。それにしても西崎君がいないのは残念だなあ」

「仕方ないわ。拓先輩は国体の会場の下見に行つてるんだもの」

恭子が中身を覗いた後の笑顔を見ると、サインをして出て行つた。

「じゃあな。ちよつと、ばれいしょに行つてくる」

孝幸が差し出した手提げ袋の中には新しいシューズが入つていた。恭子は早速そのシューズを履いてみた。

まるであつらえたように恭子の足にフィットする。

「お父さんつたら夏のボーナスを全部それにつき込んだのよ。西崎

さんの靴を作ってくれている職人さんの所へ恭子がはきつぶした靴を持つて行つてお願いしたらしいわ」

恭子は孝幸がくれたシューーズを抱きしめて心から感謝した。

“ばれいしょ”はこのところ連日の大盛況だった。

話題はもっぱら恭子のことだ。

町内会の連中はもちろん、常連の客は皆恭子のことを小学生の時から知っている。

孝幸が店に着くと、高橋がカウンターの奥から手を挙げて合図した。孝幸は高橋の隣に腰かけると、生ビールを注文した。

「おそいで。主役がないと始まらないじゃないか」「すいません、ちょっと用事があつたもので・・・」

「まあいい、よし！それじゃあ始めるとするか」

青少年部の高橋の呼びかけで恭子の応援ツアーガ企画され、父親である孝幸が団長に任命されたのだ。

ツアーハには町内会の連中をはじめ、“ばれいしょ”的常連客や地元出身の議院、金村雅夫もいた。

「なんだか知らないけど、ずいぶん大袈裟になつちやつたなあ・・・」

「そう思いながら孝幸は、この町に引っ越してきて本当に良かつたと思つた。

兵庫に来ていた拓は千葉県代表の選手団とともに練習場となる近くの高校のグラウンドにいた。

選手団の中には同じ東洋電機陸上部の篠塚や女子マラソンで前回のアテネオリンピックに出場した渡辺弘子らがいた。

弘子は拓の横に来ると拓の腕を掴んで話しかけた。

「三浦さんだつけ？今頃ウチで練習始めた頃ね」

「そうですね」

「私期待してるのよ」

「それはありがと『』じゃこます」

「違うの。彼女のことじやなくて綾子のことよ」

「真田先輩のこと?」

「そうよ。あの子、私の後輩なんだけど、ウチに入つてからパツとしないでしょ?」

「・・・」

「監督が言つてたけど、三浦さんの指導をすることで何か得るものがあるんじやないかって」

「そうですね、ボクも真田先輩は才能があるとずつと思つてましたよ。高校生の時はあこがれたいましたから」

「へへっ! そななんだ。まあ、それはさておき、私みたいなマラソンランナーと違つてスプリンターとしては、あの子も年齢的にそろそろ厳しいと思うのよ。」

「・・・」

「高校生の時から思つてたんだけど、あの子はどちらかっていこうと選手より指導者に向いていると思つの」

「そう言えば確かに。ボクがスランプのとき真田先輩に声を掛けてもらつたことがあるんですけど、それがきっかけで吹つ切れたことがありました」

「だから、今回、三浦さんを教えているつかひたけひ血覚を持つてくれるといになつて期待してるんだ」

東洋電機の女子寮はほとんどの寮生が陸上部に所属している。

恭子と美由紀は2階の一人部屋に案内された。

荷物を置くと早速トレーニングウェアに着替えてグランドに出た。

他の部員たちは日中仕事をしているので、グランドにはまだ誰もない。

一人でストレッチを始め、軽くトラックをランニングした。

綾子は早めに仕事を切り上げると、池田のもとを訪れた。

「よつ！ 真田か」

池田は、東洋電機陸上部の監督をやっているが、東洋電機を定年退職して以来、グランド近くの一戸建てを購入し、夫婦一人で悠々自適の生活を送っていた。

「前にも話したが、今田から中学生が一人一緒に練習に参加する。お前と同じ短距離の選手だから面倒みてやつてくれ。もう寮についているころだから、そろそろグランドに顔を出すだらう。紹介するからついて来てくれ

「わかりました」

綾子は池田とともにグランドへ向かった。

二人がグランドに着くと、既に恭子と美由紀はトラックをランニングしていた。

「おっ！ 早速やつてゐな

綾子がグランドに入るとすると、池田はそれを制止していつ囁つた。

「ちよつとあいつらの走りを見ていいよ」

恭子達は、ランニングをしながら時々、交互にダッシュをし追いかけた時に相手にタッチするといったような練習をしてくる。これは、野村が考えたりレーメンバーの練習方法だった。それを見ていた綾子はあることに気が付いた。

「あのショートカットの子・・・タッチされてからの反応がすげ

早い！」

「ああ、そうだな」

池田は、綾子の田の色が変わったのを感じえ内心『じめた！』と思つた。

「そろそろ行こうか？」

そう言つて池田はグラウンドに入るとトラックの前で一人に声をかけた。

「人が気付かないようだつたので、綾子は一步前に出て大きな声で合図を送つた。

それでも二人は夢中で走り続けている。

コーナーを回つて池田と綾子がいる方に向いた時、始めて気がついたようにこつちへ向かつて走つてきた。

二人は池田と綾子の前まで来ると立ち止まり、「よろしくお願ひします」とお辞儀をした。

池田が「ようこそ」と言つて手を差し伸べると、二人は互いに顔を見合せてから、ハツとしたように耳に手を当てた。

二人は耳から耳栓を外し、改めて挨拶をした。

「耳栓？」

綾子は驚いた。

「耳栓をして走つていたの？」

「はい！リレーの練習のときはバトンを受けてからの反応が大事だと言つて、野村先生が足音や周りの雰囲気をシャットアウトしてバトンを受け取つた感触に集中できるようにって考えた練習方法なんです」

綾子も当然リレーの経験があるから分かるが、バトンの受け渡しが大きく順位に影響するのがリレーだ。

こんなことを思いつく先生も先生だが、それをサラッとやってのける一人に改めて感心した。

それで、あの反応の良さはまさに天性のものだと感じた。

池田は大したものだと感心し、それを聞いた綾子の表情を見て更にニヤツと笑つた。

「どうだ？ 教えがいがあるだろ？」

「ええ、なんだかワクワクしてきました」

全中選手権開会式の3日前、合図練習の最終日に野村が一人を迎えた。

野村は池田のもとを訪ね礼を言った。

池田は笑顔で野村に握手を求めた。

「いや～あ、野村さん、いらっしゃりありがとうございます。おかげでうちの選手たちにもいい刺激になつたようで次の試合が楽しみですよ。三浦さん、いいところまで行けるんじゃないでしょうか。ウチの真田が太鼓判を押しましたから！」

「そうですか。それは心強い。」

野村が寮へ行くと恭子と美由紀は既に荷物をまとめて、真田綾子とともに玄関先で待っていた。

「先生、ありがとうございます。いい勉強になりました」

一人が、そう声を揃えて言つて、野村も満足そうに応えた。

「そうか、じゃあ、行こうか。いや、日本征服へ！」

「日本征服ってなんですか？それじゃあ、まるで悪の秘密結社みたいじゃないですか」

そのやり取りを聞いていた綾子は思わず吹き出してしまった。

「それを言うなら全国制覇でしょう？」

綾子がそう訂正すると、恭子と美由紀もつんと頷いた。

「まあ、そつとも言つな」

野村は、綾子に深々とお辞儀をするとお礼を言った。

「いろいろとお世話になりました」

「どういたしまして。私も色々と勉強になりました。向こうにいたら西崎君によるしき伝えて下さい」

そう言って綾子は3人を見送った。

3人がバスに乗るのを見届けると池田がやつてきて綾子に隣に立つた。

「監督・・・」

綾子の表情が晴れやかに輝いているのを見て池田は満足そうだった。
「監督、わたし今度の試合で引退します。その後は指導者の勉強を
しようと思つんです。あの子たちと一緒にいて気が付いたんですよ。
わたしにはその方が合つてゐる。あの子たちがウチに来る『ひる』
は、きっと、東洋電機を短距離王国にして見せます。」

「どうか、それは残念だが、お前がそう思つのなら仕方ないな。だ
が、次の試合はそれなりの結果を出して、指導者としての箔をつけ
てくれよ」

「はい！任せ殿下。たぶん、監督が、『頼むから現役でいく
れ』と泣きつくかもしませんけど」

「はい！」

池田はやつと、綾子の頭を手を当て髪の毛をくしゃくしゃにして
た。

「もへつー監督ー。」

14・新たなライバル

14・新たなライバル

ここの丸亀陸上競技場はプロサッカーの公式戦も開催されたことのある競技場で、サブグランドが眼と鼻の先にあり試合前の調整を行うには最高の条件だった。

恭子達は宿泊先のホテルに着くと早速練習着に着替え始めた。着替え終わる頃に部屋の襖戸が開いて野村が顔を出した。

「キャー！ ちょっと、野村先生」

すごい剣幕で美由紀は持っていた手鏡を野村に投げつけた。野村はとっさに手を出しが、手鏡は野村の肩に命中し畳の上に落とした。

野村は手鏡を受けた痛みも忘れ、慌てて襖戸を閉めた。

「悪い！」

すぐに着替え終わった美由紀が襖戸を開けて手鏡を回収しに来た。「気をつけて下さいよ。乙女の部屋なんですから。 着替え終わつたからもういいですよ」

野村は部屋に入るとテーブルの前に腰を下ろした。

「先生、大丈夫ですか？」

恭子は手鏡が命中した左肩を示して心配そうに尋ねた。

「ああ、大したことはない。田中も多少は手加減してくれたみたいだしな」

美由紀はバツが悪そうに、お茶を淹れながら目をそらした。

「しかし、着いたばかりだつて言つて、もつ練習を始める気なんか？」

そう言いながら野村は美由紀が淹れたお茶を一口すすつた。

「流しても1・2秒切れるくらいでないと全国では通用しないと思うし、とにかく、東洋電機の合宿の後は体が軽くて、走りたくて走りたくて仕方ないんですよ」

そう訴える恭子と美由紀の田は合宿前に比べると明らかに自信を深めているようだった。

「そういうえば、都大会の後はタイムを計つたことないなあ・・・よしつ！ ジャア、会場の下見を兼ねて軽々競技場までランニングしていくか

「はい！」

二人とも声を揃えて立ち上ると、野村の腕を引っ張つて部屋を出た。

「ちょ、ちょっと待て！ 僕も着替えてくるから先に外で待つろ」

ホテルから競技場までは1km足らずの距離だった。

野村はホテルの従業員が通勤で使つていい自転車を借りて、恭子と美由紀に伴走した。

あつと言つ間に競技場に着くと、そこでは大会の準備も整い、最後の整備があこなわれていた。

三人はサブグランドの方へ行つた見ることにした。

サブグランドに着くと、練習しているどこかの選手たちが次々と引き上げてくるところだった。

野村は事務室で1本タイムを取るだけだと頼み込んでグランドに入れてもらつた。

「もう、閉門時間なんだから早く頼みますよ」

係員は鍵のついた紐をくるくる廻しながらそっけなく言つと、事務室の方へ歩いて行つた。

恭子と美由紀が夕日を見ながら準備運動を始めるとい人の選手が近付いてきた。

「東京の三浦さんでしょ？ これから取るの？」

そう言つて、ストップウォッチを手にしてゴールラインの方へ歩いて行く野村を見た。

「はい。 一本だけ」

「見させてもらつてもいいかしら？」

「どうぞ・・・」

恭子がそう答えると、美由紀が恭子の腕を引っ張り耳打ちした。

「ダメだよ！ あれ、埼玉光陽中の高部知美よ」

高部知美は11秒80の記録を持つていて、今、一番中学記録に近いと言わわれている選手だった。

「どうして？ いいじゃない。 どうせ試合になればわかるんだし」恭子はあっけらかんとして答えると、再び高部知美に向つて微笑んだ。

「どうぞ、じゅっくり」

高部知美は頷いてゴールラインの方へ歩いて行つた。

「おーい！ 準備はいいかーっ」

野村の声に恭子と美由紀は両手を頭の上で合わせて（OK）の合

図をして、先に恭子がスタートラインに着いた。

野村のピストルの音と同時に、恭子は地面を蹴つた。恭子がゴールする瞬間、高部知美的髪が風に舞つた。ストップウォッチを見た野村の表情が緩む。

「どうでした？」

「今ので何パーセントだ？」

「最後流したので80%くらいです」

「どうか！ 見ろ」

野村が差し出したストップウォッチは11・92だった。続いて、美由紀がゴールした。

「なんてこった！」

野村はさらに驚いた。

美由紀のタイムも12秒を切っていたのだ。

それを聞いた美由紀は「まさか！」という顔をして驚いていたが、最後流した恭子と違つて自分は目いっぱいの走りだった。

「やっぱり恭子は凄いわ」

それを聞いていた高部知美は恭子位近づいて来て右手を差し出した。「試合が楽しみになつてきたわ。お互い、頑張りましょうね」

「ええ！」

恭子も高部知美の手を握つて微笑んだ。

そして、美由紀にも握手を求めてきた。

「どうしてあなたが出ていないのか不思議だわ」

「ありがとう。私、大器晚成型なの。高校生になつたら負けないわよ」

美由紀はそう言つて高部知美の手を両手で包みこんだ。

「楽しみだわ。それで、どこへ進学するのかしら？」

「決まつてるでしょ！ 一校よ」

「一校？ 第一高校ね。なるほど、東洋電機の西崎選手の母校ね」

「ええ、拓さんは恭子の・・・」

「美由紀！」

恭子は慌ててみゆきの口を塞いだ。

「あら？ 何か意味ありげね。 そうだわ、私が優勝したら、その件、詳しく教えてね」

そして、高部知美は野村に会釀をすると、グランドを後にした。

「おい、今のは高部知美じゃないのか？」

「そうですよ。雑誌の記事とかでみた時は、もう少し高飛車なイメージがあつたけど、意外といい子ね」

美由紀は自分が褒められたので、高部知美が気に入つたようだ。

ホテルに戻ると、シャワーを浴びて食事をとつた。

「しかし、短期間でよくこれだけタイムを縮められたなあ」

「なに言つてるんですか先生。 そのために東洋電機の合宿に参加させたんでしょう？」

「まあ、そうだが・・・」

実際、野村もある程度は期待はしていたが、思った以上の成果に野村は改めて一人の資質の高さに驚いていた。

恭子はともかく、美由紀がこれだけのタイムを出すようになったのは予想外だった。

本人が言つように“大器晩成”というのもあながち「冗談ではない」と思った。

「とりあえず、やることはやつたんだ。後はレースに備えて無理な練習はするなよ」

孝幸ら応援団は丸亀から少し離れた宇多津のホテルにチェックインした。

丸亀市内にはビジネスホテルが多く、孝幸達のように家族単位で泊まる場合には勝手が良くない。

競技場からは遠いが、高橋がマイクロバスのレンタカーを手配してくれた。

もちろん、運転も高橋が自ら買って出た。

そこは海に近く、瀬戸大橋もよく見える。

恭子の出番がない日は観光するのにも都合が良かつた。

孝幸は、恭子達が宿泊しているホテルに泊まりたかったのだが、早紀は気が散るからやめた方がいいと孝幸を諭した。

孝幸も、メンバーを見渡して、確かにそうだと諦めた。

高橋は借りてきたマイクロバスを入念にチェックしていたが、孝幸が様子を見に行くと、試運転がてらひとつ走りしないかと誘つた。

「大事な命を預かるんだ。しつかりチェックしとかないと」

「そうそう、部長の腕前をまず確認しとかないと」

「ばか、プライベートでは部長と呼ぶなって言つてるだろ?」

そう言つて高橋は運転席に腰かけた。

孝幸は運転席わきのバスガイドが使う補助席を出して、そこに腰かけた。

「ところでどこまで行くんですか？」

「決まってるだろー！」

「やつぱり」

高橋は、一路丸亀へ向かつてバスを出した。

高橋と孝幸は丸亀陸上競技場の場所を確認すると、競技場の付近を一回りして恭子達が止まっているホテルへ向かつた。既に辺りは暗くなっている。

ホテルの駐車場にマイクロバスを止めると、フロントでまず、野村の部屋を訪ねた。

フロント係は、一応、野村に来客が来たことを伝えようと内線電話を手に取った。

受話器の向こう側で野村がすぐにロビーへ降りると答えたようだ。フロント係は1階のロビーで待つように一人を案内した。

間もなく、野村が恭子と美由紀を連れてやってきた。

「おじ様、遠いところわざわざありがとうございます」

恭子はそう言って高橋に抱きついた。

その様子をいぶかしそうに見ている孝幸に美由紀が声をかけた。

「はじめまして。田中美由紀です」

「ああ、恭子の父です。恭子がいつもお世話になつてます」

5人はロビーの一角にある喫茶室に移動した。

「先生、どうですか？ 恭子はどの辺まで行けるでしょうか？」

孝幸が野村に尋ねると、恭子も美由紀も聞き耳を立てた。

都大会で優勝したとはいえ、全国には数えきれないほどの強豪がひしめいている。

100分の1秒差で大きく順位が入れ替わる世界なのだ。

恭子も実際自分がどれくらいのところにいるのか予想もつかない。

「都大会のタイムは悪くはないが、予選を勝ち抜くにはちょっと厳

しいかもせんね」

野村は顔を引き締めてそう答えた。

孝幸と高橋は落胆の表情を浮かべたが、美由紀は目を輝かせて野村に質問した。

「都大会の時ならでしょ？」

すると、野村も表情を緩めて頷いた。

孝幸と高橋は一人のやり取りに何かあると感じて野村に言い寄った。「どういうことですか？」

「実は、ここへ来る前に東洋電機の合宿に参加させたでしょ？」
あれが大当たりでした。よっぽどいにコーチがいたんだと思いま
す。今日、都大会の後初めてタイムを取つたんですが三浦は最後
流して12秒を切つてますからね。更に、この田中も三浦が都大
会で優勝した時のタイムを上回りましたから。今なら、一人とも
準決くらいまでは大丈夫でしょう」

それを聞いた美由紀は「ちえつ！」と指を鳴らして悔しがつた。

「それじゃあ、絶対恭子には優勝してもらわなきやね！」

「そうか、田中さんは出られなかつたんだよね」

孝幸は慰めるような口調で美由紀の方を見た。

「大丈夫ですよ。わたし、大器晩成型なんで高校生になつたら鮮
烈デビューを飾るのよ」

美由紀はあつけらかんと言つてのけた。

孝幸も高橋も安心して胸をなでおろした。

「それを聞いて安心しました。せっかく長期休暇をとつてきました
だからな。まあ、ちょっとは観光旅行気分みたいなところもある
がな」

高橋はそういうと、野村の肩に手を置いて激励した。

「それじゃあ、先生、恭子ちゃんをよろしく頼みますよ。 東京に

帰つたらいい酒を飲みましょう」

「はい、きっといい酒が飲めるでしょう」

華やかに執り行われた開会式の後、恭子と美由紀は高部知美と一緒にライバルたちの様子をうかがいに行つた。

高部知美は2年の時にも全国大会に出場しているだけあって名だたる全国の強豪ランナーたちとも顔見知りらしく、友達のように会話をしている。

そして、皆に恭子を紹介して回つた。

都大会の優勝者ということで誰もが一応、名前くらいは知っているようだったが、タイム的にはライバル視している者はほとんどないかつた。

「みんな分かつてないなあ。私が連れて歩くんだから『注意しないよ』ってことなのに、三浦さんことを全然気にもかけないなんて。都大会の時のタイムしか頭にないのね」

高部知美は、そう咳きながらライバルたちが本番で驚く顔を想像する表情が緩んできた。

「さすがに、中学記録にいちばん近い女。みんなが知美ちゃんには一目置いているのね」

美由紀はすっかり高部知美の友達気取りだ。

「わたし、三浦さんの走りを一度見たことがあるの。強い人と一緒に走ればもっと伸びるんだろうなと思ったわ。なにしろ、走り方が男の子のようなんだもの。そう・・・日本記録保持者の西崎拓選手の走り方によく似ているわ」

高部知美がそういうのを聞いて、恭子と美由紀は顔を見合させて笑つた。

「あのね、恭子が本格的に陸上を始めたきっかけは拓さんなんだよ」

「えつ？」

高部知美が驚いた表所を浮かべたのを見て、美由紀は得意げに話を続けようとした。

しかし、恭子が赤い顔をして首を横に振つたので思いどどまつた。

「そりだつたわ。話しの続きは知美ちゃんが優勝したらだつたわ

」

ね

「もしかして、二人はそういう中なの？」

「違うつてば！」

高部知美が妙な風に勘ぐるので、恭子はむきになつて否定した。
「何となくわかつたわ。この大会はきっと、あなたが台風の日に
なるわね。みんなびっくりするわよ」

高部知美が思つた通り、恭子は難なく予選を突破した。

しかし、組み合わせが良かつたのか、タイム的には準決に残つたメ
ンバーの中では下から3番目だった。

だから、この時点では、まだ誰も注目していなかつた。

高部知美だけが恭子と顔を合わせるたびに✓サインを出して見せた。

準決勝第1組、恭子が出場する。

高部知美は第2組なので、決勝に残らなければ一緒に走ることはで
きない。

予選通過タイムでは恭子がいちばん下だった。

スタートーが位置についてピストルを持つた右手を高々と上げた。
恭子はいつものように集中した。

ピストルの弾がはじき出されるようなスタートダッシュを決めると、
体一つ抜け出した。

他の選手たちには黒い影が通り過ぎたようにしか見えなかつた。

気がついた時には恭子の背中だけが視界に入つてきた。

なんとかその背中を捕まえようと必死に追いかけるが、届きそうで
なかなか届かない。

「そんなバ力な・・・」

きっとだれもがそう思つたに違いない。

その差をキープしながらゴール前20メートルでさらに加速した。

その瞬間、他の選手たちは完全に戦意を失つた。

恭子がゴールした瞬間、高部知美だけが飛び上がりガツツポーズをしていた。

第2組は言つまでもなく、高部知美がトップで決勝進出を決めた。

スタンドでは恭子の応援団が第一中学の校旗と応援旗を振りながら全員がお祭り騒ぎを演じている。誰もが恭子だけしか見ていなかつた。

孝幸と高橋は抱き合つて大喜びしている。

スタンドの最前列で仁美と一緒に大声で恭子に声援を送つていた悠斗は、近づいて来た人影に気がつかなかつた。

ポンと肩をたたかれ振り向くと、そこには拓が立つていた。

「あれっ？ 来るのは明日じゃなかつたのか？」

「ああ。シノさんが気を使つてくれてね」

「今のレース見たか？」

「たつた今、着いたところなんだ」

「そいつは残念だつたな。恭子ちゃんの走り、凄かつたぞ」

「大体わかるさ」

「ちえつ、面白いやつだな」

恭子はすぐに拓の姿に気が付いた。

高部知美が横にいたので、ちらつとその存在を確認しだけだつたが、高部知美はそのじぐさを見逃さなかつた。

「に、西崎選手じゃない！ まさか、あなたの応援に？」

恭子は何も言わずに、うつむいた。

そして顔をあげると少しだけ微笑んで頷いた。

「行こう！ ほら、せつかなんだから向こうに行こうよ。きっと他の連中がやきもちを焼くわよ」

「そ、そんな・・・」

照れ臭そうにしている恭子の腕を引っ張つて高部知美はスタンドの方へ歩きだした。

恭子がスタンドのほうに歩いて来るのが見えたので、孝幸達は我先にとスタンドの最前列へ移動し始めた。

真っ先に駆け降りてきた孝幸は拓に握手を求めるが、拓も右手を差し出ししつかりと握り返した。

それから早紀に頭を下げて微笑みながら言つた。

「おめでとうござります」

「西崎君のおかげね」

「そんなことはありませんよ。これは彼女の持つて生まれた才能といつか・・・ある意味、宿命なんですよ」

「宿命だつて？ それは大袈裟じやないのか」

孝幸は、拓の言葉に謙遜しながらも、胸の内では興奮していた。

「ほら、ボク等のヒロインのお出ましだよ」

悠斗が言つと、いっせいに拍手の嵐が始まった。

「すうい応援団ね。羨ましいわ」

高部知美は、そう言いながら、なんだか自分も勇気を貰えるような気分になつていた。

「ごめんなさい。みんな下町の人たちだから」

「いいのよ。私の家は農家だから、この時期は夏野菜の収穫があって応援どころじゃないの。だから気にしないで。それより、私にも紹介してくれる？」

「ええ！ いいわよ」

恭子は、スタンドの前までやつてくるとみんなに向かつて頭を下げ

た。

すると早速、高橋から祝福の言葉が飛んできた。

「恭子ちゃん、よくやつた！ 今の準決勝のタイムはすごかつたなあ。 決勝もいけるんじゃないかな？」

「それは分からぬけど、とにかく頑張ります」

「ところで、隣にいるのは・・・」

高橋は恭子の出るレースしか見ていなかつたが、この赤いユニフォームだけは目に焼き付いていた。

「埼玉光陽中の高部です」

高部知美が頭を下げて挨拶すると、高橋は納得の表情でうなずいた。
「どうりで、見覚えがあるわけだ。 けた違いに早いヤツが一人いるなと思つていたんだが、お前さんだつたのか」

「はい、申し訳ありません。 でも、決勝は三浦さんがいるので全力を出しますよ。 そうしないと、きっと勝てないでしょ？」

「そうかい、そうかい、恭子ちゃんはそんなに強敵かい？」

「はい！ わたし、ずっと前から、三浦さんだけが私と一緒に楽しんでくれる相手になりそつだと思つていたんですよ。 今日の走りをずつと見てて、私の予想が正しかつたと確信しました」

「そうか！ 君は大したものだなあ。 敵になる人間に對してそんな風に考えられるなんて」

「そうですか？ 三浦さんもそうだと思いますけど、私は単純に走るのが好きなだけですから」

高部智子の話に高橋は深く感心した。

「まあ、『類は友を呼ぶ』ということでしょう」

拓がそういうと、高橋たちは一様に納得した。

「おうー。じゃあ、君もがんばりな。 応援してやるからな」

高部智子は改めて頭を下げ、感謝の気持ちを示した。

そして、拓に向つて挨拶をした。

「高部さん、中学を卒業したらウチに来るんだつて？」

拓の言葉に恭子達は驚いた。

高部智子は、高校へは進学せず、中学卒業と同時に東洋電機の陸上部に入ることが内定しているといつのだ。

「ウチは農家だし、ゆくゆくは私も後を継ぐつもりだから学歴は必要ないしね。両親も、今のうちに好きなことをやっておけというものだから」

「ウチは女子のスプリンターがいないから監督が期待しているみたいだよ。頑張ってね」

「ありがとうございます。皆さんは悪いけど、決勝では三浦さんにも負けませんよ」

「よく言った。それでこそ、恭子ちゃんのライバルだ」

高橋は、すっかり高部知美のことが気に入つたらしい。

そんなやり取りを恭子は黙つて聞いていたが、拓が恭子の方を着てウインクしたので、改めて報告をした。

「拓さん、なんとか決勝に残ることができましたよ」

「ああ。真田先輩から話は聞いているよ。先輩が決勝までは保證すると言つていたよ」

拓は、大会前に恭子達が東洋電機で合宿した時の様子を、真田綾子から聞いていた。

「真田さんにはとても感謝します。なんだか、今までにない力を引き出してもらつたみたい」

「決勝、楽しみにしているよ。それから高部さん、君も負けるなよ」

「はい！」

恭子と高部知美は、二人一緒に返事をすると、お互に顔を見合せて吹き出すように笑つた。

「じゃあ、決勝で。そして表彰台で」

高部智子はそつまつと、その場を後にした。

準決勝のタイムは、高部知美が11秒85でトップ。

恭子は自己ベストの11秒90で2番目だった。

3番目以降の選手たちはほとんど11秒9の後半から12秒を少し超えるくらいのところでかなり接戦が予想された。

スタートのタイミング一つで充分に順位が入れ替わるレベルだ。そんな中にあって、高部知美の優勝は間違いないというのが大方の見方だった。

フィールドでは既にすべての競技が終了していた。トラックでは決勝のスタートが近付いて、選手たちがトラックに出てきた。

恭子と高部知美は二人並んでレーン向つて歩いた。他の選手たちは、かなり入れ込んでいるようだった。これが全国大会の決勝という舞台なのだ。

しかし、さすがに、高部知美は離れしているようで、ちつとも緊張した様子は見られなかつた。

恭子も、リラックスしていた。

スタート時刻が近付いて、選手たちが自分のレーンに入った。

- 1 コース、富崎県延岡西中学校、若居香奈子
2 コース、福岡県博多女子短大付属中学校、中島小百合
3 コース、地元、香川県高松第三中学校、小倉真紀子
4 コース、埼玉県埼玉光陽中学校、高部知美。
5 コース、東京都城東第一中学校、三浦恭子
6 コース、大阪府堺南中学校、吉田ひとみ
7 コース、兵庫県神戸青陵中学校、古沢順子
8 コース、秋田県角館桜花中学校、南優子

選手たちは、入念なウォーミングアップを終え、それぞれのスタート位置に着いた。

恭子の隣のレーンにいる高部知美は、さつきまでの穏やかな表情と違つて、既にゴールだけを見据えている。

恭子も気持ちを切り替えた。

スタートーがピストルを構える。

選手たちは一斉にスタート態勢に入る。

「よーい・・・」

ピストルの引き金が引かれると同時にパンパーンとピストルの音が2階なり響く。

6コース、大阪の吉田ひとみ福岡の中島小百合がフライングを犯した。

二人は、一か八かの勝負に出て失敗したのだ。
思わず仕切り直しに、一度、緊張が緩んだ。

選手たちは、気持ちをリラックスさせようと首を回したり、屈伸をしたりしながら再スタートに備えた。

恭子は、スタートを切らなかつた。

隣の吉田ひとみの飛び出しが明らかに早いと感じ取つたからだ。
他の選手たちは、恭子が出遅れたのに運が良かつた、と思っていた。

高部知美は、そんな恭子を見て鳥肌が立つのを覚えた。

（この子は本当にすごいわ。もしかしたら、負けるかもしれない）
陸上を始めてから、常にトップを走り続けてきた高部知美が初めて負けるかもしれないと感じたのだった。

恭子と高部知美以外の選手たちは、一度途切れた緊張と集中力を、再び同じレベルに引き上げることはできなかつた。

恭子は一度立ち上がりて深呼吸をした。
そして再び、スタートの態勢に入つた。

恭子は、スタートーが引き金を引く腕の筋肉のふるえ、そして指先の動き、100m先の人間のわずかな変化がすべて感じ取れるほど集中していた。

ピストルが鳴つた瞬間、恭子は地面を思いつき蹴つて飛び出した。
その瞬間、恭子の視界には、ゴールのテープしか見えないはずだつた。
ところが、一陣の風と共に一步前に出たのは高部知美だつた。

高部知美は、そのまま一気に加速すると、少しずつ恭子を引き離し

ていった。

恭子は、スタートの勢いを殺すことなく加速したが高部知美との差を詰めることはできなかつた。

スタンドで見ている者には、まったく同じ位置を走つてゐるようになか見えないくらいの差が、二人の間では10メートルの距離ほどに感じられていた。

スタートした時点で、最初にフライングを犯した2人が出遅れた。これは仕方がない。

せつかく、全国大会の決勝にまできて、失格になるわけにはいかない。

2回目のスタートはどうしても慎重にならざるを得なかつた。

3コースの地元香川の小倉真紀子はほぼ、高部知美と同時にスタートを切つた。

しかし、高部知美のスタートの爆発力は半端ではない。

準決勝でも一緒に走つてゐた小倉真紀子は、十分に承知していたので、ゴールまで、差を広げられないようについて行けば、2位になると計算していた。

しかし、自分が2人の背中を見ることにならうとは、全く予想していなかつた。

7コース、兵庫の古沢順子と1コース、宮崎の若居香奈子、8コース秋田の南優子はほぼ横一線に並んで4番手で追走する。50メートルを過ぎたあたりで、兵庫の古沢順子が少し抜け出す。そして、大阪の吉田ひとみがじわじわと盛り返してきた。

この段階で、トップは高部知美、続いて恭子、少し離れて吉田ひとみ、ほぼ同じ位置で古沢と小倉真紀子、さらに離されて南、若居、中島はスタートの出遅れが響いて最後尾から抜け出せずにここまで來た。

先頭から最後尾までは5メートルほどの接戦だつた。

レースはいよいよ後半戦に入つていく。

恭子は前を行く高部知美の存在を気にすることなく、ただ、心地よ

い風を感じていた。

高部知美もまた、追いかけて来る者たちのことなど意識の中には置いていなかつた。

地元の吉沢順子は、なんとか表彰台をキープしたいと思つていた。高部智子にはかなわないとしても、2位は確保したい。

あわよくば、高場知美の調子いかんで、棚ぼたの優勝もあるかもしれないとさえ思つていただけに、今までノーマークだつた恭子の存在は予想外だつた。

吉田ひとみも同じ思いだつた。

高部知美を負かすためには、一か八かのスタートに賭けるしかなかつた。

結果的にはそれが裏目に出てしまつたが、高部知美以外のものに負けるわけにはいかなかつた。

古沢順子は決勝に残れただけで満足していた。この決勝のレースは、中学校生活の最後のご褒美というような感覚で臨んでいた。

スタートで一人が出遅れてくれたことで、表彰台へ欲が少し出きた。

中島小百合は最後まであきらめていなかつた。

恭子と同様に、今大会中に自己記録を塗り替えながら、勝ち進んできた。

さほど注目もされていなかつたので、逆にあつと言わせてやるひつという思いが最初のフライングにつながつた。

若居と南は、準決勝2組目で高部智子達と走り、若居が4位、南が5位だつた。

順位で決勝に進むことができず、タイムで拾われた。

組み合わせのあやとはいえ、一度は決勝をあきらめた一人だつた。ただ、決勝を走るからには、無様な走りだけはしたくなかった。

ゴールが近付くにつれ、前の人と他の選手の差が広がつてきた。

3場番田の位置にいる吉田は必死にもがいたが、差を詰めるビームが、次第に一人の背中が小さくなつていいのが分かると、後続の選手に足元をすくわれることのないよう気を引き締めた。

3位争いは激烈になつてきた。

吉田ひとみがわずかに抜け出しているが、古沢順子、小倉真紀子もほとんど差がなく、ゴールへ向かつてくる。

中島も後半追い上げて入るが、若居と南を交わすといひまではいかず、最下位争いもほぼ横一線となつた。

高部知美はトップを走りながらも内心焦つていた。

恭子の走りは最後の20メートルの加速がケタ違いだということを知つてゐるからだ。

今までは逃げ切れないかもしれない。

そう思つ反面、恭子が並んできて一緒にゴールできたら、最高にいい気分だろうな、とも思つてゐた。いずれにしても、ここまで来たら、残つてゐる力をふりしぼつて悔いのないようレースを終えよう。

そう思つた。

恭子はスタートで高部智子が前に出た時、『さすが!』だと思った。

しかし、あとは自分以外の選手の存在も、周りの景色も感じなくなつてしまつた。

ただ、風に導かれるように走つた。

いや、走つているとつよりも、風に乗つて飛んでいるような感覚だつた。

そして、やがて決着の時を迎へようとしていた。

高部智子のスピードは既にMAXに達していた。

それでも恭子を引き離すことができなかつた。ゴールまであと20メートル。

恭子のスピードがMAXを迎えた瞬間、スタンンド中のすべてのものが恭子と同じ風を感じたに違いない。

まさに、ほんの一瞬の出来事だった。

しかし、その瞬間はまるで2時間ドラマでも見ていくような気がして、とにかく焼き付けられた。

今までなかなか追いつけなかつた高部知美が、その一瞬であつといつ間に抜き去られた。
まるで、瞬間移動でもしたかのように。
追いつく・・・。そう思った時には、恭子が真っ先に「ゴールのテープを切つていた。

恭子がいちばんにゴールを駆け抜けると、スタンンドにいた恭子の応援団は一斉に万歳を繰り返し始めた。
悠斗は拓に握手を求めた。

「やつたな！」

「ああ。やつといつなると思っていたよ」

孝幸と高橋は、早速、宴会の準備をホテルに申し入れようと携帯を電話取り出した。

「おい、早紀、ホテルの電話番号は？」
「すべて用意できますよ」
「えつ？」

「宴会の準備なら、もう出来ますよ。あなた達の考えることなんてすべてお見通しです！」

早紀は、仁美と二人で、既に、宴会の段取りを行つていた。
実は、ここに来る前からホテルと打ち合わせして、貸し切りに出来るパーティールームをホテル近くに予約してあつたのだ。
今頃は、ホテルから馳走が運び込まれているところだ。

「じゃあ、恭子が勝つことが初めから分かつていたのか？」

「そんなことは思つてませんよ。私は今まで頑張ってきた恭子に御苦労さんの意味でパーティーの用意をしていたのよ

「そういうことか。まあ、考えてみれば当然だな」

「だけど、これで東京に戻つたら大変なことのなりそうね。 “ば

れいしょ”が！」

「早紀さん、その通りだよ！ そんときは、売上の半分は恭子ちゃんにあげたいくらいだよ」

電光掲示板に着順が表示された。

1	・	三浦（東京	城東第一）	1	1	・	7	1	R
2	・	高部（埼玉	光 陽）	1	1	・	7	2	
3	・	吉田（大阪	堺 南）	1	1	・	8	9	
4	・	小倉（香川	高松第三）	1	1	・	9	0	
5	・	古沢（兵庫	神戸青陵）	1	1	・	9	3	
6	・	南（秋田	角館桜花）	1	1	・	9	5	
7	・	若居（宮崎	延 岡 西）	1	1	・	9	6	
7	・	中島（福岡	博多女附）	1	1	・	9	6	

拓は、その数字をじつと見つめた。

11秒71。

中学生女子の日本新記録。

何も言わずに、ただ、強くこぶしを握り締めた。

その瞬間、恭子と高部知美は抱き合つた。

優勝した恭子も、準優勝の高部知美も中学生女子日本記録を更新したのだ。

「三浦さん、あなたのおかげよ。 やつと超えられたわ。 あなたと走れば、きっとといけると思っていたの！ でも、あなたがその上に行つたのは、ちょっとシャクだけどね」

「“めんなさい。私、余計なことしちゃって・・・」

すると、高部知美は突然笑い出した。

「もう、冗談だつてば。あなたつて本当に素直なんだね」
そして、すぐに、美由紀や野村が駆け寄ってきた。

一緒に走った選手たちも集まって来て、恭子の胴上げが始まった。

そんな光景をスタンドで見ていた拓は、今のこの瞬間を心から祝福した。

16・運命の日

東京に戻つて来てから1か月。

恭子は中学校の部活からは引退して、後輩の指導をしながら自主トレーニングをしていた。

学校が休みの週末には東洋電機へ出向き、真田綾子の指導を受けた。全国大会が終わつたときには、陸上競技で名門といわれる私立の高校から数えきれないくらいのオファーがあつた。

だが、恭子は都立の城東第一高校に行くと決めていたし、孝幸と早紀もそのつもりでいたので、スカウトたちの対応には一苦労だつた。2月になると、推薦の試験が行われたが、恭子は体調を崩して受験することができなかつた。

まあ、一般入試でも充分に合格するだけの学力はあつたから、恭子が拓と同じ一高のユニフォームで全国の舞台に行くことは誰もが疑わなかつた。

恭子はトレーニングにも受験勉強にも努力を惜しまず、拓と一緒にオリンピックに出ることを夢見ていた。

恭子が全国大会を制した後、拓は海外の賞金が出るレースを転戦していた。

元旦には、恭子もそんな拓とメールで新年のあいさつを交わした。ところが、年が明けて間もなく、拓は3月までの海外遠征を切り上げて、急に東京に帰つてきた。

東洋電機の池田監督をはじめ、マスクモも拓の突然の帰国には驚

いていた。

「どうした？ 怪我でもしたのか？」

池田監督は拓が会社を辞めて、海外で賞金を稼ぎながら実績を作りたいと申し出た時は猛反対をした。

しかし、拓の熱意に負けて、会社に休職扱いにしてくれるよう頼み込んで、拓を送り出した。

「いえ、体調は申し分ありません。帰ってきたのは、今、ボクがここにいなくちゃならない理由があるからです。ボクの人生は、この時のために、そして、その後の未来をつくるためにあつたようなものですから」

「拓、お前、いつたい何を言つてるんだ？」

池田監督の問いに、拓は答えず、ただ、黙つて空を見つめた。

『なにも心配するな。ボクがささえてあげるから』

拓が帰国したニュースは、否応なく恭子の耳にも入った。

しかし、恭子は受験勉強に専念し、毎晩深夜まで机に向かっていた。

「おい、恭子、あまり無理するなよ。また体調でも壊したら元も子もないぞ」

孝幸はそんな恭子のことが心配で仕方なかつた。

「そうよ、たまには早く休んでもバチは当たらないわ」

早紀もまた孝幸と同じ気持ちだった。

ふたりとも、最近の恭子を見ていると、無性に胸騒ぎがしたのだった。

「お父さんもお母さんも心配し過ぎだよ。この冬休みが受験生にとってどれだけ大切かくらいわかっているでしょう？」

「そりゃあ、そうだが、お前の成績なら一高どこのか聖都付属だって楽勝だと野村先生も言つてたからな・・・」

「そうね。聖都付属を受けるなら勉強なんかしないわ。一高だからやるのよ。一高だから、どんな間違いがあつても必ず入りた

いた。

いの！　一高だから・・・」

そんな恭子の言葉を聞いたら孝幸達も何も言えなかつた。

受験日の一週間前、恭子はいつものように熱心に受験勉強をしていた。

体調管理にも気を使い、この冬は珍しく風邪ひとつひかなかつた。夕食は、恭子の好きなハヤシライスだった。

サラダは孝幸のお手製だった。

恭子は孝幸のポテトサラダがとてもお気に入りだった。

「お母さんの料理は私の自慢だけど、ポテトサラダだけはお父さんが世界一美味しいわ」

「まあ！　確かにお父さんのポテトサラダは美味しいけれど、世界一は褒めすぎじゃない？」

「そんなことないわ！　世界一料理が上手なママより美味しいのよ」という、勉強ばかりで、ろくに食事もしていなかつた恭子が、今夜はことのほかよく食べた。

孝幸も早紀も、その姿を見て、すっかり安心した。

「それじゃあ、ごちそうさま」

「ああ、喜んでもらえて光榮だよ。」

恭子は食器を片づけると再び部屋に戻つて行つた。

「どうして神様は、一生懸命頑張つている人に試練を『えるの？』恭子がまだ小学校のころ、あるテレビの番組を見ながら、涙ながらに孝幸に聞いて来たことがあつた。

「その人ならきっと乗り切ることができると神様には分かるからよ」そんなことを早紀は話した覚えがある。

まさに、その時のことが夢に出てきた。

早紀はハツとして田を覚ますと、何とも言えない不安全感に襲われた。

その夜、恭子は久しぶりにお腹いっぱい食事を取ったので日付が
変わる頃には睡魔に襲われはじめていた。

「う~ん」

椅子から立ち上がり、両手を高くあげ、思いつきり伸びをした。
少し、気分がシャキッとしたように思えた。

「あと少しだけ頑張ろう」

そう思つて椅子に座り、ペンを手にした。

左手で参考書のページをめくらうとした時、運命のときは訪れた。

『あれ？ 手が動かない・・・』

そつ思つと同時に、左足の力が抜けて、恭子は椅子から崩れ落ちた。

『どうしたの？』

何が何だか分からなかつた。

両手で体をささえて起き上がるうとするけれど、左側に倒れてしまう。

「わ、わたし、左手と左足が動かない・・・ おかあさん、助けて・
・・」

そう叫びたかつたが、声もまともに出せない。

恭子は動かすことができる右手と右足で、床を這いながら、ビツビツ
か孝幸と早紀の寝室までたどり着いた。

右手をのばしてドアノブを廻すと、開いたドアに身を任せるように
部屋の中へ転がり込んだ。

夢から覚めた早紀は、その瞬間、寝室のドアが開いて恭子が倒れ
込んで来たのを見てベッドから飛び出した。

「恭子！」

孝幸は恭子の体を支えると、抱きしめた。

「どうしたの？」

「・・・ないの」

「えつ？」

「動かないの・・・」

恭子はそう言って、右手で左手と左足を指した。

早紀はことの重大さに気がつくと孝幸に向って叫んだ。

「おとうさん！ 起きて頂戴。 恭子が、恭子が・・・」

孝幸が目を覚ますと、ぐつたりした恭子を抱きかかえる早紀の姿があつた。

『どうした！ 何が起きたんだ？』

とにかくただ事ではない。

孝幸は恭子を背負うと、車のキーを早紀に渡した。

「とにかくエンジンをかけておいてくれ。」

そして、ベッドから毛布を引き抜いて恭子の背中に掛けると、携帯電話を取り、すぐに高橋に電話した。

「部長、一大事です。恭子が・・・」

布団の中で電話を受けた高橋は、その瞬間、半開きの瞼を開いて立ち上がった。

「わかった。 子供たちは俺が引き受ける。 早く病院に連れて行つてやれ」

「ありがとうございます。 恩に着ます。 ドアのカギは開けてきますから」

エレベーターでエントランスに降りてみると、早紀が玄関先に車を止めて後部座席のドアを開けた。

孝幸は恭子を後部座席に乗せると、運転席に座りハンドルを握った。

一番近い救急指定病院に着くと、孝幸は再び恭子を背負つて救急の受付に走った。

夜中だと言うのに順番待ちの患者が数人並んでいた。

『なんてこつた！ こんな時に限つて・・・』

「すいませ～ん、先生！ ちょっと診てもらえませんか？」

受付の看護師は事務的に「少々お待ちくださいね」と言つた。

「ふやけるな！ 」この子にもしものことがあつたら、あんたどう責任取るつもりだ。 いくら順番でも、時と場合があるだろ？ とりあえず見てくれよ。 それで大丈夫ならこいつでも待つか？

脳外科医の香坂尚輝は緊急のオペを終えて下番するところだった。 たまたま救急外来の受付のそばを通りた時に、孝幸の叫び声を聞いた。

孝幸に背負われた少女の姿を見て、すぐに脳出血だと思った。

香坂は孝幸のほうに歩いて行くと、少女の表情を確かめた。 少女は不安そうにしていたが、この父親を信頼していることが一眼見て分かった。

「おとうさん、私の診察室へ行きましょう！」

孝幸は恭子を背負つて医者に従つて診察室へ恭子を連れて行った。 診察室のベッドに恭子を寝かせると、医者は恭子の症状を確認した。 そして、孝幸に発症した時の状況を聞くと、額き、看護師に指示を与えて孝幸を応接室へ案内した。

車を駐車場に止めてから病院に入ってきた早紀は、受付で孝幸と恭子のことを見た。

「ああ、多分、香坂先生が診てこられる患者さんね・・・ もとの診察室“C”の応接にいらっしゃると思こますよ」

「ありがとうございます」

早紀はそう礼を言つと、診察室“C”的ドアを開けた。

「あの、三浦と申しますが、今、ここに・・・」

「お母様ですね。 こちらへ」

看護士が応接に案内してくれた。

部屋に入ると、孝幸が神妙な顔をして医者の話を着てこるところだ

つた。

「おとうさん、恭子は？」

孝幸は早紀の顔を見た途端、目頭が熱くなり、唇が震え始めた。

「さ、恭子が……走れないって……走れないって言うんだ」

「おとうさん、落ち着いてください」

早紀は孝幸の肩に手を置いて、医者に事情を聞いた。

「まず、恭子さんの病名は『脳動静脈奇形』 脳動静脈奇形は一般の方には聞き慣れない病名と思いますが、脳神経外科の領域では良く知られている疾患です。普通の脳の血液循環ですと、動脈・毛細血管・静脈の順序に血液が流れます。毛細血管は酸素やグルコースなど脳にとって大事な物質の交換場所であると同時に脳循環からみますと血流の抹消抵抗の強い場所でもあります。 脳動静脈奇形は原始動脈、毛細管、静脈が分かれる胎生早期（第三週）に発生する先天性異常であり、脳血管撮影をしますと、正常の流れと異なり、毛細血管相が無く、動脈相の時期に既に静脈が造影され（動脈血が直接静脈に移行）、同時に『無数のマムシが巣の中で一ヨロ一ヨロと絡み合っているような異常血管塊（ナイダス、ラテン語の巣の意）』が描出されます。 動動静脈奇形が存在しますと、脳の血流は、

毛細血管があるため抹消抵抗の強い正常脳組織への還流を避け、抵抗の少ない動静脈奇形部に多くの血液が流れ込みます。従って周辺部の脳は乏血状態になり、まひなどの脳虚血症状が出現することがあります。これを動静脈奇形部に血が盗まれる現象、『盗血現象』と言います。 また、毛細血管が存在しないため、動脈系と静脈系の圧調整が出来ず、静脈系に過大の圧が加わり、次第に脳動静脈奇形は増大します。大きなものになりますと血液が空回りしますので心臓に負担が加わり、心筋肥大や心不全になる場合もまれにあります。さらには、破裂による出血の危険も伴います。さて、脳動静脈奇形の頻度ですが前回の脳動脈瘤の約10分の1から20分の1と言われています。代表的な症状は脳動静脈奇形の破裂による頭蓋内出血症状＝くも膜下出血、脳実質内出血、脳室内出血…突然の激

しい頭痛、嘔吐や出血の部位によるまひなどの巣症状^{II}が40～50%、次いでけいれん発作が20～30%、前述の盗血現象によるまひなどの進行性の神経脱落症状が数%、頭痛などのスクリーニングで偶然発見されるものが20%前後となっています。いずれも発症年齢は20～30歳代と比較的若年です。この年齢で発症したくも膜下出血やけいれん発作の患者さんを診れば、われわれ脳神経外科医は最初にこの脳動静脈奇形を考える程です。この疾患の予後は、脳動脈瘤破裂より軽症ですが、いつたん出血に見舞われますと死亡率約10%、まひなどの後遺症が残る罹病率が約30%と言わっています。脳動静脈奇形の自然歴をみると、非出血発症例の将来の出血率は年間2～3%、出血発症例では再出血率は1年目は6%と高く、以後は非出血例と同等の年間2～3%と言われています。さてこの脳動静脈奇形の治療の第一は将来の出血による死亡を含む重篤な神経脱落症状出現の防止にあります。この目的のため現代の医学では次の三つの戦略が考えられます。[?]手術による摘出手術：最も確実である。しかし脳深部や重要な神経機能部位では手術が困難な場合がある。[?]血管内手術による塞栓術：血管内操作でマイクロカテーテルを動静脈奇形の栄養血管に誘導して塞栓物質を注入してナイダスを中から塞栓する。しかし単独では治癒率は低く、現況ではまだ補助的治療手段の段階である。[?]ガンマーナイフやX-ナイフなどによる放射線治療：通常一日で治療が終了しすぐ社会復帰出来るという利点がある。一方、完全塞栓率が摘出術より低く、完全塞栓に至るまでに2～3年を要し、その間の出血率は未治療と同等である。また、[?][?][?]をいろいろ組み合わせた治療も良く行われます。さらに、[?]根治療法のリスクや脳動脈瘤破裂より致死率が低いことを考慮して抗けいれん剤のみを投与し保存的治療で経過をみるという選択も重要です。脳動静脈奇形の大きさ、存在場所が脳の表面か深部か、重要な神経機能をつかさどる場所か、出血例か非出血例か、既に神経脱落症状を伴っているか、年齢、合併症の有無など症例ごとに各治療手段のリスクも異なります。患者さんに十

分説明し、可能であれば完全治癒が得られる摘出術が望ましいとは考えますが、さらに一人ひとりにとり最も適切な治療方法を吟味し選択すべきだと考えます。因みに胆沢病院では摘出術を中心とする根治療法と保存的治療の比率はほぼ半々です。 いずれにしても、恭子さんの症状ではすぐに手術しなければなりません。 そして、恭子さんの場合はほぼ100%に近い確率で麻痺が残ると思われます。 それを踏まえて、こちらの同意書にサインして頂きたいのですが」

専門的なことはよく分からぬが、すぐに手術が必要ならサインするしかない。

孝幸に比べて、早紀は自分でも驚くほど冷静だった。

「とにかく、恭子のために最善を尽くしていただけますか？」

「もちろんです」

数十分後、手術に向けての検査を行つたため、恭子は検査室へ運ばれて行つた。

検査だけで3時間かかった。

そして、これから7時間にも及ぶ手術が始まる。

手術室へ入るとき、恭子は一瞬、孝幸と早紀に向つてサインを出して見せた。

『大丈夫だから心配しないで』

きっと、そう言いたかったのだろう。

孝幸は、そんな恭子の姿を見たら、自然に涙が溢れだして止まらなかつた。

「くそっ！ 涙が止まらねえ。 父親のくせに、だらしないな・・・

カツコ悪いよ」

「そんなことありませんよ。 父親だから涙が流れるんですよ。 あなたはとてもいいお父さんよ」

早紀はそう言って孝幸を抱きしめた。

そして、早紀の頬にも涙のしづくが流れ落ちていた。

17・全員集合

第一報が拓の耳に入ったのは朝の8時30分だった。この日は土曜日だということもあって、会社は休みで陸上部も朝練はなかった。

拓の部屋は無人だった。誰もいない部屋で、ベッドの上におかれた携帯電話がマナーモードでブルブルと震えていた。

拓は軽くランニングするつもりで寮の玄関で靴を履いているところだった。

靴の紐を結び終わり立ち上がりたとき、寮母から声をかけられた。「西崎君、電話だよ」

拓は事務室へ廻ると置かれている受話器を取った。

「もしもし、西崎です・・・」

電話の相手は悠斗だった。

孝幸は最初に家に電話して高橋に状況を説明した。

次に“ばれしょ”へ電話した。

拓の携帯や亮の電話番号を知らなかつたから、仁美から連絡を取つてもらおうと思つたのだ。

電話に出たマスターに大まかな事情を話しさると、すべて仁美に代わつてもらつた。

仁美は驚いて放心状態だったが、すぐに気を取り直して、すぐに連

絡を取ると孝幸に告げた。

仁美はすぐに拓の携帯に電話した。

拓はなかなか電話に出なかつた。

呼び出しホールが10回を過ぎると、留守番電話に切り替わつた。仁美は仕方なく、すぐに電話するよつメッシュページを残すと、すぐに悠斗に電話した。

「美から悲報を聞いた悠斗は「信じられない……」と言ひながら、例の話を思い出していた。

『まさか、本当にこんなことが起きるなんて』

そう思いながら、仁美に言つた。

「あいつのことだから、多分、部屋に携帯置きつ放しでランニングにでも行つてるんだろう。一応、寮にかけてみるよ。それで、仁美はどうするんだ？ 病院に行くのか？ だつたら迎えに行くから用意しろ」

「手術が終わるのは夕方近くになるみたいだから、先に恭子ん家に行つて身の回りの物を持ってくるようにおじさんに頼まれてるの」「そうか、わかった。どうにしても迎えに行くよ。浩人たちも心配しててるだろう」

悠斗は電話を切ると、すぐに東洋電機陸上部の寮に電話した。

「・・・ 悠斗か？ 悪い！ 携帯、部屋に置きつ放しだ」

「そんなことより、つかまつて良かつた。恭子ちゃんが大変なんだ！ すぐに戻つて来られないか？」

悠斗の口調から、拓は、ついにその日が来たのだと理解した。

拓は受話器を置くと、寮母に礼を言つて部屋に戻つた。

ベッドの上に置かれた携帯電話は、着信があつたことを知らせる音が点滅していた。

留守電のメッセージを聞きながら、私服に着替えると、通用口を出

て寮の裏手にある駐車場へ向かった。

東洋電機陸上部の寮は、交通の便があまり良くない場所にあるので、寮生のほとんどが車を持っていた。

拓も、寮に入つてすぐに免許を取り、車を買った。

駐車場に止められている車の中でも、ひときわ目を引く赤いRV車のドアにキーを差し込むと、拓は一瞬空を見上げて呟いた。

「頑張れよ！」

三浦家では、高橋が朝食の支度をしていた。

高橋は、この年まで独身だということもあり、料理の腕前は大したものだ。

卵を溶いて、牛乳・バター・ツナ・千切りにしたキャベツを混ぜてオムレツを作る。

フライパンの返しが鮮やかに決まった。

「おじさん上手なんだね。でも、どうしてここにいるの？」

優子が起きてきて、不思議そうに高橋を見た。

「優子か。おはよう！まあ、待つて」

続いて浩人も起きてきた。

「お母さん達は？」

高橋はオムレツを皿に盛り付けると、テーブルに運んだ。

「二人とも、とりあえず、飯を食え。説明はそれからだ」

優子と浩人は席について、お互に顔を見合せながら手を合わせた。

「いただきます」

テーブルには、オムレツの他にもサラダ・ソーセージ・トースト・味噌汁が並べられていた。

「パンのときはいつもコンソメスープだよ」

浩人が味噌汁をすすりながら言つた。

「たまにはいいだろう」

「まあね。これ、全部おじさんが作ったの？」

「なかなかのもんだろう?」

「うん。でも、お母さんの方がうまいよ」

そんな会話をしている浩人と高橋をよそに、優子は食事中、ずっと無言だった。

「じちそうさま」

食事が終わり、テーブルの上を片付けると、高橋は改めて二人を席に着かせた。

「いいか、よく聞くんだ」

高橋は一人の目をじっと見つめた。

二人とも、真剣な表情で高橋の目を見据えている。

「実は、昨日の夜中に恭子が病院に運ばれた」

「お姉ちゃんが?」

二人は声を揃えて尋ねた。

「どうして?」

高橋も詳しいことはまだ聞かされていないが、自分が知りうる限りの情報を二人に話した。

二人とも充分に理解できる年齢だと判断したからだ。

優子は、高橋の話を聞きながら涙を流している。

しかし、一度も下を向いたり目をそらしたりせずに最後まで高橋の話を聞いた。

「俺も、詳しいことはまだ分からないが、とにかくそういうことだ。

だから、これから三人の身の回りの物を持って病院に行くぞ。

分かつたら支度をするんだ。いいな」

「わかった!」

浩人はそう答えると、孝幸のボストンバッグにタオルや洗面道具を詰め込み始めた。

「みんなにはもう連絡したの?」

「ああ、多分、病院から孝幸が連絡してくるはずだ」

「そう、なら、みんな病院に集合だね」

優子も涙拭いて席を立った。

孝幸は待合室のベンチに座つて頭を抱えたまま動じようとしなかった。

ベンチとは言つても、脳外科の手術室専用の待合室はホテルのロビーのように豪華な内装が施されていた。

孝幸が座つているベンチも会社の応接セツトよりはるかに豪華なものに見えた。

そのスペースには孝幸達の他には誰もいない。

静まり返つたその空間に、空腹を告げる孝幸の腹の虫の声が響き渡つた。

早紀は思わず吹き出した。

孝幸もフツと声を漏らした。

「ここにきてから何も食べてないものね。さすがに、私もお腹が減つたわ。近くにコンビニがあつたから何か買つてくるわね。

あなた、何か食べたいものはある?」

「そうだな、なんか温まるものが食べたいな」

「わかつたわ。適当に見繕つてくるわ」

早紀が去ると孝幸は立ち上がり窓から外を眺めた。

どんよりと曇つた空は孝幸の心を不安から解放してはくれなかつた。

「俺がこんなことじゃダメだな!」

そう言つて、孝幸は自分を励ました。

手術室に運ばれて行く時、恭子が見せた√サインが脳裏に浮かび、

それが恭子の意志であり、両親に対する“心配しないで”という願いなのだと。

三浦家では、高橋と子供たちが病院にいる3人の身の回りの物を用意していた。

しかし、こんなことは今まで経験がないだけに、何をどのくらい

用意すればいいのが皆田見当がつかなかつた。

浩人は旅行気分で、ゲームや漫画の本を自分のリュックに詰め始めた。

優子は部屋に戻つたきり出てこないし、高橋も、女性の着替えとなると手が付けられずにいた。

そんなとき、ちょうど仁美と悠斗がやってきた。

「仁美は部屋に入るなり、驚いた。

「なに？ これ？ 引っ越しでも始める気？」

辺り一面に着替えやら雑誌やらが散乱しているのだ。

「おう！ ちょうどいいところに来てくれたな。 病院に行つている早紀ちゃん達の身の回りの物を持つて見舞いに行こうと思つたんだが、何を持って行こうか悩んでいるうちにこんなになつちまつて・・・いや、だが、ほとんどは浩人がやつたんだぞ」

「まつたく！ 兩親揃つて病院で暮らすわけじゃないんだから、とりあえず、恭子の着替えや洗面道具があればいいわよ。 あとはその都度運べばいいんだから」

仁美はそう言いながら、散らかり放題になつたリビングを片付け始めた。

「これじゃあ、一人が病院から帰つてきたら、泥棒にでも入られたんじゃないかと心配するわ」

悠斗は優子の姿が見えないのが気になつた。

優子の部屋のドアをノックすると、中から返事が聞こえてきた。

「優子ちゃん？ 大丈夫かい？」

「悠斗コーチ？ 入つてもいいですよ」

悠斗は恐る恐る優子の部屋のドアを開けた。

優子はパソコンに向かつて何か調べているようだつた。

それは、恭子の病気についての記述が記されているホームページだつた。

さらに、恭子の携帯電話を手にしてメールをしているようだつた。

「何してるんだい？」

「うん、お姉ちゃんの一大事だもん。みんなに知られなきや！」

おじさんはお母さんとお父さんがみんなに連絡したって言つたけど、たかが知れてるわよ。だから私がみんなにメールしてあげてるの」

「まるほど、恭子ちゃんの携帯ならすべての情報が入つていいからね。でも、携帯を見たことばれたら怒られるんじゃないのかい？」

「大丈夫！お姉ちゃんはそういうの無頓着だから・・・あつ！」

返信来た。高部知美だつて。コーチ知つてる？」

さすが、今時の小学生は違う。

悠斗は、優子が部屋に閉じ込もつて泣いているのではないかと心配した自分が恥ずかしくなつた。

恭子の妹だけのことはある。

知美は最初冗談かと思った。

今、手術しているはずの人間から手術中などというメールが来るなんて馬鹿げている。

『変な冗談はやめて。あなたらしくないし、笑えないから』

そう返信すると、すぐに返事が返ってきた。

『本当だよ。私は妹の優子です。』

『なんてことなの！』

知美はすぐに拓の部屋へ走った。

この時、既に、知美は東洋電機の陸上部に入つて拓と同じ寮に入つていた。

女子寮と男子寮は棟が分かれていて2階の渡り廊下でつながつている。

知美が渡り廊下を走つている時駐車場へ向かつ拓を見かけた。

「西崎さん！」

知美は大声で拓を呼んだが、拓には聞こえていないようだった。

拓がこれから恭子の所へ行くのだと察した知美は、当りを見渡し下に降りられるような足がかりがないか探した。

うまい具合に渡り廊下の下の階にある食堂の屋根伝いに進めば、一段低くなつた通用口の底がある。

そこからなら飛び降りることができそつだつた。

知美はすぐに窓から飛び出し、屋根を走つて通用口の底に飛び移つたと同時に地面に着地した。

そして、そのまま駐車場まで走つた。

車に乗つてエンジンを掛け、アクセルを踏もうとした瞬間、フロントガラスの前に知美が現れた。

拓は慌ててアクセルから足を放した。

知美の表情を見た瞬間、恭子のことを知らされたのだと感じた拓は、助手席のドアを開けて手招きした。

「早く乗れ。これから病院へ向かうんだ」

「ありがとうございます」

知美は、どうにか息を整え、やつとの思いでそれだけ言つと助手席に飛び乗つた。

優子のメール作戦は効果的だった。

恭子の携帯電話に登録しているすべてのメールアドレスに、恭子が入院したことと、入院先の病院名を一斉送信したのだ。

ひつきりなしに帰つてくる返信メールの対応に優子は一苦労だつた。日頃、メールなどやり慣れていない優子にとっては相当面倒くさい仕事だつた。

見かねた悠斗が、優子から携帯電話を取り上げた。

「俺がやつてあげるから、優子ちゃんも出かける支度をした方がいいよ。行き先が病院だといつても、パジャマのまま出掛けるつもりじゃないだろう?」

「悠斗」「一チありがとうございました。じゃあ、着替えるから出でてくれる?」

「ああ! わかつたよ」

早紀はコンビニで、弁当や雑誌、スポーツ新聞などを買って病院に戻ると、救急病棟のエレベーターホールで田中美由紀や陸上部のメンバーに会つた。

「あら? どうしたの? 誰かのお見舞いかしら?」

その声に振り向いた美由紀は、血相を変えて早紀に駆け寄つた。

「あばさん、恭子はどうなんですか? 手術だなんて・・・」

他のメンバーも心配そうにしている。

「あら、恭子のお見舞いに来てくれたの? まだ、手術が終わるまで、けつこうかかるわよ。でも、あなた達が来てくれた、退屈せずに済みそうね」

早紀の様子が意外と明るいので、美由紀たちは少し安心した。

「ところで、どうして知ってるの?」

「優子ちゃんが恭子の携帯を使ってみんなにメールしてみますから、これからもつとにぎやかになりますよ」

「まあ! 困ったわね。待合室に入りきれるかしら・・・」

悠斗は大変な役目を引き受けたと後悔していた。

返信メールを打ち込んでいるそばから、次々とメールが返ってくる。悠斗も自分が知っている相手には直接電話して状況を報告したが、陸上関係の知り合いがこんなに多いとは思いもしなかつた。

さすがに、日本記録を塗り替えるくらいの大物になると、知り合いの数も半端じやないし、日本中のあちこちからメールが入つてくる。悠斗はたまりかねて、『詳しいことが分かり次第、こちらからまたご連絡いたしますのでしばらくの間メールの返信はご遠慮ください。緊急の連絡が取れなくなると本人及び、本人の家族に迷惑が

かかりますのでよろしくお願ひします』といつ内容のメールを一斉

送信した。

しばらくすると、メールは来なくなつた。

「準備はできたか?」

悠斗は高橋や浩人たちに向つて声をかけた。

「いいよ」

「じゃあ、出かけるぞ」

東洋電機の寮は高速のインターからほど近い場所にある。

拓は迷わず高速道路へ車をすすめた。

土曜日だといふこともあって、反対車線は既に切れ目なく車の列ができる。

都内へ向かう拓たちは、そんな風景には目もくれず、ひたすら道路の先を見据えている。

「悪戯だつたらいいのに・・・」

知美がポツリとつぶやいた。

「運命なんだ」

「えつ？」

知美は拓の横顔を見つめながら、拓はまっすぐに前を向いたままそれ以上口を開こうとはしなかった。

「運命？」

この二人の間には何か特別なものがあるのだろう・・・

初めて出会ったときからそんな感じを持っていた知美は、もしかしたら拓はこうなることが分かっていたのかもしれないと思った。

悠斗達が病院に着いた時には陸上部の連中や町内の見慣れた顔が待合室を占領していた。

優子と浩人は両親の顔を見つけるとそばに駆け寄った。

「お姉ちゃんは大丈夫？」

浩人が心配そうに早紀に尋ねた。

「大丈夫だから心配しないで」

優子はソファに腰掛けている孝幸の隣に座った。

「主人公はそう簡単には死ないのよ」

「主人公？」

孝幸は優子の顔を見た。

「そう！お姉ちゃんは主人公なの。私たちがいるのは物語の中なのよ。ある少女が色々な苦難を乗り越えて陸上競技で日本一になる。そんな物語の主人公がお姉ちゃんなの。だから、きっと大丈夫。手術も無事に成功して、すぐによくなるわ」

孝幸は驚いた。

ちょっと今まで子供だと思つていた優子が、自分を励ましているのだ。

それにもしても、何とも不思議な発想をするものだ。

「・・・困るの」

「えつ？」

「やうじやないと困るのよ！」

そう言つと優子は立ち上がつた。

「主人公には素晴らしい家族がいるの。きれいでやさしいお母さん、一流の建築エンジニアのお父さん、将来を有望視されているサッカー選手の弟、日本記録保持者のスプリンターが恋人で、そして売れつ子女流作家の妹。お姉ちゃんの知名度を利用して私も世に出るつもりなのに・・・」

孝幸はさらに驚いた。

「優子？おまえ・・・」

しかし孝幸はそれ以上話し掛けるのをやめることにした。

立ち上がつた優子はしつかりとこぶしを握り締めて震えている。目からは涙が溢れてそのこぶしに降り注いでいる。

そして、優子は孝幸に抱きついた。

「大丈夫だよねえ？お姉ちゃん、大丈夫だよねえ？」

つこうつきまで、まるで他人事のように事務的に振る舞つていた優

子が廻りを気にするそぶりさえ見せずに泣き崩れた。

その声は鼻水をする音にかき消されそうなほどか細い声だった。

孝幸はギュッと優子の体を抱きしめた。

「大丈夫だよ。主人公は最強さ！」

都内の環状線に入ると少し混んできた。

知美が横でイライラしているのが手に取るよう分かる。

拓はそんな知美には目もくれず、高速道路を降りて一般道に入った。

「あと10分で着くよ」

知美は拓にそう言われて、イライラしていた自分を見透かされたことに気がついた。

「まだまだだな」

「何がだい？」

「こんなに気持ちが外に出ちゃうんじゃ、選手としては失格だね」「そんなことはないさー。今はレースをしているわけじゃない。

俺達は走る口ボットじゃないんだ。人を思いやる心があるからこそ記録を創れる。そう思わないか？」

「はい！ その通りだと思います。」

拓の車が交差点に差し掛かる直前に、待つてましたとばかりに信号が青に変わった。

拓は左ウインカーを点滅させると、『聖都大学病院前』の交差点を左折した。

すぐに駐車場の入口が見えてきた。

警備員の指示に従い、車を止めるや否や知美が飛び出していった。

「拓さん、先に行つてますよ」

拓は手を振つて“わかった”と合図すると、ドアをロックすると隣に停まっているひときわ目立つキャンピングカーを見てニヤリと笑つた。

“仁美命”と書かれている。

ロビーへ入ると、知美がキヨロキヨロしながら立ちすくんでいる。

「まだこんなところにいたのか？」

拓に声を掛けられると泣きそうな声でさがりついた。

「こんな大きな病院じゃ絶対に迷子になるわよ。 いつたいどこへ

行けばいいのかさっぱり分からないよ」

拓は正面にある総合案内板を確認して、エレベーターホールの方へ歩いて行つた。

知美も拓の服の裾を掴んでついて行つた。

待合室に到着すると、そこには暮の空港の出発ロビーのようになっていた返していた。

拓の姿に気が付いた悠斗がすぐに駆け寄つてきた。

「思つたより早かつたじゃないか」

「ああ！ 割と空いてたからな。 それより、いつからそういう仲なんだ？」

「そういう仲つて？」

「車を見たよ」

「ああ！ あれか！ あれは、その・・・『仁美のヤツ』が勝手に・・・」

「私が勝手にどうしたって？」

「仁美が後から悠斗の頭をひつぱたいた。」

「拓さん、お久しぶりです」

横にいる知美に眼をやつて、不振の眼差しを拓に向かえた。

今度は悠斗が『仁美の頭を軽く叩いて言つた。

「バカな想像をするんじゃない。 この子は恭子ちゃんのライバルでもあり親友でもあり、今は大将と同じ東洋電機の陸上部に所属している・・・」

「高部知美！」

悠斗が言うより先に仁美が叫んだ。

「思い出したわ。 恭子の次に早かつた人ね」

知美は苦笑いしながら頷いた。

「恭子の様子はどうなの？」

「今、手術中。 タ方までかかるらしいわ。」

「タ方？ そんな大手術なの？」

「ええ、何しろ脳ですからね。 でも命には別状ないみたいだよ」

「後遺症は残らないのかしら？」

「そこまで詳しいことは聞いてないわ。 だつて、聞けないでしょう？」

仁美はそう言って、恭子の家族の方を指した。

恭子は手術中に夢を見ていた。

首に風呂敷のマントをくくりつけて、ジャングルジムの天辺で腕を組み、遠くを見つめている男の子の姿。 体も大きく力も強い。この幼稚園の、いわゆる番長格に違いない。 それでいて、思いやりがあり、年中、年少のチビ助たちからは絶大なる人気があるようだ。

風呂敷のマントは今時珍しいスタイルだが、本人はそれが気に入っているらしい。

お昼寝開けのお迎えまでの間はいつも、こうやってジャングルジムの上で迎えが来るまでの間の時間を過ごしているのだらう。

「タクちゃん、危ないから降りてらっしゃい。」

えつ？ タク？ 拓さんなの？

担任の先生が声を掛けても知らぬ顔をして遠くを見つめている。

その男の子が見ているのは日が沈む西の方角だ。

「タイショウ、何を見るの？」

「の子分らしい男の子がジャングルジムに登ってきた。

「神様って本当にいると思つか？」

「神様？」

「そうわ。ボクは絶対いると思ひ。」

そして、ある日、その男の子が近所の公園で遊んでいたと、白いヒゲを生やしたおじいさんが現れてこう言った。

「西崎拓、良く聞け。今日、お田様が沈む方角にある町で一人の女の子が産まれる。15年後にお前はそのこと仲良くなるじゃね。そしてその女の子はそれから1年後に歩けなくなってしまう。お前は決してその子を見捨ててはいかんぞ。そして、お前が支えてやればきっと奇跡が起るじゃね。」

その男の子は、逃げたくても動くことが出来ず、そのおじいさんのは話をずっと聞いていた。

体が動くようになつて、ハツと思つた瞬間にま、既に、おじいさんは消えていた。

そして、布団から顔を出したのは大きくなつた男の子の姿だつた。それは、まぎれもなく拓だつた。

次の瞬間、“オギヤー”元気な産声とともに、一つの新しい命がこの世に誕生した。

孝幸はその瞬間、腰を抜かして、その場にへたり込んだ。

えっ？ なに？ 今度はお父さん？ あの赤ちゃんつて・・・

医師に手を差し出され、やつとの思いで立ち上がると、その場にいたすべての人たちから祝福されていた。

「おめでとうございます。女の子ですよ。」

「主人よく頑張りましたねえ。でも、いちばんのお手柄は奥さんですからね。」

孝幸は、早紀に歩み寄りながらこの言葉をかけた。

「よく頑張ったね。君は本当に偉いよ。それに比べたら、ボクなんか…」

孝幸の目からは、見る見るしおりに涙がこぼれ落ちてきた。

その涙が、早紀のほっぺたに落ちた。

早紀はそれを舌でなめて「しゃっぱいよ。」と孝幸を見つめた。

「ねえ、疲れたから、少し休むね。」

そいつて早紀は眼を閉じた。

「うん。うん。ゆっくり休めばいいよ。」

お母さん・・・

なんだか不思議。

今のは私が生まれた時のことみたいね。

きっと、今頃、お父さんやお母さんがその時のことを思い出してこ

るのかもね。

そうか！ 拓さんはその時から知っていたんだわ。

初めて拓さんに会った時、昔から知っているような気がしたのはこのことだつたのね。

でも、待って・・・ といつとはどういふこと？ 私、歩けなくなるの？ そんな・・・ だけど、拓さんがそれをくれるのよね。

そして奇蹟が起くる。奇蹟ってどんなことかしら？

今度はその映像が浮かんでくるのかしら・・・

恭子は夢の中でそんなことを感じていたが、やがて夢の中の恭子は意識を失い深い眠りに落ちて行つた。

再び田が覚めると、そこには病院の病室のようだった。

意識がまだはつきりしない。

体も動かない。

頭の方が何だか窮屈に感じた。

眼だけで廻りを見ると、ベッドの脇のソファで孝幸が横になつている。

お父さん・・・

声になつたのかどうかも分からぬいが、そう呟いてみた。

すると、孝幸が飛び起きた。

「恭子！ 気が付いたのか？ お父さんのことが分かるんだな」

恭子の顔を覗きこむ孝幸の目から大粒の涙が恭子のほほに落ちていた。

その涙は頬を伝って恭子の口元へ流れていった。

「おとうさん、ショッぱいよ」

「もうか、ショッぱいか。よく頑張つたな」

あれっ？ これって・・・

そうだ。恭子が生まれた時と同じだね

「私が生まれた時と同じだね」
恭子がそういうと、孝幸は恭子が生まれた時のことを思い出した。
確かにこんなことがあった。

もつとも、その時ベッドにいたのは早紀だったのだが。

「どうしてそんなこと知ってるんだ？」

「うん、なんとなくそんな気がした。ねえ、お母さんは？」

「優子や浩人の世話もあるし、ここには完全看護だから付き添いで一緒に泊まることができないんだ。だから無理言つてお父さんだけ何とか泊めて貰つたんだ」

孝幸は、恭子に意識障害が出ていないようなので安心した。
そこへ、担当の看護師が様子を見にやってきた。

「あら、気がつかれたようですね。今、先生を呼んできますね」

孝幸は看護師に深々と頭を下げた。

「ねえ、お父さん。私、歩けなくなつたの？」

孝幸は一瞬、ギョッとした。

恭子は病気のことを知らないはずなのに・・・それに、生まれた

時のことも知つていた。

手術を受けている間に、いろんな情報が意識の中に入り出しあったようだ。

人間の脳には無限の可能性があるらしいから、決して不思議なことではないのだろうが。

それよりも、恭子が意外と冷静なのに孝幸は驚いていた。

そして、今の恭子の姿を見たら父親である孝幸でさえ、不安を隠す自信はなかった。

「大丈夫だよ。まあ、大きな手術をしたんだ。少し時間がかかるかもしれないけれど、きっと歩けるようになるわ」

今はただ、そう言つしかない。

手術が終わつたばかりなので仕方ないのだが、まだ頭から管が差しこまれている。

鼻からも同じような管が差し込まれていて、手からは点滴の管が。そして、見たこともない機械がベッドの周りに並べられていて例外なく恭子の体につながっている。

早紀は恭子のこんな姿を見ていられないと言つた。

それは孝幸も同じだった。

恭子が目を覚ましたときに知らない場所で独りぼっちだつたらきっと不安になるに違いない。

最初だけでも傍に居てやりたい。

孝幸はそう思ったからこそ、病院に無理を言つて泊めてもうつることにした。

明日になれば早紀や子供たちも気持ちの整理ができるといひつつ。

19・涙の卒業式

その日の夜、拓と知美は恭子の家に泊めてもらつことになつた。早紀が戻ってきたので、高橋は自分の家に帰つた。夕食は支度する時間もなかつたので帰りにみんなで“ばれいしょ”に寄つて済ませた。

仁美から一通りの報告を受けたマスターは早紀を気遣つて声をかけた。

「大変だつたねえ。俺も一時はどうなるのか心配だつたが仁美から事情をきいて一安心したよ。孝幸君は病院に泊つてるんだつて？困つたことがあつたらいつでも言つてくれよ」

「どうもありがとうございます。仁美ちゃんにはいろいろしてもらつて本当に助かります」

「な～に、お互いまよ。今日は俺がご馳走するから腹いっぱい食べていいってくれ」

三浦家に着くと、浩人は拓にゲームをやろうとねだつた。拓は浩人に付き合つて、ゲームをやつたが、まったく相手にならなかつた。

「なんだよ。拓さん弱つちいな

それを見ていた知美が拓からコントローラーを奪い取つた。

「浩人君、今度はお姉ちゃんが相手よ」

知美はそう言ってゲームを始めた。

なかなかいい勝負だつたが、かろうじて知美が勝つた。

「へへ、どんなもんだい！」

「お姉ちゃん、すげえ！ ねえ、もう一回やるや」

「そうか？ それじゃあ、3回もわってワンと言こな

「え〜？ なにそれ？」

子供相手に威張つている知美を見ていると、拓は少し気持ちが落ち着いた。

わかつていたことだとは言え、いつの形で運命の日が訪れるとは想像していなかつた。

子供のころ夢に出てきた老人は、拓が支えになることで“奇跡”が起こると言つた。

果たして、自分がどう支えていけばいいのか正直不安だつた。

恭子は気持ちの強い子だから、これから前向きに生きていこうだらう。

だが、この事実はあまりにも残酷だ。

拓も“奇跡”を信じて支えていこうと固く誓つた。

浩人と知美はひたすらゲームに夢中になつてゐる。

優子は、自分の部屋で勉強でもしているようだつた。

次の日が日曜日だとはいゝ、もつ、12時を回りうとしていた。

「浩人、もうそろそろ寝なさい。明日は朝から病院に行くのよ

早紀がそう言い聞かせているといふに電話が鳴つた。

早紀は受話器を取り、額きながら目頭を押さえている。

電話は孝幸からだつた。

受話器を置いた早紀をみんなが注目している。

優子も電話の音に気が付き部屋から出でてきた。

「お姉ちゃんが気が付いたつて

「本当？」

みんなが一斉に聞き返した。

「ええ、本当よ」

その瞬間、三浦家は歓声の嵐に巻き込まれた。

「寝てる場合じゃないわ。みんなに知らせなきやー。」

優子はそう言つて部屋から恭子の携帯電話を持つてきた。

「貸して！」

知美がそれを取り上げて優子にワインクした。

「私のほうが早くできるわ。私に任せて早く寝なさい」

「ありがとうございます。それじゃあ、お言葉に甘えて」

優子はそう言つて部屋に戻つた。

その顔からは喜びの笑みが溢れていた。

「さあ、浩人君も！」

「わかったよ」

子供たちがそれぞれの部屋に戻ると、早紀は冷蔵庫からビールを出してきてダイニングのテーブルに置いた。

グラスを一つ取り出すと、ひとつを拓に渡した。

「お祝いには早いけど、乾杯しましょう。今日は本当にありがとうございます」

早紀と拓がテーブル席に着くと、知美も寄ってきて羨ましそうに見ている。

「そうね！ 高部さんもありがと」

早紀は知美に温かい紅茶を出した。

知美が預かった恭子の携帯電話には、ひつきりなしに返信のメールが届いていた。

「こりゃあ、今夜は眠れないかも」

早紀と拓は笑いながらビールグラスを口にした。

手術後の経過は順調だった。

一週間もすると、恭子は一般病室に移され、車いすで病院内を自由に行き来することができるようになつていた。

しかし、左手と左足はまだほとんど動かすことが出なかつた。

からうじて、こぶしを握つたり足首を動かすのがやつとだつた。

物をつかんだり、自力で立つにはもう少し時間が必要だった。

「焦らないで、少しずつリハビリしていこうな」

手術を担当してくれた香坂は、手術後も恭子のことを気にかけてくれて、時折、様子を見に来てくれた。

恭子も暇さえあれば、なるべく左手と左足を動かそうと意識している。

恭子が移された一般病室は6人部屋で、脳梗塞やくも膜下出血などで運ばれてきた年配の患者が多くた。

恭子の周りにはひっきりなしに誰かが見舞いに来るのに対して、他の患者のところにはほとんど見舞いに来る者がいなかつた。

早紀や孝幸は、恭子の見舞いがあまりにも多いので周りの患者さんに迷惑がかかっているのではないかと心配になつたが、仁美や悠斗をはじめ、陸上部の連中も他の患者さんに挨拶をしたり、話し相手になつてあげたりと、歓迎されていると知り安心した。

何より、恭子はこのフロアのアイドル的な存在になつていた。

一月経つ頃から、本格的なリハビリが始まった。

すると、車いすへの乗り降りから、トイレに行つたり、入浴したり、日常生活で必要な動作は一通りこなせるようになつていつた。

入院したせいで高校の受験はできなかつたが、香坂の計らいで、卒業式には車いすで出席してよいと許しが出た。

卒業式の前日、早紀は病院に恭子の制服を持ってきた。

恭子はそれをカーテンレールに掛けめりうと、ずっと眺めていた。

「おや、学校に行くのかい？」

隣のベッドの高崎さんが声をかけた。

高崎さんは一週間ほど前にくも膜下出血でこの病院に運ばれてきた。

63歳のおばあちゃんだ。

「はい、明日卒業式なんですね」

「そうかい。それはおめでとわ。」
「もう早く卒業できるといいね」

そう言つて一之瀬「コソ笑つてくれた。

卒業式の当日、拓が久しぶりに病院に来た。

「あれっ？ 拓さんどうしたんですか？」

「今日は会社に休みをもらつた」

「まさか、卒業式に来るつもりじゃないよね？」

「ああ、そのままかわ！ 野村先生から連絡をもらつてね。君を

学校まで送つていいく大役を仰せつかつたのさ」

「いやだ！ 恥ずかしい」

「これくらいで恥ずかしがつてちや、学校に着いたら大変だぞ」

「あら？ どうして？」

「あとで、高部も来るし、君のファンがみんな学校に押し寄せるらしいぞ」

「まあ、たいへん！」

「さあ、早く支度をしな。ボクは外で待つてるから」

拓はそう言つと、病室を後にした。

恭子はカーテンを閉めて久しぶりに制服に着替えた。

カーテンを開けて車いすに移ると、病室の他の患者さんたちが紙吹雪で送り出してくれた。

「素敵な王子様がいるんだね」

高崎さんが耳元でそう言つていつものよつて一之瀬「コソ笑つてくれた。車いすで廊下に出ると、香坂先生と担当の看護師さんがいた。

「卒業おめでとう」

香坂先生が制服の胸ポケットに赤いバラの花を一輪差してくれた。

エレベーターが来ると、一人は恭子を見送り、看護師さんは病室へ検診に行つた。

エレベーターの扉が閉まる直前、看護師さんの怒鳴り声が聞こえた。

「あなたたち、どういふこと？ こんなに散らかして・・・」

通用口から外に出ると、拓が来るまで待っていた。

恭子の姿に気が付くと、車を降りて助手席のドアを開けた。

「本当に王子様みたい」

恭子はそう思つてクスッと笑つた。

恭子が助手席乗り込むと、拓は車いすをたたんで後部座席に積み込んだ。

すると、「痛つ」後部座席から声がした。

恭子がのぞきこむと、高部知美がかがみこんで隠れていた。

「高部さん！」

「うわー！ 見つかっちゃったじゃないの」

拓は運転席に乗り込むと、知美に「悪い！」と詫びて、恭子にシートベルトを掛けた。

「チヨッ！ 見つかってたんじゃしょうがない」

知美はそう言つて堂々と座席に座りなおした。

「恭子！ 卒業おめでとう」

「高部さんも卒業式じゃないの？」

「埼玉は昨日だったのよ。 今日から私も正式に東洋電機の陸上部よ。 恭子も早くおいでよ。 待つてるからね。 何といつても日本で私の相手になるのは恭子だけなんだから。」

「じゃあ、行くぞ」

そう言つと拓は車を走らせた。

学校に着くと、仁美や陸上部の仲間が恭子を出迎えてくれた。

拓と知美とはひとまず別れて、仁美が車いすを押して教室に向かつた。

教室に着くと、担任の野村をはじめ、クラスメートたちが拍手で迎えてくれた。

一年で陸上部の後輩でもある宮下麻衣子が胸に花をつけてくれた。

「先輩、卒業おめでとうございます。一中陸上部は私たちがしっかり引き継ぎますから安心してください。先輩と一緒に走れて本当に良かったです」

麻衣子はそう言いながら涙を流している。

「大丈夫！あなたたちなら安心して任せられるわ」

そう言って恭子は舞子に手を差し伸べた。

麻衣子は両手で恭子の右手をしつかりと握りしめた。

「さあ、そろそろ式が始まるぞ」

野村が叫んで恭子たちは廊下に整列した。

恭子の車いすは引き続き仁美が押して行った。

体育館に入ると、在校生や保護者からより一層大きな拍手が沸き起こった。

恭子自身は自覚していないが、恭子は学校の大スターであり、まさに時の人なのだ。

全卒業生が入場しても、拍手は鳴りやまなかつた。

副校长の「静粛に」という声でようやく場内は静まり返つた。

そして厳かに式が始まつた。

校長や来賓の祝辞が終わり、いよいよ卒業証書授与式が始まる。

授与式が始まると、舞台が舞台から降ろされた。

車いすの恭子の合わせての演出だつた。

こうすることについては、卒業生はじめ、在校生、教職員、全保護者が同意したことだと仁美が恭子に耳打ちした。

授与式は順調に進んで行き、仁美の番になつた。

すると、仁美より先に恭子の名前が呼ばれた。

恭子はハツとしたが、仁美は「いいの、いいの」そつと、恭子の車いすを押して演台の前まで行つた。

校長が卒業証書を恭子に手渡そうと前かがみになる。

恭子は意を決して立ちあがろうとした。

最初は、車いすに尻もちをついたが、一度目の挑戦で、見事に立ち上がることができた。

校長は笑顔で証書を手渡した。

恭子はそれをしっかりと両手で受け取った。

会場にいたすべての人気が立ち上がって拍手を送った。

恭子は、車いすに座ると、向きをかえて、もう一度立ち上がり、深々と頭を下げた。

恭子の授与が終わると、次に仁美の名前が呼ばれた。

出席番号順に並ぶと、たまたま、野々村仁美の次が三浦恭子だった。

仁美の提案で順番を入れ替えてもらつたのだ。

仁美は自分の卒業証書を受け取ると、再び、恭子の車いすを押して席に戻ってきた。

拓に知美、それに悠斗は保護者席で恭子の晴れ舞台を守つた。
「こんな感動した卒業式は初めてだわ。自分の卒業式より感極まつて、なんだか・・・」

そう口ずさんだ知美は、それ以上まともに言葉を発することができなかつた。

悠斗の目にもうつすらと涙があふれている。

拓は、涙こそ見せなかつたものの、恭子の姿をしつかり心に受け止めた。

孝幸と早紀は、万感の思いで恭子の姿を見ていた。

リハビリをやつている時も、杖なしでは立ち上がるといふをまだ見たことがなかつたのに、卒業証書を受け取るときに自分の足で立ち上がつたのだ。

これ以上うれしいことが他にあろうか。

孝幸は、その後、流れる涙をこまかすために、ずっと天井を見つめていた。

早紀は、ハンカチで涙をぬぐいながら、肩を震わせている。

隣の席の“ばれいしょ”のマスターと女将、来賓席の高橋も、担任の野村も。

みんなの目に涙があふれている。

最後に卒業生の答辞となつた。

進行役の副校长が卒業生代表として告げた名前は、三浦恭子だつた。

「そんな・・・わたし? 何の準備もしていないわ」

仁美がニッコリ笑つて恭子を促す。

「いいの、いいの! 何も言わなくていいのよ。前に行つて礼だけしてくれればいいじゃない。それで全部伝わるわ」

仁美は再び恭子の車いすを押して、舞台の脇まで行つた。

「今度は立たなくていいからね」

恭子はうつむいて少し考えた。

そして顔を上げるとハンドマイクを手にした。

「みなさん、今日は私たち卒業生のためにお忙しいとじひひ足を運んでくださつて、本当にありがとうございます。三年前、この中学校に入学して何も分からぬ私たちをずっと見守つてくれた皆さんや、いろんなことをやさしく教えてくれた先輩たち、どんな悪さをしても愛情を持つて接してくださつた先生方、そして、何よりも、どんな時も、励まし、支えてくださつたお父さん、お母さん。皆さんの優しさをたくさんもらつて、今日私たちは卒業の日を迎えることができました。今、こうしてこの場にいると、三年間はあつという間でしたが、その中には一生忘れることのできない想い出が数えきれないほどあることを改めて実感しています。みんなで力を合わせて競つた運動会、はじめて遠くまで歩いた遠足、初めて親と離れて一泊した林間学校、そして、修学旅行や文化祭。私たちは国語や数学といった勉強以外に人と人のつながり、みんなで協力して何かをやり遂げることの素晴らしさを知ることができました。

私たちが中学校生活の三年間で経験したことは、これがの人生においてかけがえのない財産になるのだと思います。私はクラブ活動を通じてもいろんな経験をさせていただきました。第一中学校の代表として全国大会に行くこともできました。そこでいい成績

を収めることができたのも顧問の先生をはじめ、チームメイトや地域で応援してくださった方々のおかげだと感謝しています。そして、よきライバルにも恵まれ、日本中の同じ競技に携わる皆さんと親交を深めることもできました。そして、そのことで天狗になり、思いやりを忘れてしまうことのないよう、励んで行こうと思います。

卒業を間近に控えたある日、私は脳静脈奇形という病気が原因で脳出血を起こし入院しなければならなくなりました。夜中に手術を行つてくれて先生や、24時間体制で見守つてくれた看護師さんをはじめ、多くの皆さんが私の命を救おうと手を尽くしてくださいました。病気の後遺症で、今はまだ、左手と左足が自由に動かすことができません。私は、せっかく助けてもらつた命に対しても、手や足が不自由だからといって、ふてくされたり落ち込んだりしていたのでは、助けてくださった皆さんや、治ることを信じて助けてくださる皆さんに失礼だと考え、正々堂々と生きていこうと思います。在校生に皆さん、皆さんも、これから学校生活や人生において、いろんな困難にぶつかるかもしれません。だけど、私たちは決して一人ではないということを心に刻んでください。そして、私たちを助けてくれる大勢の人たちの恩に応えるためにも、私たち自身がだれかの助けになれるような存在になれるようしっかり学んでいかなければならぬと思います。どうか、そのことを忘れずにお私たちの意思を引き継いでください。最後に、皆さんとともに第一中学校を見守つていくことを誓い、私の答辞の挨拶とさせていただきます。卒業生代表、三年一組、三浦恭子」

恭子の答辞が終わると、みんな立ち上がり、拍手で称えた。そして、恭子は再び立ち上がり、礼をしたが、今度はよろけて倒れそうになつた。

そばにいた仁美が、すかさず恭子を支えて車いすに座らせた。

「大丈夫？」

「ありがとう」

「それにも、恭子、すじこよ。急に振られてよくあれだけの

ことをじやべれるわね。 私感動しちゃつたわ

「うん、私も。 自分でも不思議なんだけど、自然に言葉がわいて
きたの。 なんだか自分が喋ってるんじゃないみたいに」

無事にすべての式事が終了し、卒業生退場する時は惜しみない拍
手がいつまでも鳴り響いていた。

卒業式が終わって、静まり返った校庭に恭子と拓の姿があった。

「ねえ、拓さん、お願ひがあるの」

車いすから拓を見上げて恭子が口にした。

「なんだい？　まさか、校庭を走るなんて言つたんじゃないだろ？」「くへっ、本当はそうしたいけれど、そんなこと今はできないことくらい分かっているわ」

そう言つた恭子の瞳には少しだけ悲しそうだったが、すぐに照れくさそうにほほ笑んだ顔にかき消された。

「あのね、走らなくてもいいから、自分の足で、もう一度ここを歩いてみたいの。だから、肩を貸してもらえないかしり」

「お安い御用だよ。でも、大丈夫かい？」

「うん。辛くなつたら車いすに戻るわ」

拓は恭子の右側に回つて、恭子の右腕を自分の肩に回した。

恭子は右腕に力を込めて立ち上ると、ゆっくり歩き始めた。

そして、三年間、練習してきた校庭の感触をしつかり両足で確かめた。

何度も立ち止まりながら、ゆっくりと進んだ。

幅跳びを勧められた砂場や何度もタイムを計つた直線コース、リレーの練習でバトンをつないだトラック・・・数えきれない想い出が鮮やかに甦つてくる。

だんだん感覚がなくなつていく左足を何とかかばいながら歩を進めしていく。

何とか最後まで歩いて車いすに戻つてくると、4人の家族が出迎え

てくれた。

車いすに座ると、両足が疲労で痙攣していた。

「頑張ったね」

母親の早紀がそう言って、少し細くなつた足をマッサージしてくれた。

「さあ、今日はみんなで馳走を食べに行こう」

孝幸がそう言い、みんなで校庭を後にしてた。

孝幸は拓も誘つたが、拓は家族水入らずで楽しんだ方がいいと言い、三浦家と別れて“ばれいしょ”へ向かつた。

三浦家は、浩人のリクエストで和風のファミリーレストランで恭子の卒業を祝つて食事をした。

浩人は、ここに茶わん蒸しと天ぷらが大好きだつた。

「浩人つたら、今日はお姉ちゃん卒業祝いなのに・・・」

そう言って優子は浩人の頭をポンとなでた。

「まあ、私もここの大好きだけど、お姉ちゃんは焼き肉とかの方が良かつたんじゃないの」

「そうね！ 本当は焼き肉が食べたかったなあ・・・」

恭子がそう言つと、浩人は申し訳なさそうに身をすくめ、早紀に助けを求めた。

「うそ、うそ！ 私もここ好き。 おもしも食べられるし、特に茶

わん蒸しは大好物よ」

浩人は安心して、テーブルに広げられたメニューに飛びついた。

拓が“ばれいしょ”に顔を出すと、知美が悠斗たちと一緒に待つていた。

「恭子ちゃんはどうした？」

「悠斗が聞いた。」

「ああ、今日は卒業祝いだから、家族で食事だ。 そして、そのま

ま病院に戻るそうだ」

「そりか・・・それにしてもよかつたな」

悠斗は拓に気を使いながら答えると、ビールを差し出した。

「ああ・・・」

拓はグラスを差し出し、悠斗からビールを注いでもらつと、仁美と知美もジューースの入ったグラスを掲げた。

「仁美ちゃん卒業おめでとう!」

知美がそう言つと、仁美はグラスを置いて、知美的手を握りしめた。

「高部さん、ありがとうー。恭子のことで胸がいっぱいだったから忘れていたけど、私も卒業したのよね」

悠斗は、一瞬、氣まずそうな顔をしたがすぐに取り繕つように切り出した。

「あたりまえじゃないか! 僕たちは最初から仁美の卒業祝いのつもりでここに来ているんだからな」

「じゃあ、改めて、仁美ちゃんの卒業を祝して

拓が音頭をと取り、もう一度みんなで乾杯した。

「乾杯!」

拓は助手席に知美を乗せて高速道路を走っていた。

「恭子、また走れるようになるかしら?」

知美の問いに拓はしばらく黙つていた。

「ランナーとしてはたぶん無理だろうな・・・」

フロントガラスの先を見つめたままそう答える拓の横顔が悲しげで、恭子はすぐに目をそらした。

「そりか・・・でも、私は信じてるよ。また恭子と一緒に走れるつて」

「そりだな。 きっとやつなるわ」

病院に戻った恭子を待っていたのは、『卒業おめでとう』と書かれた横断幕だった。

執刀医の香坂や担当の看護師たち、それに、高崎さんをはじめとする病室の同居人たちが恭子の卒業を祝つてこしらえただつた。消灯までには、少し時間があつたので、みんなで談話室に行つた。そこには、同じフロアの患者や、その家族が恭子の帰りを待つてくれた。

恭子は感激のあまり、こぼれる涙を抑えることができなかつた。孝幸と早紀のもにも涙が溢れていた。

4月に入ると、恭子はリハビリ病棟に移された。

感覚が鈍い左足は足首の動きが良くないため、自分では足の裏で立つたつもりでも、つま先しか着いておらず、転んでしまうことが良くあつたので、足首を固定するための樹脂製の保護器具を作つてもらつた。

恭子の足の形に合わせたオーダーメイドだ。

それと同時に、靴も保護器具をしたまゝはける、特注品を作つてもらつた。

退院後の、社会復帰のために2週間に一度は2泊の帰宅が許されるようになつた。

最初は孝幸が車で送り迎えをしていたが、車いすがなくとも歩けるまでに回復すると、自分でバスや電車に乗つて行き来するよう指導され、最初こそ、早紀が付き添つてきただが、その後は一人で帰宅し、病院に戻ることができるようになった。

帰宅中は、極力、仁美や悠斗たちと買い物や食事に出かけ、外に出ることに慣れる努力をした。

5月に入ると、杖がなくても歩けるまでに回復した。

だが、手の方は握力が戻らず、食事の時も茶碗を持つことさえ難し

い状態だつた。

しかし、日常の生活はほぼ一人でできるようになり、「ゴールデンウイークの連休明けには退院できることになつた。

孝幸は仕事を休んで迎えに行くと言つたが、恭子は一人で帰れるからと孝幸の申し出を断つた。

結局、孝幸は、恭子の退院の日も出勤したのだが、高橋に客先へ挨拶に行くと連れ出され、そのまま家まで一緒に帰つて来たのだった。二人が帰つて来た時には、既に恭子は家に戻つていた。

「恭子！ 大丈夫だつたか？ 一人で帰つて來たのか？ 疲れてないか？」

孝幸と高橋は終えをそろえて恭子に尋ねてきた。

「そんなにいつぺんに聞かれても答えられないよ！」

恭子は笑いながら言い返し、言葉を続けた。

「それにしても、お父さんとオジさんつて、双子みたいに気が合うよね」

そう言われて、孝幸と高橋は顔を見合させた。
そして、すぐにそっぽを向いた。

「誰がこんなと氣が合うもんか！」

またしても二人同時に同じことを口にした。

恭子が思わず笑つてしまつと、一人も吹き出してしまつた。

「こりやあ、まいつたなあ」

「さあ、漫才はそれくらいにして席について下さいな」
早紀が料理を運びながらやつて来て二人をたしなめた。

退院した後も、週に一度は通院してリハビリを受けたが、恭子は近所のジムに通いたいと孝幸に頼み込んだ。
もう一度あのスタートラインに立ちたい。
ゴールする瞬間の風を感じたい。
恭子は決してあきらめていなかつた。

ジムに通うことにより、リハビリとは違ったメニューを取り入れ、入院していた間に衰えてしまった走るための体を取り戻そうと思ったのだ。

孝幸は、時間さえあれば左手、左足を動かそうともがいでいる恭子の姿を見て、胸が締め付けられるようだつた。

孝幸は、真剣に訴える恭子の熱意に負けてジムへ通うことを許した。

拓は、東洋電機の寮を出ようと決心した。

リハビリを続ける恭子のそばで力になりたいと考えたからだ。

しかし、実家の戻るのは何かと気を使うので、手ごろなマンションを購入することにした。

練習が休みの日に、実家へ戻り、駅前の不動産業者に手ごろな物件がないか相談に行つた。

2LDKのちょうどおあつらえ向きの物件を紹介してもらい、その場で、手付金を支払い購入の手続きを行つた。

翌週には、寮と実家から必要最小限の荷物を運び、会社に退寮の旨を伝た。

会社や練習に通うのは大変だが、恭子のことを考へると、さほど苦にもならなかつた。

ジムのトレーナー沢村は悠斗の知り合いで、スポーツ医学の知識もあり、恭子のリハビリの様子を見ながら、メニュー や食事にまでアドバイスをしてくれた。

通り始めて1ヶ月もすると、足首を固定するための保護器具を使用しなくとも、通常の歩行速度で歩けるようになつた。

手の握力もミカソくらいなら握りしぶすことができるくらいまで回復した。

ただし、走ることまでは到底無理だと思われた。

「恭子ちゃん、調子はどうだい？」

一休みしている恭子に声を掛けたのはトレーナーの沢村だった。

「はい、おかげさまでだいぶ回復しましたけど、ここから先がなかなか難しんですね」

沢村は恭子の走りたいという気持ちが強すぎてこのところの無理をしているように見えたので、すこし、目先を変えさせようとした。澤村は恭子が座っているベンチに並んで座った。

「焦つたらダメだよ。この病気でここまで回復したことと血体が奇跡といつてもいいくらいなんだから、これから先のこととは全部余計な財産としてありがたく思つね。とにかく、とにかく、学校には行かないのかい？」

恭子は沢村から“学校”といつ言葉を聞いて胸が躍るのを感じた。

「学校ですか？」

「そうだよ。本当なら高校生なんだろう？ 病気で受験できなかつたと聞いてけど、来年、もう一度受験するんでしょう？」

「学校か・・・病気になつてから、学校に通うなんて考えてなかつたなあ」

「そりや、変な話だな。それは走れないからかい？ 学校つて、陸上をやるために行く所じゃないだろ？」

「そうですね」

恭子は高校へ行くことはあきらめていだが、沢村の話はもつともだつた。

そう言えば、悠斗も怪我で選手としての夢はあきらめたものの、沢村のようにスポーツ医学の道を志している。

「来年、もう一度受験しよう！ いいえ、来年ダメだったら再来年も」

「そうそう、そうじゃなくっちゃ！ 今の状態なら、学校に通う分には何の支障もないよ。但し、体育の授業は受けられないかもしれませんけどね。でも、来年の4月まではまだ半年あるんだ。ひょっとしたら・・・あくまでもひょっとしたらだけど、そのころに

はもう少しこの感じになつてゐるかもしないしね」

沢村はそう言つて恭子の肩をぽんと叩いてから席を立つた。

拓は、引っ越ししてきてからも、時間があれば恭子のジムに通い、リハビリを助けた。

恭子も、拓と一緒に、頑張れたり、何より高校に入るところ田中標準でできたので毎日が充実して毎日があつといつ間に過ぎて行つた。目に見える進歩はなくても恭子は満足だつた。

しかし、それは決して諦めたということではなく、長いスパンでやつていこうと考えたからだつた。

3月、恭子は見事に第一高校に合格した。

陸上部のマネージャーとして、ひと足早く入学した田中美由紀や同級生になつた宮下麻衣子たちと再び陸上といつステージの端の端に足を架けた。

学校に通いながら、毎日ジムにも通いリハビリとトレーニングを続けながら、スポーツ医学の勉強を始めた。

ジムには拓も付き合つてくれた。

拓は「マイペースでいいから」と笑顔で励ましてくれる。

この「これから恭子は、はつきりと拓を一人の男性として意識するようになつた。

家に帰ると、母親の早紀と一緒に台所に立ち、料理の修業も始めた。走ることだけ考へてきた以前に比べて、いろんなことを学び、経験することができるようになつた。

恭子は、病氣で走れなくなつたことを少しも後悔していない。

むしろ、病氣をしたことにより、人の心の温かさや思いやりのありがたみを身にしみて感じることができたし、リハビリを続けることで忍耐力や精神的な強さと弱さを知り、どう対応すればいいのかと

いうことを学ぶことができた。

これらのこととは、今後の恭子の生涯でかけがえのない財産となるだ
ろい。

拓は、恭子のリハビリを助けながら仕事もそつなくこなし、実力
で出世して行つた。

ランナーとしても常にトップを争い注目され続ける存在になつた。
そして、何より、恭子と一緒にいることで、「守るべき人がいる」
ということを自覚していた。

子供のころに夢で見たことが現実になり、漠然とした形がはつきり
とした形になつて自分を支えていることを実感している。

恭子の卒業式。

校門で待つていた拓は、恭子の手を取り、左手の薬指にそつと指輪
を滑らせた。

晴れ渡つた青空。

決勝のレースを行うには絶好のコンディションになつた。
選手たちは、既にスタートラインに並んでいる。

場内放送でファイナリストの名前がアナウンスされる。

1コース、吉見加奈 福岡城西高校。

2コース、松本洋子 大阪天王寺高校。

3 ハース、宮下真弓 広島尾道高校。

4 ハース、西崎百合 東京城東第一高校 . . .

スタンドでは、孫の応援に駆けつけた三浦孝幸とお馴染みのメンバーたちが大獅旗を振りかざし、西崎百合の名前を叫んでいる。恭子と拓はその中で、そつと娘の姿を見守った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0409e/>

ボクがささえてあげるから

2010年10月13日15時14分発行